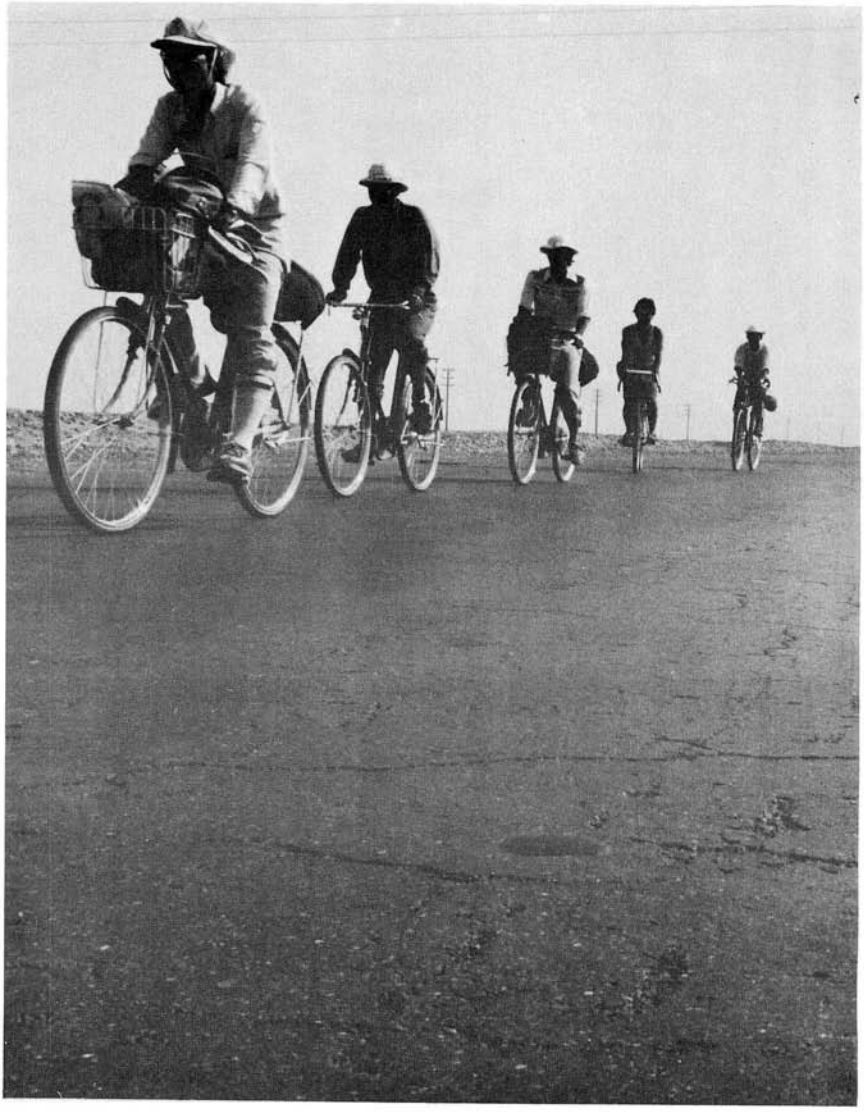
中国合宿報告書

1981. 7～8

早稲田大学ワンダーフォーゲル部



「ゴビタンを西へ」

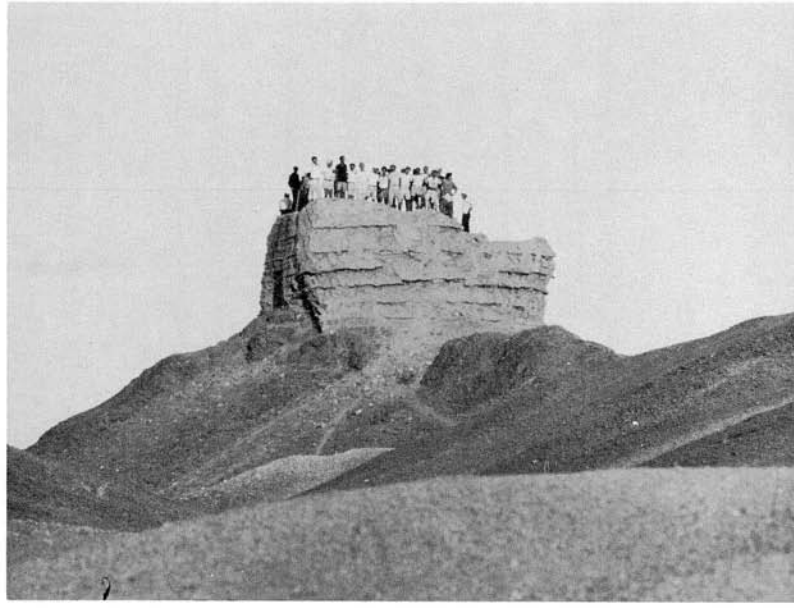
「酒泉中学校出発前」

酒泉にて

嘉峪関城内にて

「空心墩烽火台にて・敦煌まであとわずか」

「敦煌・鳴沙山」



「陽関で唱う「都の西北」」

「南湖人民公社の午後」

目次

巻頭言

中国西域の旅……部長　神沢惣一郎……1
中国遠征を支援して……OB会長　手島宏……7
中国合宿を終えて……監督　青木稔……9
海外合宿に参加して……コーチ　土屋猛……14
中国合宿回想録……主将　佐藤佳一……18

計画概要

趣旨……24
隊員編成……24
計画概要……26
中国合宿までの部活動概要……27

係別計画と報告

交渉・渉外記録……佐藤佳一……40
資金計画・会計報告……佐藤佳一・庄和也……45
公文書取得……53
連絡網・事故対策……佐藤淳……58
装備係報告……岡聡……62
自転車係報告……広瀬明彦……68
食糧係報告……寺沢秀記……72
医療係報告……原英泰……75
気象係報告……広瀬明彦……82
トレーニング係報告……片岡正光……86
カメラ係報告……片岡正光……87
おみやげ……庄和也……91
中国語学習会と中国研究ゼミナール……庄和也……92

行動記録

概念図……97

中国合宿日程概略……98
調査記録……佐藤佳一……100
行動記録……佐藤佳一・佐藤淳……105
中国合宿総括……佐藤佳一……144
在日本部記録……手島宏……146

寄稿文

日本の皆さんへ……谷慶春……148
旅の印象……149
中国合宿報告書に寄せて……長谷部友樹……151
未知への挑戦の重み……杉山克己……155
神鳥徒歩旅行讃歌……長沢和俊……157
あの感激を大切に……白西紳一郎……159

感想文

雑記……川相智史……162
逆噴射合宿……芥川泰男……164

中国で絵を描いて……正田益司……165
個人的な反省……佐藤淳……166
中国合宿の収穫……関口勝正……168
暗中模策の日々……片岡正光……168
雨……庄和也……170
蘭州最後の夜……岡聡……172
中国学生気質……寺沢秀記……175
WANDERER IN CHINA……原英泰……178
中国合宿 ―その光と影―……広瀬明彦……179
回想……飯田隆行……183
中国合宿を想う……大家敏宏……185
中国合宿感想文……栗原勝義……185
不知道 ―ブチタオ―……三宅一郎……187
私の見た中国人……山口浩……189
中国合宿後 ―その二―……渡辺仁……191
関係者・協力者リスト……195
編集後記……201

巻頭言

中国西域の旅

部長　神澤惣一郎

早稲田大学ワンダーフォーゲル部では、昨年の夏、一カ月に亘って自転車で中国シルクロードの遠征を行なった。それは中国の西域にある河西回廊の要衝・酒泉を発し、嘉峪関－玉門鎮－安西－敦煌を経て、さい果ての地・陽関に至る六百キロの旅である。ゴビ砂漠からタクラマカン砂漠に至る行程を自転車で走破することは、日本ではもとより中国でも初めてのことであったので、中国側の力の入れようは並大抵のものではなかった。そのことは中国側のとった措置にありありと現われていた。この遠征隊の編成は、早大側では学生・OBを含めて二十三名であるが、中国側では十七名であり、この中には旅行社の方々をはじめ、通訳二名、医師二名、コック二名、報道班員一名、酒泉中学の教員五名が含まれており、さらにライトバン一台とトラック一台が配備されていた。このため遠征隊は機動力をもつ四〇名の大キャラバンとなった。私は当初この編成について知らされたとき、すこし大げさすぎると思った。しかし砂漠の中で行動するようになってから始めてこの措置が理解できた。

学生たちは中国の人たちと共にペダルを踏みながら、延々と続く砂漠の路を走って往った。二台の車は一行の後になり先になってこれに続いた。中国側の幹部と私とはライトバンに分乗し、気分のすぐれぬ者があると車に乗せた。またトラックには大きなドラム缶二つとプロパンガス二本、それに穀類、果物、野菜、肉などを積みこんだ。トラックは昼食予定地や幕

営地に先に着いていて、コックさんたちがあらかじめ、食事のための下準備をはじめていた。私達は当初、行く先々のオアシスで食物の買い付けをして、自分達の手でのみ食事の仕度をするつもりでいたが、砂漠の状況はそんななまやさしいものではなかったのである。

今度の遠征で一番困った事は、学生の病気であった。学生が次々に吐き気や下痢を催し、高熱を出すので、私は途中、何度か、この遠征の計画に賛同し、自ら乗りこんで参加した事を後悔した。ワンダーフォーゲル部の学生たちは、普通の青年たちよりもはるかに鍛えられている筈であるが、砂漠には勝てなかった。しかしこの危機も医師たちの徹夜の看病で切りぬける事ができた。

私達の行手にはいつも茫茫としたゴビタンといわれる荒野が続いていた。しかし砂漠の空は青色というよりはエメラルド色で明るく、ゴビの原野は殺伐な感じを少しも与えなかった。砂漠の温度は普通四〇度前後であるが、強い日の光りの砂漠への照り返しによって、地表温度が六〇度近くになる事が多い。そのため私は直射の砂漠では立っているだけでも辛かった。

このような日に私達は翰海（しんきろう）と呼ばれる不思議な現象にぶつかった。それは砂漠を往くと、前方の地平線に湖や入江が現れ、その上に島が浮んで見えてくる。近づくと、その湖はさらに後に退く。まさに幻の湖である。私達はこの現象についてあらかじめ知らされていたが、こんなにはっきりと現われるとは思っていなかった。写真にも撮っておいたが、まるで本物の湖そっくりに写っている。

砂漠の路には、ところどころに漢代に造られたという烽火台がぽつんと立っていた。また

黄土と化した砦の跡も残っていた。これらの遺跡は単調になりがちな荒野の風景に深い興趣をそえた。シルクロードといわれる砂漠の路は交易の路であるが、それ以上に戦いや防衛の路であることを強く感じた。

このたびの遠征にはいくつかの目標があったが、その一つは敦煌であった。いうまでもなく「砂漠の画廊」莫高窟に魅かれていたためである。しかし現地に赴いて強く感じた事は、画廊もさることながら、これを産み出した敦煌という都市の偉大さであった。敦煌は今から二千百年前、漢の武帝がこの地から匈奴を追い出して都城を築いて以来、河西回廊最西端の要衝となった。敦煌以西の地域をより正確には西域というのだが、西域から中原へ向う路も、中原から西域へ出る道も、ほとんど敦煌に集中した。だからこの地は昔から東西交通の一大中心地であり、交易や商業が旺んで、また東西の文明が交流した。特にインドやガンダーラで栄えた仏教はこの地を通って中原へ向った。だからこの都市は昔から商都や仏都として栄えてきたのである。

敦煌の街の西側を党河が流れているが、その対岸に沙州故城と名付けられている遺跡がある。敦煌は昔、沙州と呼ばれていたから、沙州故城とは昔の敦煌の都城の跡である。この遺跡は非常に広大であるが、荒れるにまかせられていて、すでに黄土と化した城壁や城郭の跡がるいるいと残っている。このほぼ中央に、白馬塔という九重の仏塔が淋しそうに立っていた。この塔は六朝時代に羅什が敦煌滞在中に愛馬に死なれ、その霊を弔うために建立されたものだという。羅什はインド人を父にもつ、仏典の漢訳に大きな業績を残した傑出せる学僧

である。沙州故城といい、羅什ゆかりの白馬塔といい、敦煌の栄華を示す名残りである。

敦煌の「敦」は「大きい」ということであり、「煌」は「盛ん」ということであるから、敦煌は「盛大」という意味である。まさに敦煌は文字通り盛大であり、世界屈指の名邑である。敦煌が大砂漠の真只中にありながら、莫高窟という世にも稀な、砂漠の大画廊を造り出したのは、この「盛大」さのためであり、この都市が豊かな富とすぐれた文化をもっていたからである。敦煌は現在近くの人民公社をあわせて人口十一万人余の、農作物の集散地であるが、水に恵まれた樹木の茂る美しいオアシス都市である。

私達は敦煌市街の南にある楊家橋人民公社に一週間ほど滞在し、ここを拠点にして敦煌周辺の自然や遺跡を見てまわった。ここでの最高の景勝地は鳴沙山であろう。この山は敦煌の街からも見え、自転車で一時間もあれば行ける。鳴沙山は単一の山ではなく、百mから百五〇mぐらいの高さのある、砂の山が延々と二〇キロも続いている山塊である。この山に入ると、まるで砂の海の中にいるような気持ちになる。しかし砂といっても、わが国の海浜や川原にあるような、ざらざらしたものではなく、はるかにきめの細かい、黄色い粉末状のもので、しかもしっとりとしている。この流砂の原は綾なる風紋を描き、見事なシルエットを作り出している。この砂の海の中に、月牙泉という美しい泉がある。この泉はその名の通り、その形が三日月のようであり、象の牙のようでもある。この泉は年々水が涸れて、現在、長さ百m、巾二〇mぐらいになっている。その畔の台地には崩れた土塀や家の跡が残っていたが、道教寺院の跡だという。この泉は敦煌の人たちから神仙の住む場所とされていたのであ

る。泉には水藻が繁茂し、その周辺には青草が生えていた。赤トンボや塩辛トンボが飛んでいる。一面の砂の海の中にどうして水藻や草が生え、トンボが飛んでいるのか、まったく不思議でならなかったが、水のあるところには生命が育ったのだと思い、感動した。

莫高窟はこの鳴沙山の東端にある崖に掘られたもので、敦煌の南二十五キロのところにある。石窟の中には二、〇〇〇点の塑像があり、すべての壁画を横にならべると、その長さは四十五キロに及ぶというから、この画廊が如何に巨大なものであるかがわかるであろう。私達は莫高窟の前を流れている大泉河の川原に二泊三日の幕営をし、案内者の説明を聞きながら、代表的な壁画や塑像を見てまわった。中国人の参観者も多く、北京から絵画の学生たちが来ていて、しきりに模写を試みていた。日本人や香港の観光客も数組来ている。数日前、鄧小平副主席夫妻もはじめて莫高窟に来られて、熱心に参観されたとのことであった。窟の対岸の台地には、平屋のホテルが造られつつあった。莫高窟周辺の状況は速いテンポで変りつつある。

（早稲田大学商学部報「甍」七三号より転載）

中国遠征を支援して

稲門ワンダーフォーゲル会
会長　手島　宏

当部の海外遠征も第一回の台湾遠征に始まり今回の中国遠征で五回を数えるに至った。ＯＢ会としては今回の遠征について五十五年その計画を耳にしたが、当時ＯＢ会の懸案事項、行事が重なり、現役部の遠征活動についてその多くを知り得ない状態であった。

五十六年三月、遠征先である中国の関係機関とのコンタクトが進み、遠征計画の概要の報告がありその大要を知ることになった。その矢先の四月末に七月下旬より三十余日に亘る遠征が決定した旨報告され、その支援要請を受けた。ＯＢ会としては、いささか急な事でその対応に戸惑ったが、遠征先の国情もあり、止むを得ないことゝし、急ぎ計画を検討の上、その支援を決したわけである。

以後ＯＢ会理事各位の精力的な活躍により、会員諸姉兄の協力を得て、その支援活動が短期間になされＯＢ会としての役割りを果し得たことは誠に幸いなことであった。

この遠征は前回のインド遠征と同様、フイルドにおける自転車旅行の遠征であった。遠征先の国情もあり、当初計画の変更も多く、一定制限の中での活動が、単なる観光旅行になることを恐れたが、結果として装備調達、又計画遂行のための交渉等、多くを学んだであろう事は勿論、帰国後の報告で隊員の諸君が広大、且つ厳しい自然に直面し、その中に置かれた

自分自身を経験し、又其処に生きる人々の姿に接し、人と自然の関わりを体験し得た話を聞き及び、単なる観光旅行に終らなかった事を喜んだわけである。

これ等の体験は貴重なものである。部の活動は、その活動実績そのものを誇るものではない。夫々の活動の計画規模の大小ではなく、その活動で得られた内容を総括し、評価すべきである。

遠征に参加した隊員が各人各様に得たものを成果としてふまえ、ワンゲル活動の原点を見失うことなく、今後の部活動に反映せしめて欲しいものである。新鮮、且つ活力あるワンゲル活動の新らしい発想の源とすべきである。

一つの成果は、次なる新たな発想を生まなくてはならない。道は人の歩いたあとに作られる、との先人の言がある。新しい道を作るべく、常に先行し、挑戦する姿勢が諸君の大学生活を充実せしめ、その結果が諸君が部にのこすことの出来る遺産となり得るのである。

今後の現役部のより充実した活動を期待するものであります。

終りに大学当局をはじめ、ご尽力を頂いた関係者各位、又併せて物心共々に支援頂いたOB会会員の皆様に、心からお礼申上げます。

中国合宿を終えて

監督　青木　稔

我が部の求める自然は多岐に渡っている。その中での活動の楽しさは無論の事、合宿を遂行してゆく中で形造られる有形無形の精神的成長を大きな指標とする我が部に於いて、海外活動も又、魅力ある方法として過去四回の経験を積むに至っている。そして前回のインド合宿（一九七八年三月）では、デカン高原の農村地帯を自転車で走り、広大な自然と共に、そこに生活する人々の中に入ってゆく事で、ワンダーフォーゲル活動の領域を拡げる努力がなされてきた。

その年の新入部員はいきおい上級生の経験談を聞かされた訳であるが、この新人等が考え出した計画がシルクロード自転車行である。

はじめは、西安―カシュガル間の四、〇〇〇Kmはどうかというものであったが、夢の大きさは買えても、時間面、経済面から難しいということで、シルクロード入口の河西回廊に目標を定め具体化していった。折りしも七月、コースに当る甘粛省中国国際旅行社の訪日団に面会する機会を得、実現の可能性の打診をした訳である。

谷慶春氏（蘭州分社社長）。お会いした時両手で包み込む様に握手をされた手が暖かく大きかった。そして今一人、目の鋭い小柄な団員がいた。自転車や活動形態について問題点を挙げてゆく。あの色黒の劉大庸氏が印象に残った。そして我々は一年後、上海でその劉さん

に会うことができたのである。

この間の現役サイドの準備に心配がなかった訳ではありません。

中国を旅する場合、受入れ側の中国国際旅行社の許可が必要であり、それには日本側の旅行社を介さなければならないという事で、いきおい活動の自主性がそがれるのではないかといった危惧であります。いわゆるパックの旅行になってしまうのではないかといった事ですが、これは行く為の必要条件でもあり、それでもシルクロードを選んだという事は、部員達の言い様のない夢が、それに勝っていた訳であります。

一方、リーダー達の同期で、退部した部員の父上である杉山克己氏が毎日新聞社におられる関係で、中国の話をうかがうと同時に、最終的に今合宿の後援を同新聞社で引き受けていただけた事は、単に今回の活動の報道という事に止まらず、ワンダーフォーゲル活動の一端を広く社会に知ってもらう上で有意義な事であったと思います。

又、伴走車がつくという事で、神澤部長に同行をお願い致しましたところ、本庄の準備でお忙しい中、団長を引き受けていただけました事は、部員達にとっても大きな心の励みでありました。

三月末に甘粛省国際旅行社より許可の手紙を受け取り、四月下旬に細部の打ち合わせの為に主将の佐藤佳一が蘭州に飛び、最終的な決定をみた訳であります。

この様に、立案してからの期間は二年近くもあった訳ですが、実際に行ける段になったの

が出発の三ケ月前であり、その後の準備は大変あわただしいものでありました。

しかし、この間の中国側の受入準備は我々以上に困難であった事は想像に難くありません。自転車で砂漠の道を本当に走れるのか、そして泊る場所や食料の確保はできるものかどうか。劉さんは車で全コースを走ってくれたそうであります。

シルクロードを、天幕、自炊生活をしながら自転車で学生が、それも大挙して走るという事は、我々にとって初めての事であった様に、中国側としても初めての体験であった訳であります。

受入側の責任者として、初めから終りまで同行した劉さんが、これは帰途の蘭州でこう言っています。

「この様な活動を受け入れるのはこれが最初で最後になるでしょう。しかし非常に楽しい時間でもあったので、又受け入れてしまうかもしれません」

私は、一年がかりで準備をし、我々の気持ちを受け止めてくれた中国国際旅行社の方々に心から感謝すると共に、お互いに良き時間を持てた事を大変喜ばしく思った次第であります。

今合宿は、車二台を含み中国側十七名との合同の旅となりましたが、我々は自転車の隊列から食当の仕方、荷物の分配から病人の処置等の諸々の事柄を現場で相談しながら決めてゆきました。その中で「中国では外国からきた旅行者はお客様なのです」という言葉を何度か耳にしました。我々が無事に楽しい旅をしてほしいという考え方は終始変らなかった訳です。

ダム放水で予定コースの一部が洪水になるという話を聞いて、双塔ダムより安西へとバス

で避難した雨の夜、割れた窓より吹き込む凍てる様な雨風を身をもって防いでくれた旅行社の三人（劉大庸氏、季　氏、谷　氏）の姿は、部員達に大きな感動をもたらした。一方、酒泉からの自転車で走り出した初日嘉峪関の城内に天幕を張り、大円陣で昼食を食べた後、私はこんな言葉を聞きました。

「土の上で食事をしたのはこれが生まれて初めてです。」

この事でも解る様に、学生である我々の希望にそう方向で最後まで配慮してくれていた事も確かであります。

見晴かす地平線、揺めく蜃気楼、タクラマカンに沈む夕日、ラクダや羊の群れが道を横切り、砂の海にぽっかりとオアシスが浮ぶ。そして蘭州大学生とのなごやかな歓談、競技場でのバスケット友好試合、酒泉公園での大歓迎夜会、人民公社での暖かいもてなし、そこに咲くアサガオやヒマワリの鮮やかさ。

河西回廊の自転車の旅は、広大な自然と共に、暖かな中国の人々の心を渡り歩く旅でもあったのです。

私には、中国の人々が、やんちゃな息子を暖かく見守る親の様に、その大地と共に学生達を受け止めてくれていた様に思えてなりません。

中国合宿は無事終わりましたが、今回は行ってみなければどの様な活動ができるのか不確定な要因があり、リーダー達も苦慮し、行きつ戻りつしながら実現にこぎつけたものであります。三人という少ないリーダー層で、私から見て決していわゆる強いリーダー達であった

とは思っていません。しかし思い悩みながら一つのワンダーフォーゲル活動を完遂させた姿は、貴重な体験と共に部に残るものと確信しております。

最後になりましたが、いつもながら現役部をご指導下さいました滝口宏先生、窪田登先生、川島正之先生はじめ体育局、体育館の皆様、物心両面のご支援を下さいましたOB会の皆様、特に準備中、貴重な助言をいただき、又、実技の日程にご配慮いただいた山口純一OB、OB会の窓口として種々相談にのっていただいた石館昌二OB、在日本部をお引き受けいただいた手島宏会長に心より感謝致したいと思います。

又、今合宿の後援をしていただいた毎日新聞社、現地との折衝にお力添えいただいた新日本国際旅行社の渡部道子社長、長谷部友樹氏、中国へ紹介文をお出しいただいた河野謙三先生、秘書の今井武志先生、そして具体的な助言をいただいた長沢和俊先生、日中協会の白西紳一郎先生、他、多くの皆様のご支援に対し、厚く御礼申し上げます。

河西回廊は、今はもう凍てついた季節の中に、静かな時を迎えた事でしょう。

（昭和五十六年十二月記）

海外合宿に参加して

土屋　猛

昭和四十三年、早稲田大学に入学して以来のワンダーフォーゲル部との付き合いも、あっという間に十四年が終ろうとしている。その間、現役時代の昭和四十四年春の北ボルネオ海外合宿の参加を最初として、以来、コーチとして、五十三年春のインド合宿、そして今回の中国合宿と、三回もの海外合宿に参加させていただき、私のワンダーフォーゲル活動のみならず、私の人生にとってもこの上ない充実した活動を送って来たことを、まず報告したい気持で一杯である。

初の海外合宿である北ボルネオ合宿へ参加した時は、一年生部員であり、何の苦労も知らずがままに参加した合宿であった。しかし、この合宿の持つ意義は、三十年の我ワンダーフォーゲル部の歴史にとって、非常に高いと思われる。当時一年生部員であった私にとっては知る由もなかった訳であるが、海外での合宿活動を考える上で無くてはならない合宿であることを多くの先輩から教えられて来た。そこには、昭和三十七年の台湾遠征。そして、第二回の海外遠征を目指し、実現には至らなかったが、十七代の年間方針に掲げたアフガニスタン計画。このアフガニスタン計画が諸々の事情で挫折したことにより、当時のOB、OG諸氏が、その貴重な体験を元に何とかその夢を後輩へとエネルギーを傾注してくれたことが、

血となり肉となり、第一回の北ボルネオ海外合宿成功へと導いてくれたのではないかと、私自身は認識しているのである。大いに評価できる合宿であった。

又、私は、北ボルネオ合宿報告書の中で、十七代山本隆夫氏の文章に、「大学を卒業して我々は又動き出した。我々が新人の頃、零から出発したように、零から出発しなければならない後輩が、何人も続いているのだ。彼等の夢をはぐくみ、我々のおかしたミスを彼等が繰返すことのないよう、見守ってやらなければならない。（中文略）。三月一日、とうとう、現役全員が思い思いの期待に胸をふくらませながら、ボルネオに向けて飛び立っていったのである。当日は、まるで自分が出かけるかのように早朝からソワソワと落ち着かなかった。羽田のデッキに立ち西の空へ消えてゆくジェット機をいつまでも見送っていると、何とも言い表わし様の無い充実感を覚えた。」と書かれてあるのを見るにつけ、後輩への思いが、そこに託されていることを大いに感じている。私がワンダーフォーゲル活動を続けて来れたのには、一つに北ボルネオ合宿があったからと考えている。

第三回のインド合宿はどうであったか。この合宿はデカン高原を横断するということで、自転車を利用した訳であるが、私のワンダーフォーゲル感には全くと言って良い程考えられなかったことである。二十代主将の吉越氏がいみじくも言っていたことを思い出す。「ワンゲルというのは亀のごとくこつこつと歩くものだと思っていた。」と話してくれたことに、私は全く同感なのだ。

時代は変われば変わるものである。初めてコーチを引き受けた当時、二十八代の年間方針

に「精神的雑居性」と言うのがあった。今でも理解し難いのであるが、ともかく、この代は活動の足として自転車を利用している。そして距離も稼いでいる。この自転車利用が、二十九代諸君をデカン高原に活動の場を求めさせた一因とも考えられる。又、彼等の特徴は、「文化面」をワンダーフォーゲル活動の一環としてとらえて活動をしたことにある。そしてそれなりの活動効果はあった様に思う。彼等にとっても満足感があったに違いない。このことは、ボルネオ合宿と比較対照するには難しいことだが、それなりのワンダーフォーゲル活動に大きな問題を提起してくれたように思う。

さて、今回の中国合宿はどうであったか、現役諸君には悪いが、正直なところインド合宿程の代としての方針に信念がなかったような気がする。中国という歴史のある地域を選択したことは評価できる。しかし、あれだけの労力と金を費してまで行くだけの価値ある地域であったかどうかには疑問を持った。これは私自身コーチをしていて大いに反省した面なのだが、私には今回の計画には無理があったように思われる。特に資金面での甘さが目立ち、行くことのみが先行した感があった。したがって部全体に、肉体的、精神的な面での甘さが合宿中随所に見られた。このことは良い活動を目指していく上では、あってはならない面であるので残念である。これは当然我々指導部の責任ではあるが。現役諸君はどうであったのか。本当に充実した海外合宿であったのだろうか。

このようなことを書くと、数々の御支援をいたゞいた方々には何とも申し訳ない気持になるのであるが、私は無駄なことをやることも現役であると考えたい。

しかし、海外に出て活動していくエネルギーだけはいつまでも持ち続けていってもらいたいし、私自身も今回の中国合宿に参加した反省点を次回の海外合宿に生かさせたい気持である。

三回の海外合宿に参加し、何となく流れを自分なりに追って見た。次回の海外合宿に期待したい。

最後に、自分としては北ボルネオ合宿のような足で稼ぐ活動をもう一度体験してみたいと思う。

中国合宿回想録

主将　佐藤佳一

一面まぶしい黄色い大地、その中で点々と青く輝く水路、古風な民家―

私が四月に打ち合わせのため調査に行き、上海上空から初めて中国を自分の目で実際に見た瞬間である。長い間一心に中国に行くことを願望し、あこがれの地であったので、この情景が深く瞼の裏に焼きついている。上海空港に降り立ち、ホテルまで車で移動する道すがら黄色く見えたのは菜の花であることがわかった。何十年か前の日本を思わせる情景、道にあふれんばかりの人と自転車の波、見るものの全てが新鮮で、いい知れぬ興奮と感激を覚えた。

そして蘭州へ。シルクロードの起点である西安を過ぎると緑がまるで見あたらない。まだら模様のはげ山がどこまでも続いている。こんなところを自転車で走れるのだろうかという不安にかられた。

「シルクロード」―　歴史のロマンを秘め、厳しい自然環境とともに、我々の心を魅了し、我々が三年間追い続けた言葉であった。その中でも中国は最近まで、「近くて遠い国」とされ、開かれてきたとはいえ、ツアー以外で入国するためには、相当な困難が伴うであろうことは容易に予測された。本当に実現できるのだろうか――――この不安は出発直前までつきまとった。

交渉、準備過程において、中国という特別の国情と絶対的な情報量の不足から、暗中模索、

足踏み状態が続き、常に、こんなことではいけない、どうにかしなければというあせりと、現実とのギャップのジレンマに悩まされ、心に重くのしかかり、押しつぶされそうな時もあった。

しかし、我々の「何としても実現させなければならない」という意地と、熱意だけを支えとした拙いアプローチにもかかわらず、多くの方々の温い御協力と、度重なる幸運に恵まれ、許可を得ることができたが薄氷を踏むような心境であったというのが実感である。

この計画を実行するにあたり紆余曲折を経ながらも真剣にとり組み、みなで協力し合ってさまざまな障害や問題点を一つ一つ乗り越え、何とか計画を全うできたこと、歴史を秘めた中国シルクロードの広大な自然と、その厳しい自然環境の中で力強く生活している人々の姿に触れ、同行して下さった十七名の中国の方々のみならず、多少なりとも現地の方々と相互理解のもとに友好を深めることができたことは、何ものにも代え難い学生時代の体験として、深く部員一人一人の心の中に印象づけられ、今後のワンゲル活動、或は人生にとって、必ずプラスになるものと信じている。

また、この計画を実現できた背景には、先輩方のワンゲル活動に対する真摯な姿勢、つみ重ねられた歴史の中に、我々が海外合宿を行えるだけの素地が内在していたことは確かである。

準備段階から御指導していただき、お忙しい中参加して下さった神澤部長以下、土屋コー

チ、OBの方々のみならず、物心両面から多くのOB、OGの諸先輩方に御援助していただいた。ワンゲル関係以外にも、中国側への交渉の窓口をお願いした新日本国際KKの皆様をはじめ、国内外を問わず多くの関係者の皆様のお世話になりました。我々の未熟さにもかかわらず、この計画を成功できたのも、以上の皆様方の並々ならぬ御協力があったからであり、この場を借りて、心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

しかし、今回の合宿を振り返ると、謙虚に反省しなければならない点はいくらでもあり、ただ自己満足に終ってはいけない。そこに報告書の意義も見い出せるものであり、いかにこの合宿を位置づけ、今後の活動に反映していくかが、重要なポイントであると思う。その意味において、今回の中国合宿は、今後の活動にとって、いいにつけ、悪いにつけ示唆の多い合宿となるものであると考えている。

今回の合宿を通じ、中国においてワンゲル活動を行うことの難しさを痛感した。真似ごとをしただけだと批判されても否定できない。実際に自由な活動はかなり制限されていたし、何かとアレンジされてしまい、同行の中国の人達に甘えてしまった部分があったからである。しかし現在の中国の状況の中では、最大限に受け入れてもらえたのではないだろうか。御存知のように中国にはワンゲル活動はなく、サイクリングも普及していない。風俗・習慣が違う異国では、それぞれの国にその国の事情というものがある。同行してくれた中国の方々が、我々の活動を理解しようと努力してくれた姿に、時には痛ましさを覚え、無理があるように

感じた。計画を何とか成功させようと団結し、我々に対する特別な配慮、思いやりには頭が下がるばかりであった。当初学生と一緒に行う予定であったのが、急拠変更となったのは残念だったが、計画をほぼ終了し、敦煌で十七名の中国の方々全員に、今回同行してもらったノートの中に、日中友好とともに、ワンゲル精神に触れたものが多く、多少なりとも理解してもらえたのではないかと思い、うれしかった。

日中の国交が正常化し、丸十年の歳月が流れたとはいえ、中国でのワンゲル活動を行うためには、国情とあわせて、受け入れ体制が整っておらず、無理があった。それはある程度予期されていたことでもあった。

その他、費用の点で、通常の中国旅行に比べれば格安で、幸福であったが、それにしても部員に多額の負担をかけてしまった。アプローチにしても、許可がおりたのは出発のわずか四か月前のことで、本格的な準備は、わずか三か月間というあわただしいものであった。しかし、絶好の機会を恵まれ、中国に先鞭をつけることができたことは、意義のある活動であると信じている。

海外合宿を行うためには、大変なエネルギーが必要であり、部員が一致団結し、確固たるチームワークのもとに、組織力をフルに活用しなければ実現はおぼつかないものであろう。さまざまな問題（安全、時期、新人、資金、地域、その他）がつきまとう。

今後海外合宿を行う際には、ワンゲル活動とは何かをつきつめて考え、はっきりとした目

的意識のもとに、ものおじせぬチャレンジ精神と、バイタリティを持ってあたって欲しい。道は必ず開けるはずである。

後輩の今後の意義深い活動を楽しみに、見守っていきたい。

計画概要

趣　旨

早稲田大学は一九八二年に創立百周年を迎えます。そして我々ワンダーフォーゲル部も昨年記念すべき創部三十周年を迎えました。三十年来我部は「我々の活動のあるべき姿」を一生懸命に模索し、そのための努力を重ねてきました。我々はこの先導者の真摯な姿勢を無駄にすることなしに、この記念すべき機会にふさわしい活動をしたいと考えています。

我々の求めているワンダーフォーゲル活動の意義は単に山岳地域を跋渉することにあるばかりでなく、あらゆる自然的、人文的、社会的環境を対象に渡り歩き、新しい自分を創造することにあると考えています。日常活動や技術習練の努力の積み重ねから生まれた過去4回の海外活動もそうした意義を具現化したものですし、またその活動によって次代の創造性が培われてきました。

ところで「河西回廊」は中国シルクロードの中でも民族間の興亡の歴史の跡が強く現存している地域であり、また東西文化交渉史上重要な道筋でもあり、魅力あるところと思います。さらに周囲のゴビの砂漠の気象環境も我々日本人には経験なしには全く実感できるものではなく、未知のものです。

我々が我々にとって未知の地域である「河西回廊」を中国側の御協力のもとに自転車で走破し、中国の方々と交流することができたならば、両国の友好はもちろん学生としての我々自身も人間的に深まるのではないかと思います。その意味において我々は自転車を使って自分たちの労力のみで移動し、天幕に寝泊りし、食べ物も現地の産物を料理して生活するという活動を考えています。そのような活動を通じてこそ現代シルクロードでさまざまに生活している人々とより確かな交流ができるものと信じて疑いません。

そしてこの計画がささやかながらも両国の友好関係を一層深めることを祈りつつ趣旨とするものであります。

隊員編成

団長	神沢惣一郎	（部長）	60才
隊長	青木　稔	（監督）	35才
副隊長	土屋　猛	（コーチ）	31才
副隊長	川相智史	（OB）	24才
隊員	芥川泰男	（OB）	22才

隊員　正田益司（OB）23才

隊員（学生L）佐藤佳一（商学部四年）23才

〃（学生SL）佐藤　淳（教育学部四年）21才

〃　関口勝正（商学部四年）22才

〃　片岡正光（教育学部三年）20才

〃　庄　和也（商学部四年）22才

〃　岡　聡（第一文学部二年）20才

〃　香山武志（法学部三年）22才

〃　寺沢秀記（法学部二年）20才

〃　原　英泰（教育学部二年）20才

〃　広瀬明彦（教育学部二年）20才

〃　飯田隆行（商学部一年）19才

〃　大家敏宏（理工学部一年）19才

〃　栗原敏宏（社会科学部一年）20才

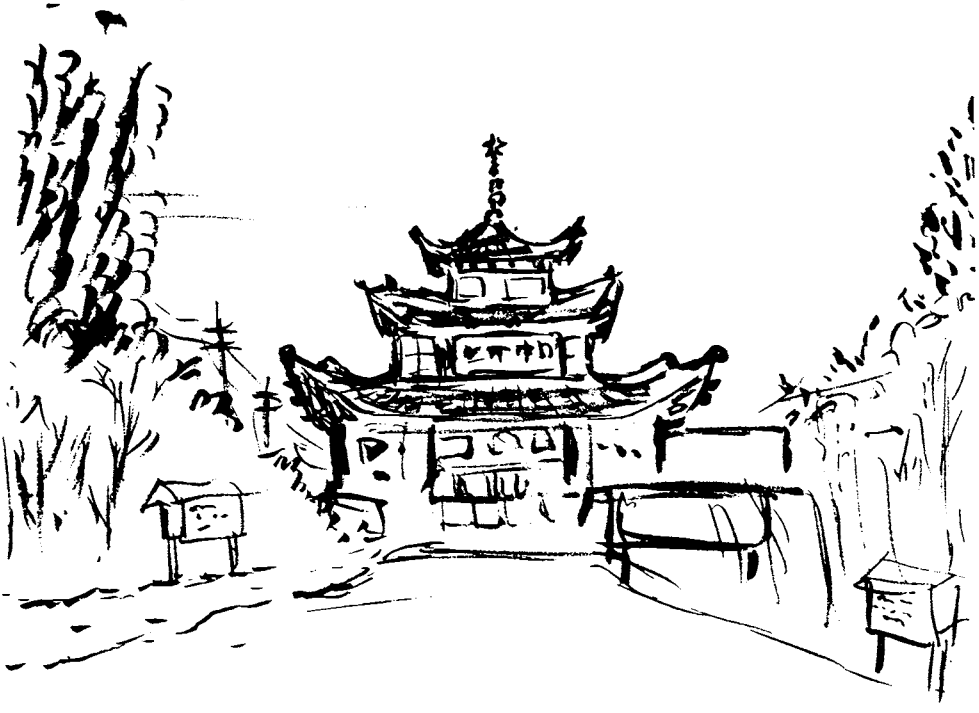
〃　是枝信男（理工学部一年）18才

〃　三宅一郎（政経学部二年）21才

〃　山口　浩（第二文学部一年）21才

〃　渡辺　仁（第二文学部一年）18才

以上23名



計画概要

一九八一年七月二一日（火）から八月二三日（日）までの三四日間の日程で以下のように活動いたします。

① 蘭州においてはワンダリング活動を蘭州大学学生と共にする。中国にワンダーフォーゲル活動を紹介する。

② 酒泉～敦煌の中国シルクロード河西回廊を自転車で走破する。全行程、酒泉師範学校の学生と行動を伴にし、また各オアシスにおいても人的交流を深める。

この間、私達は自炊による天幕生活を原則とし、活動いたします。

なお、自転車隊には自動車を併走させ、中国人医師の方に同行願い安全性の確保を図ります。

大日程

一九八一年七月二一日　成田発
七月二四日　蘭州着
七月二四～二六日　蘭州にてワンダリング活動
七月三〇日　酒泉発
八月一三日　敦煌着
八月一八日　蘭州着
八月二一日　上海着
八月二三日　成田着

中国合宿までの活動概要

１９７９年	
6.２２	第１回２年会、４年時（１９８１年）に海外合宿を行う意志を固める。
２９	第２回２年会、候補地について。モンゴル、ニューギニア、シルクロードなどがある
7.　6	第３回２年会、候補地の検討。資料収集を各自の課題とする
8.　6～	
２５	＜夏合宿＞　東北地方一帯
１０.１３	第４回２年会、候補地を中国シルクロードｏｒニューギニアに絞る
１６	部員総会、監督に海外合宿を行いたい意向を伝える
１７	１、２年会、海外研究会（海研）発足を決定。２年－３名、新人－３名、合計６名
１９	海研、候補地を中国シルクロードに決定
２４	１、２年会、海研に入っていない新人を勧誘
２７	日中友好協会訪問。計画書を作成し、交渉が必要であるとのこと。
１０.３１～	
１１.　4	＜秋合宿＞　尾瀬
9	海研、ＮＡＳ･Ａの地図購入。コース、時期、形態の検討
１１	監督宅訪問、２年３名、海外合宿について
１２.　6	海外研究機関紙である「東西南北」発刊，全ＯＢに配布
１５～	
２８	＜冬合宿＞　妙高
１９８０年	
1.　8	新日本国際株式会社、長谷部氏と会談
２１	新日本国際ＫＫの提供により、中国シルクロード映写会、トルファン、ウルムチ
２４	海研、形態を自転車に決定。第一次計画書の打ち合わせ
2.　1	長谷部氏と会い、新日本国際ＫＫに中国への交渉依頼
4	第一次計画書作成。この時点でメンバー、佳一、淳、関口、片岡、庄の５名

2. 5	海研、時期を１９８１年夏と決定。気候から。
6	監督、石井・太田・川相ＯＢ、３年生に第一次計画書公表（西安〜カシュガル）
２１	
２２	海研。第一次計画書の問題点を検討。
２６	
２７	監督と会う。主旨について。中国側への打診について。
２９	監督・長谷部氏交えて会合。旅行社を通じての打診中止。
3. 5	海研、今後の対策、問題点。
１１〜	
２２	＜春合宿＞　尾瀬
4. 4	海研、くわしい資料（地図・気候）の入手法、コースの検討。
5	ＮＨＫ訪問。シルクロード担当者には会えず。手紙を出すことにする。
19、22	海研、1.資金、2.実技、3.新人、4.コースの問題点の話し合い。
5. 2〜	＜新人歓迎合宿＞　川口湖、三ツ峠ビストン
6	＜雪上訓練合宿＞　富士山７合目
１０	山田ＯＢのアドバイスをうける。第二次計画書について。
１９	第二次計画書について。役割分担。
２５	ＮＨＫ、シルクロード担当者への質問事項検討。
２８	ＮＨＫ、シルクロードチーフディレクター、中村清二氏と会談。
３０〜	
6. 5	＜錬成合宿＞　南アルプス
9	海研、コースの再検討（カシュガル〜ホータン、クチャ〜アクス）ウルムチ〜トルファン、河西回廊）の４地域。
１３	長沢教授と会談。　　交渉、地域の状況等聴取。
２０	新日本国際ＫＫ（長谷部、加藤氏）で状況聴取。
２０	中国大使館、第一書記官趙永華女史に事情聴取。
２０	長沢教授にコースの状況確認。
２３	第二次計画書完成。コースは河西回廊、蘭州〜安西と決定する。
２４	監督と面談、第二次計画書公表、アドバイスをうける。
7. 1	海研、第二次計画書の再検討。
2	海研、中国国際旅行社蘭州分社来日の件（長谷部氏より）
4	海研、新人問題（連れていくか、いかないか）

7. 6	海研、今後の予定
8	監督と会談、新人問題で暗礁にのりあげる。
9	監督・長谷部氏と会談。中国国際旅行社訪日団への正式な交渉中止。
11	中国国際旅行社蘭州分社訪日団と会談（団長 谷慶春氏以下5名） 新日本国際KKの仲介にて。at Hotel ニューオータニ 計画書を提出し打診。帰国後検討し、返事をくれるとのこと。 監督、川相OB、佳一、淳、関口。
14	海研、計画書中国文翻訳について。今後の予定。
23～28	＜実技＞ 妙高
30	長谷部氏と会談。蘭州分社の質問事項に対する返答について
8. 6	新日本国際KKを通じ、蘭州分社に質問事項の返答郵送。
7～21	＜夏合宿＞ 紀伊一帯
31～9. 2	3年合宿 委年間方針、中国合宿について
3～8	＜実技＞ 尾瀬
22	委年間方針、係の決定。
23	海研、第三次計画書について、今後の予定。2、3年全員。
24	代の引き継ぎ。
25	部員会。係別反省、代交代。
26	中国資金計画新人に発表。
27	委年間方針、係編成。
28	委年間スケジュール、年間方針。
29	委中国合宿について。
30	委年間方針、係編成、年間スケジュール最終決定。
10. 1	委秋合宿、中国、第三次（簡易計画書）について。
2	コーチと会談。
3	平山郁夫、シルクロード講演会 at 九段会館
4	監督、コーチと会談。年間方針、係編成、年間スケジュール。
6	山口OBと会談。日中協会事務局長白西氏を紹介してもらう。

10. 7	部員会。年間方針、係編成、年間スケジュール発表	7日
8	㊥第三次計画書。	
9	㊥秋合宿、中国文書計画書について、川相さんの知り合いにお願いする。	
13	㊥秋合宿、オリジナル検討。	
14	長谷部氏と面談。蘭州分社では、 ①ブイ〜チョウエキ間を検討 ②食料、水、車の手配が困難 ③計画書を甘粛省体育総会に提出した。 新人に中国合宿計画発表。	トレーニング
15	秋合宿計画書完成。 ㊥中国への要望事項の検討	
16	㊥係別年間方針チェック、春合宿について、神沢部長と会談	
18	部員総会。第三次計画書（タイプ）完成、OBに配布、里見OBと会談。 中国に要望事項発送。新日本国際KKからも発送していただく。	
20	㊥春合宿、今後の予定。 木の内・川相OBと中国への要望事項検討	
21	毎日新聞論説委員杉山氏に面談。	
23	部員会、秋合宿、秋別年間方針。 長沢早大教授と会談。	
24	OB常任理事会に参加、中国合宿のことを話す。	
25	㊥春合宿、中国合宿について。	
27	㊥春合宿、冬合宿、中国合宿。	
29	秋合宿前トレーニング最終日。	29日
30	㊥中国合宿、冬合宿。 長沢教授、神沢部長と会談。	
11. 3〜		
6	＜秋合宿＞　奥秩父	
8	㊥冬、春の負荷計画。	
12	㊥冬、春合宿、負荷について。	
13	神沢部長と会談	

11.14	㊥秋合宿の反省	
17	長谷部と会談、調査の検討。中国に打診の手紙発送依頼。コーチと会談、秋合宿反省、中国の経過。	17日
19	冬合宿前の集団アルバイト決定。日本運搬社。	
22～		トレーニング
24	冬、春合宿負荷、二隊に分かれる。	
26	㊥中国への調査の意義・問題点検討	
29	㊥ 〃	
30	監督・コーチと監督宅で会談。中国調査の件、中止。	
12. 1	長谷部氏と会談。調査中止のこと。 蘭州分社にTELして、開放されていない地域（蘭州～西安）が含まれているので分社では判断できず関係機関に依頼。可能性に関しても何とも言えないが、今年中に返事を出すとのこと。	
4	㊥今後の予定。各合宿について。	
7	法政ワンゲルとのマラソン大会。	7日
8	㊥冬合宿、その他の打ち合わせ。	
9	部員会、冬合宿について。 神沢部長と会談。	
10	里見OB、神沢部長と会談、公文書の件。	
12～		
21	＜集団アルバイト＞　そごう東京配送センター、日本運搬社 長谷部氏にTEL 蘭州分社から返事、未開放区域が含まれているため許可できないとのこと。	
22	冬合宿団配	
23～	福井先生　白西日中協会幹事長、長谷部氏と会談。	
31	＜冬合宿＞　妙高	
1981年		
1. 5	㊥中国合宿、修正案について。	
6	長谷部氏、白西氏と会談。 ㊥中国修正案作成	

1. 7	監督、コーチと会談、修正案について。	
8	白西氏と会談、修正案を持っていく。	
14	㊍冬合宿の反省	14日
17	㊍冬合宿反省、春合宿、中国合宿。	ノルマトレ
19	新日本国際KKを通じ修正案発送。	
26	白西氏と会談、交渉、その他について。	
2. 4	白西氏、長谷部氏、監督、木の内・川相ＯＢ、４年で、今後の対応について話し合い。	
9	㊍春合宿、中国、今後の対応。 コーチと会談、冬合宿反省　他。	10日
13	河野謙三参議院議員に推せん文依頼　with 監督	ワンダリングスキー
18	〃　　から推せん文受理	
19	㊍今後の確認。体育局、部長。河野代議士，長沢教授の推せん文について	
23	神沢部長宅訪問、春合宿説明。	20日
24	新日本国際を通じ、蘭州分社へ推せん文発送	
26	中日友好協会、中国国際旅行社　中国体育総会に計画書、推せん文を発送。翻訳を山崎みどり早大職員に依頼。	
3. 1	部員会、今後の打ち合わせ	
2	㊍中国だよりについて	2日
3	全ＯＢ・ＯＧに第１回中国だより発送。	トレーニング
4	部員会、春合宿について ㊍春合宿の確認	
6	㊍中国合宿の係	
7	予餞会	
9	中国合宿の係編成発表	
12	蘭州分社から新日本国際KKに許可の電話が入る。 中国国際旅行社総社よりＮＯという返事が届く。	12日
13	春合宿団配。	
15～		
22	＜春合宿＞　尾瀬 蘭州分社より返事到着、許可がおりる。 ４月に中国調査決定（４／１３～２０）	

3.24	2、3年会、今後の対応について。	
26	監督・コーチ、石井OBと会談。春合宿の反省、今後の反応。	
27	OB常任理事会に参加、中国合宿についての報告。	
29	㊍今後の部の建て直し、中国調査について。	
31	NHKシルクロードチーフディレクター中村氏と会談。情報収集、by 淳、佳一、香山。	
4. 1	㊍春合宿、上半期反省。	1日
2	長谷部氏と会談、中国調査について。	新人勧誘
3	㊍中国調査、春合宿、上半期反省チェック。 長沢OBと会談。	
4	里見OBと会談。	
5～6	＜新歓調査＞	
7	2年に中国合宿説明会 ㊍調査、新人、資金問題、新歓の打ち合わせ。	
8	監督・コーチと会談、調査の打ち合わせ、資金面でやり直し ㊍調査の資料づくり　問題点	
9	監督と会談、調査の打ち合わせ ㊍調査の資料づくり	10日
10	監督、コーチと会談、調査の最終打ち合わせ	10日
11	㊍中国調査の最終チェック 監督、4年で新日本国際KKへ、社長、長谷部氏と会談。	トレーニング
13～20	＜中国調査＞　新日本国際KK渡部社長、主将佳一	
21	3、4年会、資金計画、その他の検討。	
22	監督、コーチと会談、調査の報告、今後の対応。	
23	㊍資金計画再検討。	
24	毎日新聞杉山氏、柳川氏と会談　with 監督	
27	日中協会白西氏、神沢部長と会談	
28	部員会、新人歓迎合宿について、新人に中国合宿の説明。 体育局に中国合宿の書類提出	

4.28	毎日新聞柳川氏に後援依頼書を提出。	
30	3、4年会、中国係別ミーティングの検討。	30日
5. 1	第2回中国だよりを全OB、OGに発送、第四次計画書同封。 体育局長窪田さんと会談 新歓団配、新人歓迎コンパ	
3～		
5	＜新人歓迎合宿＞　四阿山　バラギキャンプ場	
6	渡辺社長と会談	
7	毎日新聞広告部長山崎氏と会談 ㊍中国への要望事項をチェック	
8	要望事項を新日本国際KKへ提出	
9	左近允OBと会談	
11	監督、コーチと会談、錬成合宿について	
12	OB総会に参加、中国合宿の報告、承認をうける	12日
14	神沢部長と会談。毎日新聞、毎日放送後援依頼書完成 ㊍錬成、今後の予定	トレーニング
17	毎日新聞、杉山さん、関根出版局長、サンデー毎日瀬下さんと会談 ㊍錬成合宿	
20	監督・コーチと会談。新歓反省、錬成について	
22	部員会、錬成合宿について	
23	渡部社長に会談	
24	記録会	24日
25	部員、全父兄に中国合宿計画書、同意書発送。自転車会館訪問	
27	監督・コーチと会談、中国合宿についての確認 神沢部長、青木監督、土屋コーチ、川相・正田OBの参加決定	
28	㊍今後の打ち合わせ	
29～		
6. 2	＜錬成合宿＞　八ケ岳	
3	監督と会談、資金について	

6. 3	日本自転車普及協会の大蔦さんより市川市放置自転車を紹介してもらう	
4	長谷部氏と面談。パスポート、その他	
6	千葉県市川市役所へ、放置自転車借用依頼	
7	2、3、4年、係別の話し合い	
9	福井先生と会談 第1回中国語勉強会　by　長谷部氏、以後毎週火、金、10回行う 第1回中国ゼミ。各人に担当分野を決め、中国語勉強会の後行う	9日
12	市川市より放置自転車20台到着。 ㊍自転車ワンダリング	
14	対法政サッカー大会、雨のため中止 ㊍中国合宿、自転車ワンダリングについて	トレーニング
15	監督・コーチと会談、中国係別の話し合い 全部員の同意書回収、パスポート全員取得、滞在費一括払い込み	
18	㊍第五次（最終）計画書について、中国係別話し合いのチェック	
19	日本ユースホステル協会、磯野氏と会談 第五次計画書完成（タイプ印刷）	
20	自転車日帰りワンダリング、多摩湖、10名参加	
21	実技基礎授業 ㊍中国合宿の打ち合わせ、装備・食料品等の問題点	
22	監督・コーチ、正田・川相OBと打ち合わせ 文部省へ、後援の打診 毎日新聞社へ、後援決定。フイルムをもらう 毎日放送報道部長　北川さんに計画書提出、後援決定	
23	部員の父兄に計画書発送	
24	サンデー毎日、瀬下さんと会談	
25	新日本国際KKへ、滞在費、渡航手続きについて	
26	蘭州分社へ計画書、その他の書類発送	

6.26～		
28	＜自転車ワンダリング＞　房総　15名参加	
29	㊍今後の予定、係のチェック、事故対策、連絡網のチェック。	
30	早稲田スポーツ全員取材。毎日放送より8ミリフイルム・カメラ提供決定。 イノ企画石川さんと会談。	30日
7. 1	神沢先生を囲む会、参加　OB・4年 新日本国際へ渡航手続き、ビザ申請について。	1日
3	㊍事故対策、連絡網の確認 毎日放送より8ミリカメラ、フイルム受けとる	
6	監督・土屋コーチ、参加OBとの打ち合わせ、チェック、名簿発注。カメラ係講習会（毎日新聞出版写真部東氏より）	ノ
7	清水司総長の挨拶文取得	
10	渡航費14名分払い込む	ル
11～	カメラ係講習会、カメラ係のみ	
12	＜甘泉寮合宿＞　最終打ち合わせ、団結式。梱包	マ
13	中国へのワンゲル紹介文作成完了。渡部社長の中国事情のお話 全OBに連絡網・あいさつ文発送 毎日新聞柳川さん、監督と会談	ト レ
14	VISA　申請、大使館へ 中国語勉強会の後。長谷部氏・加藤氏と部員で中国事情の会談	
15	㊍最終打ち合わせ。日程変更について。内部用最終計画書完成 連絡網・あいさつ文を関係者・部員父兄に発送	
16	中国語勉強会最終回、名簿完成 大隈会館で手島・石館OB、監督、長谷部氏、加藤氏と会談 帰りの便がとれず話し合う、日程変更の件、連絡日の確認	16日

7.17	監督・土屋コーチ、参加OBと日程変更の話し合い
	新日本国際KKへ。旅券取得、手続きのチェック
18	中国蘭州分社より日程が届く
	中文計画書作成完了。トラベラーズチェックに換金
20	新日本国際へ。最終チェック、ビザ完全取得
	全員、早稲田付近に分宿
21	早稲田駅に集合し、中国へ出発
8. 2	神沢部長・土屋コーチ、成田を出発
21	全員　帰国

帰国後の主な活動

8.28～	
9. 2	＜実技＞　妙高
7	簡易報告書、帰国報告のハガキを発送
10～	
15	＜実技＞　尾瀬
27	部員会、中国合宿及び年間反省、代交代　at　甘泉寮
10.18	帰国報告会、部員総会、大隈会館
23～	
11. 7	自転車文化センターにて　シルクロード写真展
12. 3	渡航費残金全額納入

係別計画と報告

交渉・渉外記録

佐藤佳一

一、交渉（許可取得）に関して

中国合宿が特異な点は、中国側に交渉し、許可が降りなければならなかったことがあげられる。中国という特殊事情の国であり、我々のような活動の前例がなかったためである。正式な交渉を開始してから許可が降りるまで約八ケ月かかった。以下に許可が降りるまでの経緯を述べてみることにする。

目的地を中国のシルクロードと決定したのは、一九七九年の十月のことである。同月日中友好協会の訪問、翌八〇年一月、中国専門の旅行社である新日本国際株式会社長谷部氏との会談から、シルクロードのいくつかの都市は外国人に開放されてはいるが、かなり困難ではないだろうかということであった。

同二月、第一次計画書作成。これをたたき台とすべくコースは西安～カシュガル間の約四千キロに及ぶスケールの大きなものであった。

同月末、新日本国際ＫＫを通じ、我々の計画が受け入れられる可能性があるのかどうか打診をすることを考えるが、監督との相談の結果、合宿を行う体制が整っていないのに行うのは無責任であるということで、打診は見送ることになる。

五月。ＮＨＫシルクロード班チーフディレクター中村清次氏、長沢早大文学部教授、中国大使館第一書記官趙永華女史、らの会談を通じ第一次計画の実現は未解放地区を多く含んでいるため困難であり、コース状況、日程、資金の点からも無理であると判断し、見直すことにした。

六月二十三日。第二次計画書完成。コース状況、実現の可能性を重視し、蘭州～西安間の約千二百キロで俗に河西回廊と呼ばれる地域とする。

七月十一日。折良く中国国際旅行社の訪日団が、新日本国際ＫＫの招きで来日しており、ホテルニューオータニにて会談。団長は甘粛省旅遊局経理兼蘭州分社社長の谷慶春氏以下六名（この中に一年後に我々の面倒を見る責任者として調査、合宿本番の際にお世話になった劉大庸氏が含まれていた。）、新日本国際ＫＫの渡部社長、長谷部氏、通訳の川上氏、部からは青木監督、川相ＯＢ、当時三年の三名が参加し話し合いが行なわれ、計画の打診を行った。中国側では帰国後検討し、返事を出すということであった。この時が正式な交渉開始といって良い。

八月六日。劉さんが残していった我々の計画に対する

質問事項の返答を中国へ郵送する。装備、自転車、炊事、医師などの点であった。併せて要望事項を同封する。

十月十四日、新日本国際ＫＫより蘭州分社に電話を入れたところ、蘭州分社では①武威～張掖間を検討、②食料、水、車の手配が困難、③計画書を甘粛省体育委員会に提出したとのことであった。

これを受けて、十月十八日。我々はあくまで蘭州～安西間を要望している事。その他の要望事項と返事を早く出して欲しい旨を、新日本国際ＫＫで中国文に翻訳してもらい発送する。同日、同社の長谷部氏より先ずはコース設定を行うこと、返事の催足についての手紙を発送したとのこと。

十月二十一日、毎日新聞社論説委員杉山氏と会談。新聞社の後援についてのお話をうかがう。又、中国特派員であった中野氏を紹介していただき情報収集。同二十三日、長沢教授と会談。これらを通じ、調査に行き、現地の状況を知るとともに、交渉し打ち合わせを行うのが最全の方法ではないかということになる。

十一月十七日。中国からの返事が遅れているため、返事の催足、翌年一月を目途に調査の打診を内容とした手紙を新日本国際ＫＫを通じ発送。

十月三十日。監督、コーチとの会談で、返事も来ていないうちに行うのは時期尚早ということで、調査は見送ることになる。

十二月二十一日、蘭州分社より返事到着。未解放地域が含まれているため、許可できないとのこと。ただ、長谷部氏が上海で偶然劉さんと会い、酒泉～敦煌間なら何とかなるかもしれないということであった。

十二月二十三日。日中協会事務局長の白石氏と会談。交渉方法、及び情報収集、一月に北京に行かれるということなので、願わくば関係機関に交渉していただくようお願いする

一九八一年、一月六日。距離が短縮されても、我々の趣旨は損われるものではないと判断し、酒泉～敦煌間の約六〇〇㎞で修正案を作成。

一月十九日、新日本国際ＫＫを通じ、蘭州分社に修正案を発送する。

二月四日、東京赤坂ホテルにて、白石氏、長谷部氏、監督、木の内・川相ＯＢ、四年で今後の対応策について検討。窓口は新日本国際ＫＫ一本とすることを確認。

二月十三日、交渉を有利にするため、河野謙三参議院議員に推せん文依頼。体育局長窪田氏、長沢教授、神沢部長、以上四氏の推せん文をお願いして、中国に発送することにする。

二月二十四日、蘭州分社に四氏の推せん文発送。

二月二十六日、中国国際旅行社、中国体育総会、中日友好協会へ計画書、ワンゲルの説明、四氏の推せん文を発送。（これらはいづれも断わりの返事がその後到着）

三月二十二日、蘭州分社より受け入れＯＫの返事到着。打ち合わせのため至急蘭州に来て欲しいとの事。四月十三日～二〇日の日程で、新日本国際ＫＫ渡部社長と、主将の佐藤佳一が行くことになる。

暗中模索の中、紆余曲折を経てようやく許可を得ることができたと言える。いくつかの幸運にも恵まれていた。交渉の窓口は、新日本国際ＫＫにお願いするしかなかった。同社には多大な迷惑をかけてしまったが、結局それが一番いい方法ではなかったかと思う。中国の場合受け入れ機関がはっきりしていなければならない。

しかし、本格的な準備はわずか四ケ月足らずで行なわなければならなかった事から遅れてしまったと言える。

二、渉外

渉外係としては、庄和也（三年）、香山武志、原英泰（二年）、の三人を決めた。

イ、渡航便の決定と切符の取得

窓口である新日本国際ＫＫに、お願いした。しかし出発直前になって、帰りの便がとれず日程を変更しなければならなくなったことは、反省しなければならない。確認を怠り、同社に頼り過ぎてしまった。

ロ、パスポート、ビザの取得

パスポートは六月十五日、全員完全取得、ビザは団体ビザで七月二十日に中国大使館から降りた。

ハ、保険

千代田海上火災の海外旅行傷害保険に加入。

ニ、隊員名簿と名刺の作成

写真入りの隊員名簿を二百部作成し、中国に持参。これは非常に役立った。名刺は神沢団長、青木隊長、土屋副隊長の三名に限った。名簿があれば不必要かと思われた。

ホ、部員保護者の同意書

計画書、監督の一筆、署名付きの同意書を各々の父兄に送り、六月初旬に全員の同意書を回収。

ヘ、現地での移動・交通

中国の旅行社が全て移動はバスを用意してくれた。ただ、日程の変更から、帰りの蘭州～上海間は列車から飛行機にせざるを得なかった。移動は全て中国の旅行社が予約し、手配してくれた。

ト、超過重量、荷物

出発便、帰国便は二十キロ、中国国内では十五キロ、手荷物としてサブザックを機内に持ち込み、なるべくつめさせたので問題はなかった。

チ、連絡網

あらかじめ定期連絡日を決め、在日本部の窓口は手島ＯＢ会長にお願いした。現地連絡所は、蘭州分社、酒泉と敦煌の支社とした。（別表参照）

リ、事故対策

日程に沿って十のブロックに別け、汽車と車による移動で病院に収容することとした。（別表参照）

ヌ、情報の入取

情報の収集には、絶対的な情報量が少ないため苦労した。ＮＨＫシルクロード班の中村氏、早大長沢教授、日中協会白西氏、新日本国際の方々など実際に行ったことのある人と、ごく限られた本に依るものしか得られなかった。地図はＮＡＳＡのものが一番詳しく、それ以上のものは結局手に入らなかった。

ル、中国国内での渉外

中国国内で、中国側との打ち合わせ事項が多く、話し合いの場が何回となく持たれたが、スケジュールや行動

に関するものであったので、OBとリーダー層があたり、渉外係は細かい事項の確認等にあたる。今回の合宿の性格上止むを得まい。

ヲ、空港での出入国手続

新日本国際KKの長谷部さんに詳しく聞いて行ったので、特に問題はなかった。渉外係が中心となって行いスムースにいく。

三、後援について

今回の合宿では、毎日新聞社と毎日放送に後援していただいた。

イ、毎日新聞社

直接のきっかけは、我々四年の同期部員で退部した杉山太一兄の紹介で、父親である論説委員（現在論説顧問）の杉山克己氏と会談したことであった。同氏には計画に対するアドバイスの他、各方面の関係者を紹介していただき並々ならぬお世話になった。

一九八一年五月十五日付で、後援依頼書を作成し、事業部長である山崎栄一氏宛に、同事業部の高橋氏を介して提出した。後援が正式に決定したのは五月末のことであった。

同社には、フィルムの提供（白黒三〇、リバーサル一〇）、現像（白黒三〇、リバーサル五〇）、新聞、サンデー毎日に記事として掲載。この際に学芸部の柳川氏、出版写真部東氏、サンデー毎日編集次長の瀬下氏のお世話になった。

また、計画書に記載し、渉外に役立てた。

ロ、毎日放送

前述の杉山克己氏に、毎日放送報道部長北川敏夫氏を紹介していただき、依頼書は報道局長北野栄三氏宛に提出し、六月二十二日正式に決定した。

同放送には、八ミリフィルム（高感度一〇、普通四〇）の提供と八ミリカメラ二台を貸与していただき、帰国後同社で現像した後、六時のニュースで報道され、その際川相OBに出向いてもらった。フィルムはご好意によりいただけることになった。

資金計画・会計報告

佐藤佳一・庄　和也

いつの時代にあっても、学生が海外で活動を行おうとする場合、資金調達は非常に重大な問題である。

過去の海外合宿と同様に、今回の中国合宿でもそうであった。資金不足から、十数回となく資金計画を見直し、最後の最後まで、悩まされたと言って良い。

以下に、この合宿における資金計画についての経過と、問題点など述べたいと思う。

一、資金計画の経過

五十五年二月、第一次資金計画では、隊員数を未知数ながら、新人・OBを含む三十五名とし、部員一人の負担額は、OB・三・四年＝五〇万、二年＝四〇万、新人＝十万、とし新人は合宿後に二〇万円返済することとし、不足分は海外遠征資金、大学からの補助金、スポンサー、映画会などで賄おうというお粗末なものであった。

監督やコーチとの話し合いの結果、上級生・OBの負担金が大き過ぎる事、体育局の規定で、スポンサー、映画会などは、禁止されている事などから、改めて資金計画を見直すことになった。

新日本国際KKの助言と、部員のアルバイトで賄う個人負担金の限度を考慮に入れ、一人当りの負担金を三〇万円前後と見積もった。

また、資金的な過重負担、精神面、体力面への不安と入部者を制限してしまうのではないかということから、新人を合宿に参加させることへの疑問がクローズアップされ、六月には新人を参加させない形での第二次資金計画をたてた。しかし、具体的な支出項目等は、未だ不明確な点が多く、暗中模索の状態で、部員一人の負担額を三十一万円、隊員数は十三名とした。

しかし、あくまでも合宿であるとの観点から、再び新人問題を検討した結果、上級生が新人の経済的負担をある程度肩代りする形で個人負担額を設定すれば、新人の参加は無理ではなかろうとの結論に達した。隊員数は三十五名とし、総費用八百五万円、部員一人当り負担額は、三・四年＝四十万円、二年＝三十七万円、新人＝二十四万円ということで、アルバイト計画を立て、三・四年は七月から、二年は九月から毎月最低一万五千円の積立を開始した。アルバイトは、土・日と、冬合宿前と春合宿前の十日間、新人勧誘時の五日間をアルバイト期間としてあてた。冬合宿前のバイトは、そごう東雲配送センター日本運搬社で、お歳暮の仕事をやらせていただい

た。日程、金額、人数の点で無理をお願いしたにもかかわらず、快く引き受けて下さった。

だが、それ以外のアルバイトは思うようにできなかったのが現状であった。授業やトレーニングなどの事情から、不定期なため職が見つからないのである。

そのため、トレーニングや授業に支障が少なく、割のいい家庭教師を推め、八割がたの部員が家庭教師について資金を積み立てとした。

各自の積み立て金を表にし、部室に掲示したが、個人差がかなり見られた。

五十六年三月に、中国から正式な合宿許可の返事が到着し、四月に交渉の窓口であった新日本国際KKの渡部社長と、主将の佐藤佳一が、限度額を設定し、調査、打ち合わせのため中国に飛んだ。

しかし、中国側の受け入れ口である蘭州分社では、我々の予想を大幅に上回る額を提示し、話し合いは難航したが、学生であり、特別扱いの団体として割り引いていただき、滞在費一人当り二十四万三千円で協議書を交すに及んだ。だが、渡航費、装備などの団体費用等を含めると、設定した限度額を超過するものであった。

帰国後、協議書に基き、個人負担金を三・四年＝四十六万円、新人・二年・OB＝四十万円と決定し、不足分については、ワンゲル基金という形で、OBの方々からの援助をお願いし、借入金として、合宿後返済することにした。ワンゲル基金での援助が決定したのは六月のことであり、借入金として百十万円を計上した。

だがその後、渡航手数料や、追加保険料などが加わり、各自の負担金に四千百円を追加しなければならなくなった。

新人の個人負担金については、参加するからには個人にかかる費用は払うのが本筋だという判断で、二年と同額としたが、その資金調達は短期間であったため、ほとんど父兄に頼らざるを得なかった。

渡航費が払えない者は、新日本国際KKのご好意により後払いが可能となり、合宿後、月一万円づつ返済させることにした。

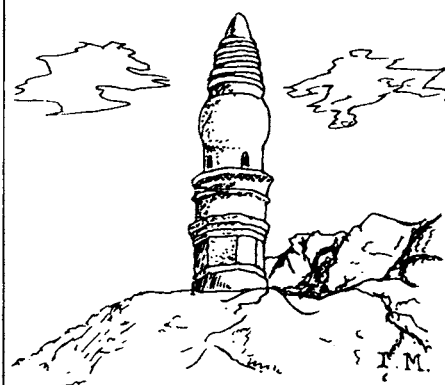
また、どうしても合宿費の負担が困難だという新人一名については、父兄の承諾を得て、ワンゲル基金から、個人借入金の形で貸付けていただくことにした。この返済に関しては、卒業後二年以内という条件である。

滞在費は六月十五日に全額を払い込み、渡航費は七月十日に十四名分とりあえず支払った。残額については、手持ちの残金を利用して、九月三十日と、十二月三日の二回に分けて支払い、完納した。

電影

三宅一郎

中国では、映画が大変な人気であった。映画のことを彼らは電影と呼ぶ。『神秘的大仏』とか『刑場上的婚礼』などといった看板の前は、上映前になると黒山の人だかりで、通り抜けもままならない。私たちも、安西では、中国人に連れられて、『他們在相愛』というのを観に行った。内容は昼の連続ドラマ程度で大変わかりやすい。山口百恵の『絶唱』が予告編に登場したが、人気があるそうだ。



中国国内に於いては直前に日程の変更があって帰りの蘭州～上海間を汽車から飛行機にせざるを得なくなり、予備金の五十万円を使い果たし、同行した中国の十七名の人達に電卓を贈ることに決め、その他ラジカセなどのみやげ物をお世話になった旅行社に贈呈することにしたため、後から日本を出発した神沢部長、土屋コーチに連絡し、持ってきていただいた。その費用が約十五万円かかり、予定外の出費であった。

合宿後、雑誌掲載料、部費の節約からの収入、実技からの収入等の副収入が予想以上にあり、ワンゲル基金返済のための追加徴収額は、一人当り一万五千円におさえることができた。これは、五十七年九月三十日までに、主務を通じてワンゲル基金への返済をすることとした。

その結果、最終的な個人負担金は、三・四年が四十七万九千百円、新人・二年・OBが四十一万九千百円ということになった。

二、問題点など

① 隊員数の確定

海外合宿において、人数確定は早ければ早い程良い。しかし、今回の合宿の場合、新人問題になかなか結論が出ず、退部者が出たり、隊長・副隊長の決定が遅れたりで、合宿直前まで人数が定まらなかった。

やはり隊員数の決定は、できるだけ早く行うのが望ましい。

② 個人負担金

アルバイトをするといっても、通常の部活動を行い、授業を受けながらでは、限界がある。特に新人に対して短期間のうちに、高負担を強いるのは無理がある。今回の合宿は、個人負担金が多すぎ、部員に負担をかけてしまった。アルバイトで賄える額、内容など十分に検討する必要がある。

③ 情報・資料の収集

中国という特殊事情の国であり、情報量が乏しい国なので、詳しい事情が把握できなかった。一般の中国旅行は一方的に中国側から決められているのである。そのためわずかな情報・資料から資金計画の支出は、最後まで推測の域を出ず、何度も変更を繰り返した。

④ ワンゲル資金

我々はあくまでOBからの寄付に頼るのでなく自分達で資金調達を行うという方針であった。しかし、不足金が生ずることから、ワンゲル基金という形で、OBから借入金として援助をうけることになった。今後の海外遠征の際には、この基金がうまく活用できるのではないかと思われる。

⑤ 海外遠征資金

OBの方々が残してくれたものが、約七〇万円あり、そのほとんどを使い果たしてしまった。あったものは残すのが原則であるということから、少ないながらも二十六万円残すつもりでいたが、五十六年十二月の山小屋焼失による費用のため、約十万円程しか残っていない。今後は、彷徨代金の回収をしっかり行い、実技手当て金の一部を繰り入れるなどの方法で、徐々に積み立てていくのが良策ではないかと思う。

⑥ 部外収入

海外合宿には多額の資金が必要で、これは宿命とも言える。今回の海外合宿は初めて、OBからの寄付金なしのものであった。個人負担金にも限度があり、前述のように今回は、個人負担金が多額となり、そのための弊害も生じたと言える。個人負担が基本ではあるが、OBからの寄付、海外遠征資金、ワンゲル基金以外の資金調達の方法として、部外からの収入を考慮する余地が残されていると思われる。

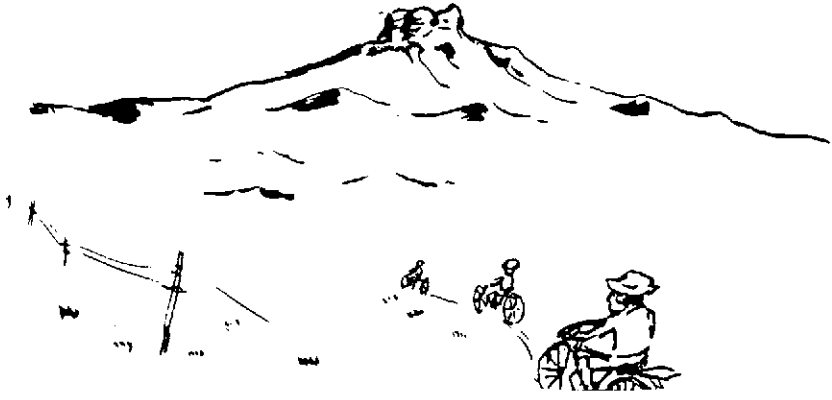
今回の場合、雑誌、写真展等の副収入がけっこうあったが、これはあくまで予定外のものである。

この問題は十分な検討が必要であろうし、困難を伴う問題である。

以上、中国合宿における会計、資金計画の概略を述べてきたが、今回の合宿は通常の中国旅行に比べれば、中国側の特別な配慮によって、割安の料金で行けたのは幸運であったが、多くの問題をかかえ非常に苦慮した。

冒頭に述べたように、海外合宿において、資金の問題は避けて通れない、重要な問題である。この記述が、今後の海外合宿に、いくらかでも参考になるなら幸いである。

最後に、採算を度外視して、受け入れてくれた蘭州分社の皆様、大変なご迷惑をおかけした新日本国際株式会社の皆様、多大なご援助をいただきましたOB・OGの皆様をはじめ、この合宿を無事終えるについて、多くの協力をいただいたすべての皆様に厚くお礼申しあげます。本当にありがとうございました。



昭和５６年度中国合宿会計報告

Ⅰ

支出			収入		
渡航費	2,981,720	注1	個人負担金	9,594,300	
滞在費	5,589,000		（３、４年）	(464,100×５)	
自転車代	524,880		（1、2年、ＯＢ）	(404,100×18)	
保険費	111,780		海外遠征資金	741,000	
調査費	170,000		借入金		
装備費	44,300	注2	（ワンゲル基金）	550,000	
食糧費	31,780	注3	部費		
医療費	5,014	注4	（実技手当等）	663,541	
みやげ代	168,420	注5	写真展	280,000	
通信費	165,430	注6	雑誌など	107,900	注９
雑費	67,686	注7	寄附	40,000	注10
写真代	176,217		雑収入	61,813	注11
事後処理代	318,339	注8			
報告書代	750,000				
中国での支出	451,972				
借入金充当金	482,016				
合計	12,038,554		合計	12,038,554	

Ⅱ 中国での支出

（単位：日本円）

	費用	金額	備考
1	中華民航代	398,268	１人　17,316円
2	おみやげ代	23,127	
3	通信費	17,558	切手9,061はがき995電報7,502
4	医療費	11,199	治療代
5	雑費	1,820	タクシー代
	合計	451,972	

Ⅲ 支出明細

①渡航費

航空運賃	122,500
ビザ代	2,000
手続費	5,140
	129,640円×23人

②装備費

ホエブス修理	2,160
な べ	12,900
マット、メタ等	22,590
自転車工具	6,650

③食糧費

病人食（ベビーフード、はちみつジャム、プリン、片栗粉、きな粉）

日本食（カレー、シチュー、即みそ、ふりかけ、お茶づけ、スープ、だし、コンソメ、味の素、しょうゆジフィーズ、梅ぼし、緑茶、つくだに、麦茶、漬物）

④医療費

ハイシー、テープ等

⑤みやげ代

ペナント、電卓、ラジカセ、てぬぐい、バッジ、ライター、電池おり紙、絵はがき等

⑥通信費

切手	62,640
電報電話	18,820
印刷代	82,030
封筒等	1,940

⑦雑　費

名　簿	37,000
コピー	14,296
感光紙	6,340
支払手数料	5,000
ノート類	3,850
託送費	1,200

⑧事後処理代

報告会開催費	132,385
パネル	31,860
写真展	36,000
通信費	99,750
切手	44,250
印刷	31,700
葉書	19,500
封筒	4,300
雑　費	8,344
コピー	2,120
感光紙	780
編集器	1,500
アルバム	2,390
支払手数料	550
為替損	1,004
法政報告会	10,000

Ⅳ 収入明細

⑨雑誌等収入

サイクルスポーツ	31,500
旺文社	30,000
山と溪谷社	23,400
学習研究社	18,000
朝日放送	5,000

⑩寄　附

自転車普及協会	20,000
日本運搬社	10,000
里見昭二郎ＯＢ	10,000

⑪雑収入

受取利息	44,255
合宿費残金	6,676
治療費保険返戻金	10,882

〈参考〉 資金計画最終案

（最終計画書より転出）

Ⅰ 収入予定

個人負担金	OB	400,000× 6=	2,400,000
	3、4年	460,000× 5=	2,300,000
	1、2年	400,000×12=	4,800,000
海外遠征資金			700,000
借入金			1,113,080
合計			11,313,080

Ⅱ 支出予定

渡航費	127,400×23=	2,930,260
滞在費	243,000×23=	5,589,000
自転車代	19,440×27=	524,880
保険費	3,000×23=	69,000
調査費		170,000
装備費		50,000
食糧費		40,000
医療費		10,000
通信費		180,000
雑費		50,000
写真費		200,000
報告書代		800,000
事後処理代		200,000
予備金		500,000
合計		11,313,080

公文書取得

中国への交渉をスムースにするため、そして行動をスムースにするため各関係機関あてに推薦状を以下に示すように発行していただいた。

中国国際旅行社蘭州分社　経理　谷慶春氏
中国国際旅行社総社　総経理　袁超俊氏
中華民国体育総会　副主席　鏡師統氏
中日友好協会　会長　廖承志氏

以上四関係機関宛に、合宿許可取得のため

前参議院議員議長　日中協会顧問　河野謙三氏
早稲田大学体育局　滝口　宏氏
早稲田大学文学部教授　長澤和俊氏
早稲田大学ワンダーフォーゲル部　神澤惣一郎部長

の四氏に推薦文をお願いし、昭和五十六年二月二十六日に発送する。

蘭州分社以外、三月に相次いでまだ実現するにはいろいろ困難があり、条件をそろえていないという丁重な断わりの返事が到着。

毎日新聞社事業部長　山崎栄一氏宛
毎日放送報道局長　北野栄三氏宛

神澤部長、青木監督に後援依頼文を五月十五日付でお願いする。

千葉県市川市市長　高橋国雄氏宛
早稲田大学体育局長　窪田　登氏に放置自転車借用依頼文を六月五日発行していただく。

早稲田大学　清水司総長より、メッセージ文を発行していただき、蘭州大学副学長　聶大江氏と、酒泉地区専員　柳潤波氏に渡す。

御協力心から感謝致します。

54Pのもの
総長メッセージ
55Pのもの
体育局に依頼した蘭州分社あて協力依頼文
56Pのもの
蘭州分社の返書（No）
57Pのもの
蘭州分社の返書（Yes）

ご　挨　拶

このたび、早稲田大学ワンダーフォーゲル部が貴国を訪問し、合宿活動を通じて、両国の友好、交流を深める機会を得たことは、早稲田大学にとって大きな喜びであります。この計画の実現にご尽力をいただいた貴国関係各位に心から感謝いたします。

早稲田大学は古くから貴国との交流をもち、彭湃、李大釗先生をはじめ多くの方々が早稲田に存学されました。近年、新たな友好関係のもとで、両国の交流が一層緊密さを増すなかで、早稲田大学も貴国からの留学生や視察団の皆様を多数お迎えすることができ、たいへん嬉しく思っています。尚一層、両国の学術・文化の交流に努力したいと思います。

この度、ワンダーフォーゲル部が訪問する河西回廊は、シルクロードの中でも東西文化の交流の要衝であります。大いなる大地と荒涼な自然の中で、人々が歴史の使命を担って、東へ西へと文物を抱いて往来し、新しい文化を創造した、母なる大地であります。

両国の学生が共に語り、偉大な歴史にふれ、未来に通じる深い豊かな友情を築きあげることができるならば、両国の友好を一層発展させるものとして、この上ない喜びであります。

1981年7月

早稲田大学総長
清　水　[illegible]

殿

早稲田大学

体管第 327号

1981年 2月18日

中国国際旅行社 蘭州分社

経理 谷 庆 春 殿

早稲田大学体育局

局長 滝 口 宏

早稲田大学ワンダーフォーゲル部は、中日親善のため1981年7月 ～ 9月の中国合宿を計画しております。

OB、学生など30名からなる一隊は、自転車により甘粛省（蘭州－安西間）の河西回廊を走破し現在の中国を知り、現地の方々並びに、学生と交歓活動を行なうものであります。

関係資料を同封いたしますので宜しく御検討のうえ本計画を御理解いただき計画ならびに実施についてご指導、ご協力を賜わりますよう御願い申し上げます。

以 上

早 稲 田 大 学

中国国际旅行社兰州分社

CHINA INTERNATIONAL TRAVEL SERVICE LANCHOW BRANCH

甘旅游80 4 8号

关于早稻田大学青年自行车

旅行事宜的函复

新日本国际旅行社：

首先向贵社致意，并对贵社在中日友好事业上作出的努力及在旅游事业上给予的合作表示感谢。

关于早稻田大学青年自行车旅行甘肃河西走廊事宜，虽经我们双方共同努力，但因此线多处地方为不开放地区，因此明年难于安排此行。对此表示歉意。

请向早稻田大学青年部转达我们的良好祝愿。

顺　致

敬　礼

中国国际旅行社兰州分社

一九八[illegible]年十二月[illegible]日

中国国际旅行社兰州分社

CHINA INTERNATIONAL TRAVEL SERVICE LANCHOW BRANCH

新日本国际旅社：

贵社（81）09号函收悉。我们同意贵社组织的早稻田学生来我省旅行访问和同我省学生进行交流。

我们相信通过这次早稻田学生的来访，将会促进中日两国青年之间的友谊和了解。

现将我们的日程安排的初步意见寄去。是否可行。望贵社研究并派先遣队来我社商定。

顺　致

敬　意

中国国际旅行社兰州分社

1981年3月3日

連絡網・事故対策

佐藤　淳

一、在日本部との連絡

窓口として、手島OB会長、さらにスタッフとして石館OB、新谷コーチに御協力いただいた。

定期連絡日をもうけ（図参照）、その都度、電話、電報連絡をした。上海、蘭州のような大都市では電話は十数分でつながり有効であった。

酒泉、安西、敦煌においては電報を打つ。

また在日本部から、隊員御家族、各関係機関にも、葉書で状況を報告していただいた。

二、中国国内での連絡

酒泉支社のトラック、バスが同行したため、最寄りの町にポスト・ランナーとして活躍いただいた。特に、ゴビタンの中で病人が出た時などは有効だった。

反面、それらの方策に頼ってしまい、独自のルートをもつことはできなかった。また国情からも、そうすることは困難であったのは確かである。

三、事故対策

中国側の配慮で、病人の移動は全てスムースに行なわれた。病院には、医療係の原と、通訳の谷さんによく付添ってもらった。

全般として、中国側の力に頼ってしまったことは、ワンゲルの活動から見れば残念であったが、中国国内においては、いたしかたのないことでもあった。御協力いただいた、手島OB会長、石館OB、新谷コーチに感謝いたします。また、全ての面でカバーしていただいた、蘭州分社、酒泉支社、敦煌支社、上海支社、の方々に厚く御礼申し上げます。

（詳細は図を参照下さい）

連絡網Ⅰ（中国→東京）

① 定期連絡日　中国 ⇨ 東京

電話　7月25日(土)　蘭州分社から ⇨ 在日本部へ（20：00）

電報　7月28日(火)　酒泉支社から ⇨ 在日本部へ

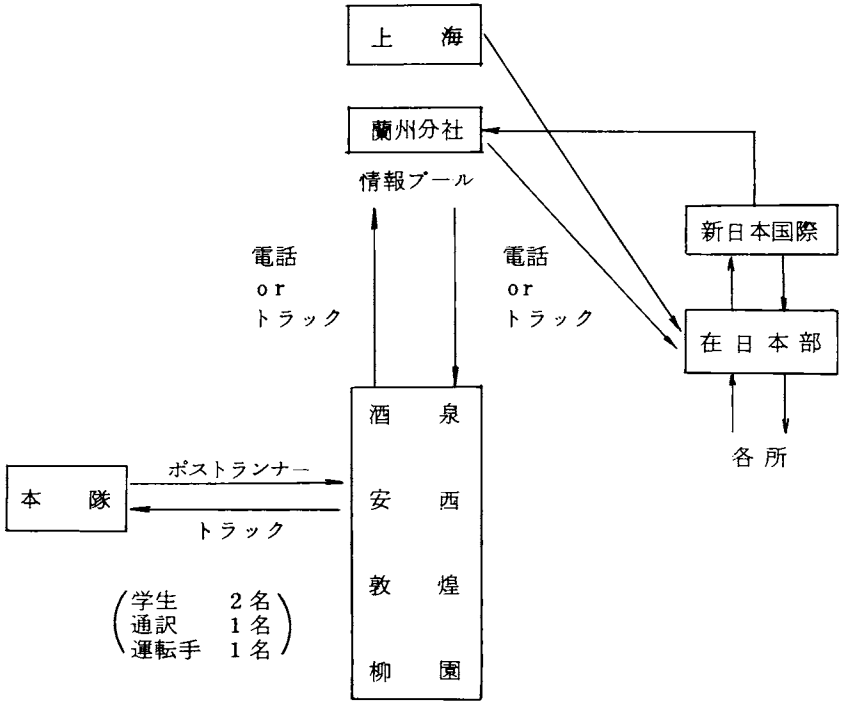
電報　8月　5日(水)　安西から ⇨ 在日本部へ ⇨ 各所へ中間報告

電報　8月15日(土)　敦煌から ⇨ 在日本部へ

電話　8月18日(火)　蘭州から ⇨ 在日本部へ（10：00）

＊時刻はいずれも日本時間、時差は1時間であるから在日本部20：00は中国蘭州では21：00である。

② 非常時



連絡網Ⅱ　（国　内）

本　隊

蘭州分社　（蘭州市南昌路６５号　TEL26137）

新日本国際KK　〒１０３
中央区兜町２－３６　兜町第３ビル　TEL669－4021(代)
担当者　長谷部友樹

在日本部

- 手島　宏（２代）　窓　口
  〒１０８
  港区白金２－５－１－４０３
  手島産業　TEL444－2846
  501－9569
- 石館昌二（１０代）
  〒１７７
  練馬区向山３－９－３
  ㈱ダスキンTEL998－9342
  921－1414
- 新谷　博（２７代）
  〒１５４
  世田谷区野沢１－１２－７
  協和発酵㈱
  協和発酵野沢寮
  TEL401－5915
  496－0151

- 早稲田大学体育館
  TEL203－4479
  局長　窪田　登氏
  担当　川島正之氏
- 隊員家族
- 安田平八（初代）
  TEL416－6559
- 全ＯＢ
  全ワンゲル関係者
- 関連機関
  毎日新聞社
  TEL212－0321 (代)
  毎日放送213－1611

※在日本部では手島氏が窓口となり定期連絡を受信する。
※在日本部では８／４の本隊からの定期連絡を受信し次第、新谷氏を通じて各所に葉書で中間報告する。
※日本からの連絡経路は以下のように統一する。（非常時）
すなわち各所→新日本国際KK→蘭州分社→本隊
※中国（本隊）からの連絡（定期連絡日）は電話・電報により直接在日本部へ入る。

事　故　対　策

上　海	○上海・蘭州に近い場合は上海市内・蘭州市内の病院へ ○車中の場合、最寄の都市の病院へ
蘭　州	○蘭州市内の病院へ
酒　泉	○酒泉市内の病院へ
安　西	○安西市内の病院へ
敦　煌	○敦煌市内の病院へ ○車中の場合、最寄りの都市の病院へ
蘭　州	○蘭州市内の病院へ
上　海	○上海市内の病院へ

CASE1

○ケガ、ネンザ等の外傷で軽症で入院不用だが行動不可能な場合

○軽い疲労で行動不可能な場合

⇨　車で運ぶ　{ 本隊と共に行動の場合
次の幕営地に行って先に休養の場合

CASE2

○ケガ、ネンザ等の外傷で入院必要

○内部疾患で入院必要

⇨　入院　by car

○２～３日入院

○７～１０日入院

○長期入院 → 在日本部連絡

○死亡　⇨　合宿中止 → 在日本部連絡

※病人には２名つく。４年（関口）とＯＢ１名

本隊の活動について

原　則

○２人以下の病人の場合　⇨　本隊活動

○３人以上の病人の場合　⇨　ケースバイケース　委員会検討

→ 病人が出た場合等、隊の行動が大幅に停滞する場合があれば、敦煌周辺の放射活動を削って酒泉　⇨　敦煌までの自転車走破を目指す

装備係報告

岡　聡

通常の合宿においては、装備決定の際には、あるパターンがあって、大筋に於てはそれを踏襲すれば間に合う場合が多い。もちろん、合宿の行なわれる地域や季節によって考慮すべき点があるのは当然であるが、身につける下着の類まで検討されることなど、まずない。中国合宿実行が決定となり、係別の活動が始まると、我々は、数々の制約に悩まされることになった。その制約により、我々は装備の根本からの洗い直しを余儀なくされた訳であるが、このことは交渉等、装備とは直接関係ない事柄をも含めて、我々に環境の全く違う海外合宿の難しさを痛感させることになったのである。

我々を悩ませた主な制約とは次の点である。(1)行動手段として自転車を取り入れたこと。(2)気候・風土状況。(3)重量制限、これは日本から中国への途上、飛行機に乗せられるのは15kgまでだったことを指す。個装だけで7kg近くになるため、日本から持って行けるのは、約8kgということになる。ここから、できる限り現地調達ということになった。このことについては後述するが、現地につくまで品を見られないのはやはり問題であったようだ。これは(1)にも関連する。当初、我々は必要なものはすべて自転車に積載することを考えていたが、細かく検討するうちに、とても無理なことが解った。トラックの併走が決まった為積めない分については問題がなくなった。とにかくも自転車に積むからには、なるべく軽くせねばならないし、積載方法も問題となる。積載方法も重要な課題であった。以下、個装、団装に分け、説明を加えていきたい。

―個装―　図1参照

1　自転車　中国製の米屋型の自転車使用。現地調達品である。装備にとって最後まで悩みの種であった。積載方法は、なべ等も含まれるため、重要な問題であったが、それを現物の自転車無しに考えるというのは至極困難であった。考えた事の確かめようがないのだから、最後まで不安なまま中国へ乗り込むことになった。飛行機のオーバーチャージのこともあり、仕方なかったのかもしれないが、やはり自転車のような行動の要になるものは日本から持ち込んだ方がよかった様に思う。

2　バイク用ゴムヒモ　幅2cm程度の黒色帯ゴム。普通自転車に使う丸ゴムよりズレが少なく安定していた。

3　団装袋　底の直径が35㎝の円筒形ズダ袋。最初はサイクリング車用のキャリアバッグやアタックザックなど考えたが、相手が米屋型自転車であったため、荷台の上にコンパクトにまとまるものとしてこれに決定した。新宿の伊勢啓中村屋にて購入。デニム地。

4　サブザック　自転車の前のカゴに入れるため。重量制限を乗り切るため、つめられるだけつめ込んで機内に持ち込んだ。国内合宿で使用しているもの。

5　シュラフ　国内で使用しているもの

6～12　行動着　シルクロードでは日ざしがかなり強いということだったので、肌を直接さらさないように考えた。実際に思っていたほどではなく、半袖でも十分であったが、首筋に日が当たらぬように考えた帽子（図A）は成功だったようである。熱砂よけのためリストに入れたウインドブレーカーは、皮肉なことに、朝出発時の防寒と、雨よけ（シルクロードでは全く雨が降らないと聞いていたので雨具はリストからはずしていた）に使用された。

13・14　学生ズボン、白ワイシャツ　これらは式典用である。胸には早稲田大学ワンダフォーゲルの文字が。

15　ウール行動着　昼夜の温度差が激しいだろうとの予想で持って行ったが、その意味では無用。ただ、雨に降られて体が濡れた時だけは助かった。

16　下着　着ていくものだけ、あとは現地調達と決めたが、守ったのは装備係だけだったようである。

17　手ぬぐい　あると何かと便利。日本手ぬぐいである。

18・19　サングラスとゴーグル　サングラスは強い日光から目を守るため。それに加えてゴーグルをリストに入れたのは砂嵐を恐れたためだが、結局使用はしなかった。持って行ったのは、スキー用のものである。

20　マスク　砂埃で喉を痛めぬようにと考えたためリストに入れたが、前述のように、シルクロードの気候は予想したほど厳しいものではなく、一部の人間を除き、未使用であった。

21　トイレットペーパー　現地調達品である。

22　細引　5㎜5ｍのもの。

23　ナイフ　国内で使用している、携帯用のもの。

24・25　武器、ハシ　ハシは要請品である。料理の種類の関係もあり、使用したものはもっぱらハシであった。

28　ホイッスル　4年のみ、指示用である。

29　地図　出発前に、国内で渡されたもの。

31　エレキ　国内でも使用しているヘッドランプ。

32・33　替電池、替電球　新品のアルカリ電池8本を持ってこさせた。

34　個人医療　医療係に譲る。

37　貴重品袋　常に携帯できるよう小型のバッグのようなものを購入させた。中には、パスポート、現金など、大切なものを入れさせた。

38　現金　5万円

41　軍手　もちろん新人にとっては、食当用でもあるが、始めは、自転車用の皮手袋を考えていたのを、金の都合もあって、軍手に格下げをしたのである。

―団装―　図2参照

1　エスパース　カモシカスポーツ製、ドーム型天幕である。収容人員は4～5人。ポールを合わせて4kgである。7張中、1張は新規購入、1張はカモシカスポーツよりの寄附である。天幕の選択については、積載可能であることが、第一条件であった。エスパースは、冬期に利用されることの多い天幕であるため、砂漠で利用するには不適かとも思われたが、夜は冷え込むであろうということ、実際に天幕に入るのは夕刻からであろうということ、そして風に強いことなどから決定された。

2　フライ　日よけのためリストに入れたが、あまりの風の強さに張ることができなかった。結局のところ、食事の際のゴザがわり。

3　ホエブス　自転車で運搬するため振動を考えて、クッションのための布を缶の中につめさせた。出発前にはすべてのホエブスを点検に出した。それにもかかわらず初日から全く使えないものが一つあり、行程が進むにつれて、調子の悪いものが出てきた。振動と、気圧のせいもあったようだ。ピストンの具合がおかしくなった。

4　ア　ミ　国内で使用しているもの。

5　ナ　ベ　積載する上で、これほどやっかいなものはなかった。最初はコッヘルを使用するつもりであったが、中国人10人の食事も作ると聞き、ナベに変更した。個装を持った上、ナベをつけるのは不可能なため、個装を持たぬ、ナベ専門の係を作り、荷台に板をつけ、ナベ7ケをかぶせて、バンドで止めて運ぶという方法をとった。（図B参照）

6　ナベブタ　これも難物であった。日本で使用しているナベブタは、そのまま団装袋に入れたのでは実に安定が悪い。これも苦しまぎれの案であったが、自転車のサドル前部の、フレームが三角形になった部分にひもで取りつけることにした。（図C）

7　メ　タ　ホエブス点火のため、日本より持参

8　予備丸食　中国人及びOBの分で30枚となった。トラックに積載。

9　ガラクタ　現地要請品である。しゃもじ3、おたま

3、包丁3、たわし3。

10 **ローソク**　要請したが、準備されず。

12 **病人食、日本食**　食糧、医療係に譲る。

13・14 **みやげ、アルバム**　佳一主将の占有団配であった。ライター、ベナントの類である。

15 **医療箱**　3.5kg、医療係に譲る。

16 **修理工具**　プライヤ、ガムテープ、替くつひも3、針金20m、太針金22m、リベアテープ、ポリタンパッキン3、針、糸、ホエブス修理用品・パッキン、ヘッド1、ノズル2、ハンドル1、すべて国内より持参。

17～23 自転車係に譲るが、空気入れと、修理工具の一部を除いては現地要請品。自転車が中国製である以上、国内では準備しようがなかった。

24 **2ℓポリタン**　医療用4、装備2。

25 **ジグボトル**　トラックに積んであるドラム缶より一度ジグに移し、それから、ホエブスに移した。

26 **灯油**　トラックにて運搬。

27 **水**　シルクロードでは水は貴重である。水自体少ないし、あっても硬質であるため一度沸かさねば飲むことはできない。我々は中国側に夜のうちに沸かしておいてもらった湯を、朝ポリタンにつめる。これも当初は我々が自分で沸かす予定であったのだが、どうしようもなく不可能なのである。我々のホエブスではとてもそれだけの湯は沸かせないことがわかったのである。

28 **ポンプ**　中国へ要請。井戸のポンプのようなすごいポンプであった。

29 **中国人用シュラフ**　部在庫の7ケに部員の分3ケを加えた。彼らは、皆、シュラフを枕として使用していた。別に持って行かなくても良かったようである。

30 **中国人用マット**　レスキューを国内より持参。

31～33 カメラ係に譲る。

34 **ナベ台用板**　ナベのところで説明した通り。（図Bを参照のこと）

35 **自転車**　これは監督等の分である。

36 **ナベ係個装**　これもナベのところで説明した通り。

（総括、反省）

リスト化された中で検討されずに加えられたものは一つもない。OBの方には嘆かれそうであるが、最近、前代のものをそのまま継承するということが多い。ここ何代かは続いているようである。そういった意味では、この中国合宿のため、根本から考え直すという機会を得たことは、良かったように思う。ただ、そのこととは別に装備として考えることは多い。最初に述べたように、トラックがあるにもかかわらず、荷を乗せて走るのは、何

とはなしにアボらしいものであった。これは、荷を持ちたくない、という意味では全くない。山行の時のように荷を持つことに必然性が伴わないのである。「必要なものは自分で持つべきだ」というのが、積載の基準であったが、結局のところ、我々の持ったのは、必要なものではなく、積みやすいものであった。病人が出た時には、その人間の持ち物の一切をトラックに積んでしまったこともある。どうもお手軽にすませた感がある。かと言って、中国側の助けがなければ事が進まなかったことも確かなのだ。海外合宿の、特に環境の異った土地での難しさを痛感した。以後、海外合宿を組む時には、参考にしてほしい。

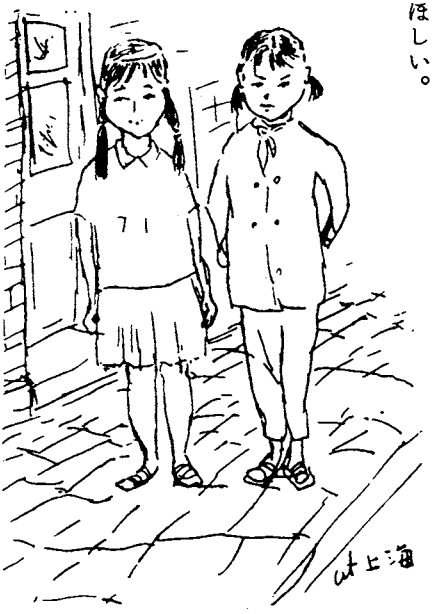


図 1

○個装表

1	自転車	16	下着	31	エレキ
2	バイク用ゴムヒモ	17	手ぬぐい	32	替電池
3	団装袋	18	サングラス	33	替電球
4	サブザック	19	ゴーグル	34	個人医療
5	シュラフ	20	マスク	35	洗面具
6	ズック	21	トイレットペーパー	36	時計
7	バミューダ	22	細引	37	貴重品袋
8	ハイソックス	23	ナイフ	38	現金
9	行動用シャツ	24	武器	39	パスポート
10	ジャージ	25	ハシ	40	学生証
11	ウィンドブレーカー	26	ライター	41	筆記具
12	帽子	27	マッチ	42	計画書
13	学生ズボン	28	ホイッスル	43	ポリタン
14	白ワイシャツ	29	地図	44	軍手
15	ウール行動着	30	磁石		

○　団装表　　図 2

品名	数	品名	数	品名	数
1 エスパース	7	13 みやげ		25 ジグボトル	4
2 フライ	2	14 アルバム	1	26 灯油 4ℓ／1日	
3 ホエブス	6	15 医療箱	1	27 水 12ℓ／1日	
4 アミ	3	16 修理工具	1	28 ポンプ	1
5 ナベ	7	17 修理工具(自)	1	29 中国人用シュラフ	10
6 ナベブタ	7	18 空気入れ	3	30 〃 マット	10
7 メタ	10	19 予備タイヤ	2	31 カメラ	4
8 予備丸食	30	20 〃 チューブ	6	32 8㎜カメラ	2
9 ガラクタ		21 〃 スポーク	10	33 フィルム	136
10 ローソク		22 〃 荷台	1	34 ナベ台用板	1
11 ビニシ	2	23 〃 自転車	1	35 自転車	2
12 病人食・日本食		24 2ℓポリタン	6	36 ナベ係個装	

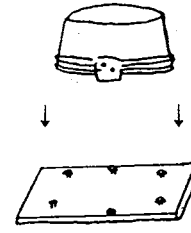
国内持参品　1～6、11～18、24、25、29～36
現地調達品　10
要請品　9、17、19～23、26～28

図A

←日よけ

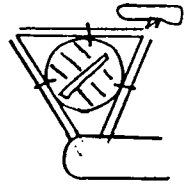
↑
ゴムヒモ

図B



↑ ナベの形にクギ
この板を針金で荷台につけた

図C



サドル

自転車係報告

広瀬明彦

〔合宿準備段階〕

自転車係の準備は難航したが、その大きな原因は使用する車種の選択が大幅に遅れてしまったことである。

当初の段階では今越輪業などの小売店での大量購入によって市価よりも安く入手する方針であったが、やがて、折からの資金難のため、メーカー・団体から自転車を譲り受けるという案が出され、前述の案と並行して進められていったが交渉はゆきづまっていた。

そのうち、「中国製の自転車を使おう」という画期的な案がにわかに脚光を浴びてきた。もちろん、経費節減のためである。ただし、これには「現地で実物を見るまではどんなものなのかまったく予想がつかない」という不安がつきまとって、えらく苦労してしまった。以下、現地調達の場合のメリット、デメリットを挙げる。

（メリット）

(1)経費が安くあがる。現地調達だと二万円弱。日本から持参だと購入価格およびオーバーチャージ（片道1kgについて1千円）で10万円近くになる。

(2)飛行機・列車での移動の際の手間がはぶける。

(3)中国人・日本人それぞれの使用する車種を統一することによって同一条件の下で活動できる。

（デメリット）

(1)構造、材質、規格などが不明のため、修理工具、替部品、積載方法が決定できない。このため、個装、団装、ザックなどの装備品目の選定が大幅に遅れてしまった。

(2)タイヤ、チューブの規格・材質が不明のため、気象の資料不足と相まってパンク対策を大いに当惑させた。

(3)現物が手元にないため、実情に即したスクーリング、修理の実地訓練、トレーニングができなかった。

結局、これらのデメリットにもかかわらず、6月下旬、現地調達案が最終的に可決された。

次に問題となったのがトレーニング用の自転車である。交渉の結果、市川市役所から放置自転車15台を借用することとなり、6月中のトレーニングへの導入および2度にわたるワンダリングを実施した。この結果、中国製自転車でも十分やっていけるというメドが立ち、目を見張るほどのボンコツさは係の修理技術を向上させた。

なお、この間、係は今越輪業に通い、技術習得に務め

たが、部内でスクーリングする段階まではいかなかった。

7月上旬、自転車の修理工具・替部品が決定された。表1に示す通りである。

なお、OB用の自転車5台は日本からサイクリング車を持参することにした。

〔合宿中〕

今回、我々が使用した車種は「フライング・ピジョン号」。サイズは28インチでずいぶん大きい。一見、わが国の実用車っぽいが、キャリは小さく全体的にスマート。

1　荷物の積載

行動中使用するもの、しないものに分け、それぞれ前・後に積載した。水ボリ・セーター・ホエブスなどはサブザックにつめ前へ固定。この際、日本から持参のカゴをハンドル等を利用して取付けた。ただ、中国製自転車には前キャリアがないため、行動中はかなり揺れネジのとんだ者も多数いたが、仲々好評であった。後の方はズタ袋を使用し、ゴムテープでキャリアに固定した。当初の予定では、フロントバックおよびサイドバックを使用する予定だったが、資金不足と規格不明のため、こういう方法をとったのである。

やっかいだったのは、ナベ、フタの積載。結局、新人の自転車1台をナベ専用にして、ナベ7個を後部に積み、フタは各自転車に1個ずつ分配した。

2　行動形態

全体を3パーティーに分け、それぞれの学年・係を振りわけた。自転車係は各パーティに1名とする。原則として各パーティーは独自に行動し、2年がトップ、リーダーが最後尾につく。休憩、体操その他の行動形式は通常の合宿に準ずる。

3　故　障

大きな故障はなかった。合宿前あれほど恐れていたパンクは一回で済む。（行動時以外のパンクは他に2件あった）　理由としては、地表温度が思っていた程上昇しなかった、道路の状態がよくタイヤ・チューブも予想以上に丈夫だったことがあげられる。最も手を焼いたのがクランクのコッターピン。大体、中国製の部品はどれも粗悪であり、たやすく折れたり変形したりする。おかげでクランクがすぐにガタつき計8本交換した。また、重荷と品質不良のためスタンドが多数折れ、その他、サドル・カゴのネジの緩み・紛失がめだった。

4　係の仕事

自転車の管理・修理は中国側がとりしきっており、また、故障自体が少なかったため、個人別に故障のチェックをした以外は、あまり仕事がなかった。なお、合宿前

表1　修理工具・替部品リスト

モンキースパナ	2)
メガネレンチ	2 (8×10、11×13)
スパナ	1(14×17)
多目的スパナ	2
プライヤ	2
ニップルまわし	2
さしかえドライバー	3
オイル	1
ビニールテープ	1
フレームポンプ	3
パッキン	1
チェーンのジョイント	3
軍手	1
ボルト・ナット	適　量
カゴ	17
フロントキャリア	3

バンク修理工具	
ゴムノリ	3
パッチ	8(10㎝×20㎝)
タイヤレバー	6
ハサミ	3
布ヤスリ	6
虫ゴム	50
替バルブ	8
布	3

なお、中国側への要請品として、予備のタイヤ、チューブ、スポーク、キャリア、その他をあげておいたが、ほとんどそろっていなかった。
(注) OB用の修理工具、替部品は含まれていない。

に要請したはずの修理工具・替部品がそろっておらず、中国側が用意したものには不備・かたよりが目立った。

5　道路状況

幅5m程の立派な道路でほとんどが簡易舗装されていた。ただ、日中温度が上昇すると表面のコールタールがとびはねてくるのには参った。玉門市入口の登り坂以外には急なアップダウンはなく、変速機がなくても十分にやっていけた。

6　その他

今回、自転車で走ったのは、全現役部員17名、OB5名、中国人10名の総勢32名。神沢部長、中国人関係者7名が車で伴走した。ただし、自転車に乗る中国人は毎日入れ替った。32日間のうち、自転車による活動は、13日間。走行距離は六〇〇〇Kmだった。活動終了後、自転車は中国政府に寄付することにし、OBの車のみ日本へ持ちかえった。ただ、土屋OBの自転車が敦煌〜安西間で輸送中に紛失。トラックの荷台からずり落ちたらしく、結局、発見できなかった。

〔総括および今後の課題〕

今回の中国合宿は、「自転車を現地で調達する」ということにはじめから終りまで大いに振り回された。たしかにあの時点では、そうするしかなかったのであり、そ

れなりの価値はあった。しかし、今後、合宿で自転車を使用する場合には、現地調達というのは避けるべきであろう。ただ単に金がないからと言ってとびついてしまったのでは、後々まで苦労が絶えないことになる。急がば回れである。

なお、自転車係は今合宿で身につけた自転車に関する知識・技術を部の実力の一部として、しっかり後代に伝える義務があろう。

今こそ明かす FLYING PIGEON のすべて!!

(かなり正確ではありません)

基本的には日本製実用車と大差ない。フレームサイズは23インチ。フレームの色はダークグリーンである。

デカ目のベル

ヘッドのネジ 12mm

サドルはでかくて高い。クッションがきいている。

キャリア 車体のわりには実に小さい。薄い鉄パイプ製で、丈夫とはいえない。

おもしろい形のカギ

鳥のカザリ物

チューブは赤と黒実にモロくてすぐ破ける。丸に弾力がない。

シートピン 右14mm 左12mm

フレームサイズ

リフレクター

フロントホークエンドのネジ 14mm

リアホークエンドはトラック・エンド式でチェーン引きその他は日本と同じ。ネジは17mm

前後のブレーキは日本の実用車と同じ。

14mm

パルプはウッド式でサイズは日本製とほぼ同じ。プラスチック製。

タイヤ(28×1½) 引っ掛け式だが、日本製とちがい、掛けこみ部分が少ない。

クランクとペダルはすぐにガタがきた。中国製のネジ・ピン、その他の部品は実に粗悪である。

中国のスタンドは全部この形

食糧係報告

寺沢秀記

I 計画段階

今回ほど、食糧に関して異例であった合宿はないと思う。中国が共産主義国であるために、情報が得られなかったせいもあるが、事前の交渉において、明確にされている事項が少量であったためである。

1 装備係と連絡を取り、完全自炊の方向で行くことに決定する。食糧調達・食当方法などの詳細部分は、すべて現地打ち合わせとする。

2 国内からは、医療対策として病人食と、普段我々が国内合宿で作る一般的な日本食を、数食分準備した。これは、中国料理に対する拒絶感を防止するためと、日本食を中国の人々に紹介するという意味から持参した。

3 病人食は、ベビーフードを主体とした流動食で構成したが、味覚の点で不評であった。病人対策は、おかゆ・くずゆなどを作ったり、果実類の缶詰の購入による方が効果的であった。

4 日本食に関しても、日本食紹介の意義では、今回のメニューは失敗であった。だし類、素の類を多く持ち込むべきであったと思う。

II 現地交渉

蘭州に至るまでの期間に、中国側と食糧及び食当に関して細部にわたる打ち合わせを行なった。だが、あいまいな部分が多く、仕事のほとんどが中国側の人々によって行なわれるとのことであった。

1 調達に関しては、中国側が移動している中で、現地調達を行なう。これは、中国側に一任しておいたので、大きな問題は生じなかったが、我々が食当するときに必要な材料が、手に入りにくいということを考慮しなかった。

2 中国側には、コックが2名同伴する。やはり、プロと素人との差は大きく、この2名に我々の食当の大半をまかせるかたちになってしまったが、材料・調味料・火力・人数の点を考えればやむをえなかった。

3 メニューの決定は、前日に、コック・通訳・食糧係で打ち合わせを行なうことにする。しかし、我々は一品料理で生活しているが、中国側では、最低3品作ることを要請された。

4 食当時間は、夜2時間、朝1・5時間、昼はなるべく調理のいらないものという方針であったが、ほ

とんど守られてはいなかった。

5　外食を自由に行ないたい旨を要請したが、衛生上の理由から、受け入れられなかった。

6　食当チームは、2年1名、新人3名、コック2名、中国人2名としたが、時間的都合などから、徹底されていなかった。

Ⅲ　食当

初期の頃、食当の要領が普段とはだいぶ違うため、かなり手間取ることが多かった。また、コックが参加したことによって、合宿本来の食当が出来なくなってしまったことも事実である。それによって、今合宿においては、食当技術の向上を放棄するか、不完全なままでもこのまま続けるかが問題となった。この問題は、食当を補助するのではなく、責任をもって一品料理を作ることでかたずいた。

しかし、合宿中の食当の状態は、まさにひどいものであった。水作りから始まって、品目の多さ、火力不足などの要因が加わり、それにもまして、中国人の、のんびり食当には閉口してしまう。結果的には、時間厳守が徹底されないことになった。

食当に関しては、今後の活動に対して、大きな課題を残すことになってしまった。今合宿で欠いてしまったものを早急に補うことが必要である。

Ⅳ　総括

海外で合宿を行なうには、困難が伴なうことは、ある程度予測はしていたが、予想以上にたいへんなものであった。

困難な条件の下で合宿を行なうからには、それなりにしっかりした心構えで望むことは不可欠である。しかし、残念なことに、合宿の活動としては満足に行なうことは出来なかった。また、連絡の不徹底などといった初歩的なミスを、幾度も繰り返すことになってしまった。この点は、十分に反省した上で、今後の活動に生かして行くことが大切である。

この合宿を通して感じたことは、海外合宿で、自炊生活を基本とするのであれば、十分な調査・研究を行なった上で、行なわなければならないと思う。つまり、食品状態や購買組織が明確になっていることが、重要であろう。

今回の場合のように、私たちだけで活動する合宿とは違って、食生活全般が異なる中国の人々と共に活動することは相互の友好を深める意義においては、大きな成果があったように思う。また、普段の合宿においては体験出来ない食当場面に出会ったことは、今後の活動にも何かの利点をもたらせてくれるだろう。

中国合宿行動中食事メニュー

朝食　主食　おかゆ …　即みそ、カップスープ
　　パ　ン …　バター、ジャム、コーヒー、ミルク
　　副食　漬物類、青菜の炒め物
　　他に饅頭が補助的に付くこともある。

昼食　主食　パ　ン …　バター、ジャム、コーヒー、ミルク
　　インスタントラーメン
　　副食　牛肉の味付缶詰、ビータン、漬物類
　　停滞日には、手打ちラーメン、炒め物数種類も出た。

夕食　主食　ごはん、饅頭
　　副食

	日　本　食	中　国　食
7／30		あげナス、ピーマン炒め、トマト入り卵やき、肉ジャガ
31		
8／1		
2	カレー	手打ちうどん　※
3	野菜炒め	※
4		ギョウザ　※
5	天ぷら	※
6		
7	ネギ、玉子入りスープ	※
8	マッシュルームと椎茸のバター炒め	※
9	キノコ入りシチュー	肉饅頭
10	ピーマン入り卵やき、隠元の塩ゆで	※
11	竹の子入り野菜炒め	※
12		ギョウザ
13	椎茸とネギの炒めもの	玉子焼　※
14		コイの辛煮、牛缶　※
15	スープ	コンビーフの酢かけ　※
16		

※　ピーマンと肉炒め、青菜炒め、隠元炒め

医療係報告

原　英泰

我々医療係は、計画段階においてはあまり活動のしようがなかった。何しろ資料がなかったし、中国側の医療事情がどのようになっているのかも全くと言って良い程わからなかったのである。従って我々の計画は、ほぼ予測に基づいて立てられていったと言える。この段階で最も気を使ったのは〝水〟の問題である。砂漠の中を走るのであるから、これは深刻な問題である。のどの渇きも較べものにならぬかもしれないし、砂でのどをやられるかもしれない。おまけに、我々の走路付近の水はほとんどが〝硬水〟であるということだ。これは、日本で飲料用に使われている〝軟水〟とは性質的に異なるものであって、煮沸したぐらいではどうにもならない。これには色々と悩まされたが、結局は水は中国側が用意してくれるということであっさりと片付いてしまった。そして、行動中は、この水を飲料用、うがい用として各自一日一ℓずつ確保して走ることになった。

次に問題となったのは〝日射し〟である。これはかりは、実際に経験してみないことには全く程度がわからない。おまけに地表温度はかなり上昇するという。日射病、あるいは熱射病の恐れは充分にある。これはもう、予防をしっかりとするしかない。強い日射しをさえぎるために、足はバミューダにハイソックス、シャツは長袖、それもなるべく白、そして帽子にはうしろ側に日よけの布をつけることにした。サングラスを持ってゆくことにし、日焼け防止用にワセリンも一応持っていった。しかし、この〝日射し〟は結局、大した問題とはならなかった。気象係の報告でもわかることだが、行動中の天候が我々の予想と大きく異ったためである。これは恵まれたことだったのかもしれない。カンカン照りの日はそれ程なかったにもかかわらず、我々は相当日に焼けていたし、そのような日には、アスファルトがやわらかくなっていたことも確かなのであるから。先に挙げたような装備類は、それ程重要なものとはならなかった。しかし、それは、天候が異常で、砂漠らしからぬものであったことを忘れてはならない。

もう一つ気がかりであったことは、砂などで、のどをやられないか、ということであった。風のない所ならば砂はそう気にすることもなかったろうが、地域によっては相当風が吹く、ということである。これに対して、のどを守るには、結局、マスクとうがいしかなかった。そ

して、医薬品にもトローチ、ルゴール等を多く加えた。マスクは各自が持って行ったが、使用した者はほんの数人であった。これは、天候に恵まれたせいもあるが、自転車をこぎながらマスクをするなどということが、非常にうっとうしいものであったせいもある。のどを痛めるのは、砂ばかりではなかった。朝夕の冷え込みは相当なものであり、特に天幕生活においては、それにどう対処し、順応してゆくかが、体調を維持してゆく上で大きなキイポイントとなったと言える。

このように、我々は主に自転車での行動を中心に計画を立てていったが、それ以外の行動、例えば、上海、蘭州、列車内に対する気配りも大切であったと反省している。最初の上海での二日間で隊員の緊張は、かなり緩んだようであったし、それに続く四十時間もの汽車旅は、日本では考えられないことであり、この結果、蘭州では多くの発熱者を出してしまった。汽車の中では、煤煙のためにのどや眼をやられる者もいた。乾燥した蘭州の街ではほとんどの者がのどの痛みを訴えていたし、交歓会等の忙しいスケジュールで体調をくずす者も少くはなかった。

これより後は、おおざっぱに日を追って報告してゆきたいと思う。

七月二十一・二十二日（上海・ホテル泊）

さすがに体調をくずす者はいない。成田からの飛行機内でもおかしくなる者はいなかった。合宿とは思えぬ程の快適さである。しかし、見慣れぬ中国料理の食べ過ぎか、少しばかり腹の調子を悪くする者もいた。

七月二十二・二十三・二十四日（蘭州へ向う列車内）

これといって不調の者はいない。汽車の煤煙のためか眼にものもらいをつくる者がいたが、これは体質的なものも大きかったのではないだろうか。蘭州へ近づくに従って朝晩の冷え込みが厳しくなってくる。そのせいか風邪気味の者が数名。のどの痛みを訴える者もいた。

七月二十四・二十五・二十六日（蘭州・ホテル泊）

ここら辺りから、医療係の仕事が少しずつふえてきた。蘭州は乾燥した街で、朝夕の冷え込みと日中の気温差は日本ではとても考えられないようなものであった。就寝中は、各自の部屋の窓をしっかり閉めるなどして用心してもらったが、四十時間に及ぶ汽車旅と少々過密気味のスケジュールによる疲れからか、発熱する者が三名も出た。熱は、最も上がった者で39度4分であったが、風邪薬を与え、行動を休ませるなどして、三名とも蘭州滞在中に回復した。熱こそ出さなかったが、のどの痛みを訴える者も多く9名程いたが、各自トローチをなめるなど

してひどくはならなかった。また、ここで初めて下痢をする者が出た。料理が油こかったことと、食べ過ぎによる消化不良が原因であろうかと思う。

七月二十七～二十九日（酒泉へ向う列車内、及び酒泉）

車中で初めて外傷者が出た。やけどである。原因は車内で配られる熱いお茶を、あやまってこぼしたため。程度は一～二度。範囲は直径一〇㎝ほどのもの。部位は右大腿部である。車内の洗面所で一時間半程ひたすら冷やした。このせいか、痛みもたいしてひどくはならず、酒泉からの自転車の行動にも全く支障はなかった。この時気づいたのであるが、中国の人達は、やけどを水で冷すのをあまり良しとしないようだ。他の乗客などから、かなり強く、やめろやめろと言われたので、水がもったいないせいかと思っていたが、どうやらそうではなかった。水の質が悪いせいかもしれないが、ここでは強情に日本流にひたすら冷し続けた。痛みがひいてからは化膿止めの軟こうをぬった。

酒泉到着後、我々と共に行動してくれる医師と看護夫（男）と会う。

また、この頃から下痢をする者が多くなる。内一人は相当にひどいらしく、かなりぐったりとしていた。薬もあまり効き目がないようであったが、酒泉を発つ頃にはどうにかもちなおしていた。しかし、相変らず下痢が続く者もいた。

七月三十～八月三日（酒泉・双塔　ダム、安西）

下痢をする者が相変らず多い。薬を飲ませてみてはいるが、あまり効かないようである。腹痛を伴っている者もいる。31日に雨の中を走ったせいか、発熱する者が出た。他にも気管支をやられたらしい者もいる。二名ともたいしたことはなかったが、丁度停滞日であったので、ゆっくり休養させる。

8月2日、玉門鎮において、酒泉以来腹痛のとまらぬ者を中国側の医師に診断してもらう。〃急性胃腸炎〃ということで、点滴を打たれることになる。他にもう一名が点滴を打たれることとなったが、これには部員一同びっくりした。中国では、日本と違い、わりと簡単に点滴を打つようだ。病原を取り除くというより、体力を回復させて病気をおさえる、というのが中国式の医療であるらしい。翌日、先の二名はほとんど回復したが、中国側が、自転車で走ることを許さず、結局、安西までマイクロバスで移動することになった。

八月四日～七日

6日、烽火台において、39度4分の発熱する者あり。つき添いの医師の診断に従い、他一名と共に敦煌県病院

で、診察を受けることになり、マイクロバスで敦煌へと向う。病院で二名とも点滴を受ける。

八月八日～十二日

腹痛及び発熱する者あり、敦煌県病院には診察を受け、腸カタルと診断され、点滴を受ける。しかし、薬品が合わなかったためか、全身ケイレンを起し、翌日、腹の調子は良くなったものの、右腕が通常の三倍程の太さにふくれあがる。このため、この一名は莫高窟へはマイクロバスで向うこととなる。

八月十三日～十六日

13日、行動中に腹痛及びはき気を訴える者あり。昼食地点よりバスで陽関へと向う。翌日には回復する。

14日、南湖公社において39度4分の発熱する者あり。翌日、熱は下るが、途中までマイクロバスで移動する。

八月十七・十八・十九日

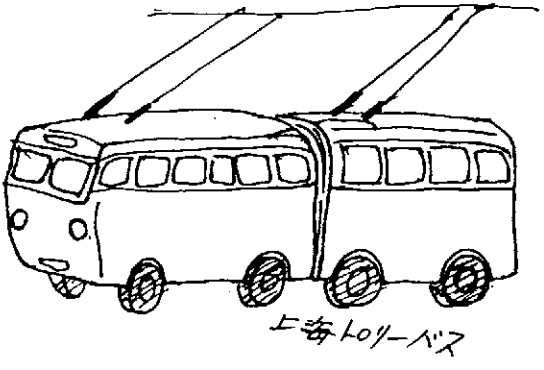
蘭州における送別会の後に40度4分の熱を出す者あり。甘粛省人民医院で診察を受ける。血圧、血液、大便検査を受け、注射を一本打ってもらう。翌日にはほぼ回復し予定通り行動に加わる。

八月二十・二十一日（上海）

最後の最後まで病人は尽きなかった。上海見物のバスの中で一名が腹痛を起す。華東病院にて診察を受け、注射二本を打たれる。21日、空港へ向う前に、注射をもう一本打たれほぼ回復する。

帰国後は、これといって体の不調を訴える者はいなかった。

以上のように、合宿中、医療係の手の休まる時はほとんどなく、およそ全員が医療係と関りを持った。個人個人詳しく書くことはできないので、次のような表にあらわすことにする。



≪医薬品≫

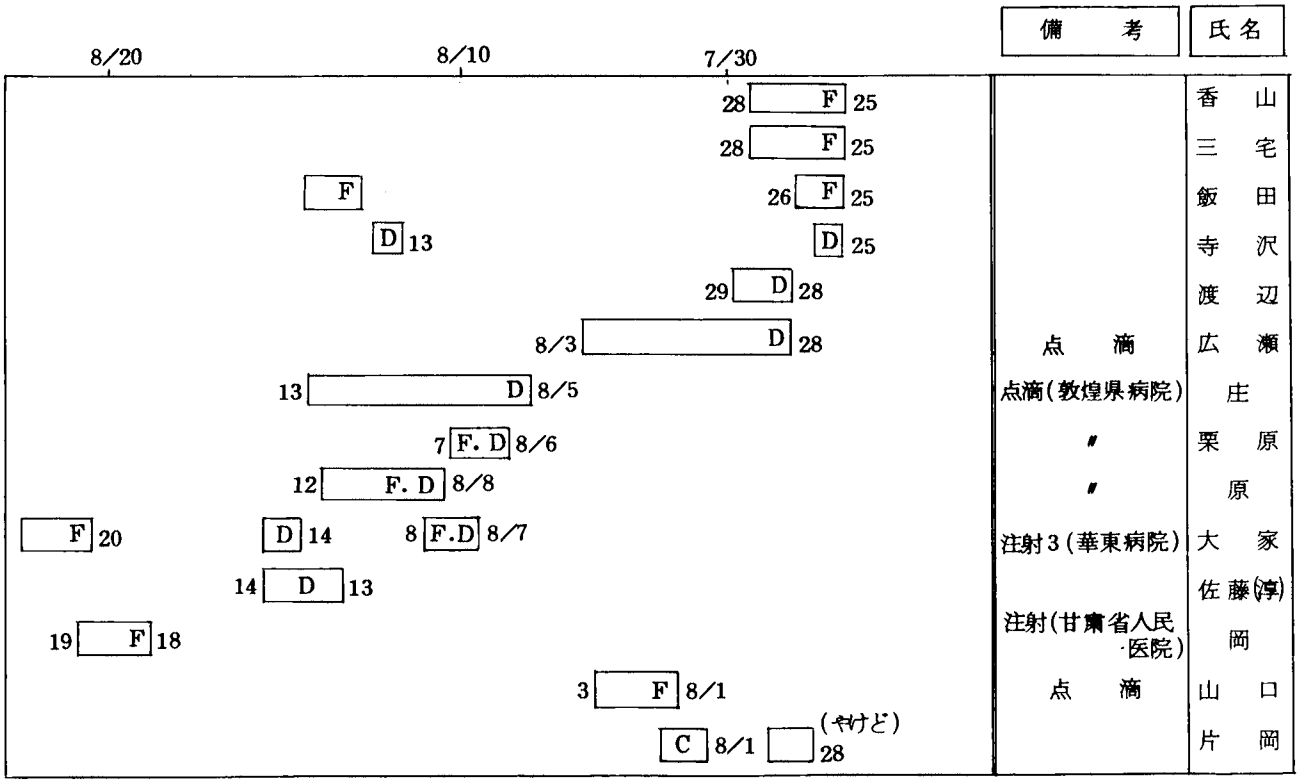
効用	薬品名	数量	備考
消毒・外傷	マキュロン	2	使用
〃	ホルム散	2	未使用
〃	アルコール(500cc)	1	使用
湿布・消炎	サロメチール	4	〃
〃	バテックス	10袋	〃
〃	ルゴール(25cc)	4	〃
虫さされ	ムヒ(大)	1	〃
	キンカン	1	未使用
目薬	大学目薬	8	使用
抗生剤軟こう	クロロマイシン軟こう	2	〃
鎮痛・解熱	バッファリン	25	〃
〃	ポンタール	50	下痢、解熱に効果あり
咳止め	ブロン	25	未使用
	トローチ	50	使用
風邪薬	ダンリッチ	50	〃
整腸剤	正露丸	50	あまり効果なし
	若松	50	〃
緩下剤	サラリン	25	未使用
止血剤	アドナ	25	〃
抗性物質	アクロマイシン	50	使用

≪器　材≫

器材名	数量
巻軸帯（4、6、8裂）	各2
三角布（特大）	3
伸縮帯（4裂）	5
テーピングテープ	3
ホワイトテープ	8
紙バンソーコ	2
ガーゼ	5袋
油紙	3袋
脱脂綿	2袋
ピンセット	2
ハサミ	2
爪切り	2
トゲ抜き	2
耳かき	2
綿棒	4箱
体温計	2
カミソリ	2
眼帯	5
サポーター（ひざ、足首、ひじ）	各2
筆記用具（黒・赤ボールペン）	各2
かんし	2
医療明細書	10
伝令書	10

≪個人医療≫

器材名	数量
風邪薬	適量
整腸剤	〃
バンドエイド	10枚
手ぬぐい	1
三角布（特大）	1
ホワイトテープ	1
マスク	1
目薬	1
日焼け止め	1
トローチ	20


8/20
8/10
7/30
備　考
氏名
28 F 25
28 F 25
F
26 F 25
D 13
D 25
29 D 28
8/3 D 28
13 D 8/5
7 F. D 8/6
12 F. D 8/8
F 20
D 14
8 F.D 8/7
14 D 13
19 F 18
3 F 8/1
C 8/1
(やけど) 28
香山
三宅
飯田
寺沢
渡辺
広瀬
点滴
点滴(敦煌県病院)
庄
〃
栗原
〃
原
注射3(華東病院)
大家
佐藤(淳)
注射(甘粛省人民医院)
岡
点滴
山口
片岡

F：発熱　　D　下痢　　C：のど

気象係報告

広瀬明彦

〔合宿準備段階〕

中国の気象はまったくの未知数であった。とにかく、資料が不足しており、いかなる気候であるのか予測のしようがなかった。このため、気象係のみならず、装備係・医療係その他の準備も大幅に遅れてしまった。

係としての具体的な活動は以下の通りである。

1　中国の気象に関する文献を研究する。

2　気象庁図書館において過去のデーターを分析する。

3　NHKのシルクロード取材班の人に話を聞く。

以上であるが、成果はあがらず、ついにはいっさいの活動を停止するのやむなきに至った。理由は次の通り。

1　今回の活動地域は大陸性気候のため安定しており、また、砂漠気候であるため雨は降らないという自信に基づく一種の気の緩みがあった。

2　とにかく資料が不足しており対象がたてられない。

3　超多忙なスケジュールのため、気象の研究にまわすだけの時間的余裕がない。

そのうち、中国の気象に関するモデルが作成された。（表1参照）これは主にNHKの人から聞いた話に基づくものであり、この気象モデルをもとにあらゆる準備が進められていった。

〔合宿中の記録〕

1　気象係の仕事

(1) 温度計・気圧計を持参し、午前6時、午後2時、9時における気温・気圧を測定し、晴天の日は日なたの温度・地表温度も計ることにした。しかし、正確な数値が得られたとは言い難い。

(2) 毎日の天気概況、その他日の出・日没の時刻などを記録した。

2　中国の気候の特徴

とにかく、日本ばなれした、いかにも大陸的なスケールのでかい気候であった。だが、表1にも示すように、予想していたほど極端な気候ではなかった。

(1) 上海および車中

典型的な湿潤温暖気候で、東京の気候とほぼ同じであるが、こちらほど蒸し暑くはなくしのぎやすい。空は青く澄みわたり空気もきれいだ。

上海から蘭州に至る車中においては、日中は極度に蒸し暑く、最高温度は40℃まで上った。そのくせ、夜間はかなり冷えこみ、大陸性気候の特徴を見せはじめた。

（表1）

	予想気象	対策	実際の気象
1	強力な紫外線。膚をさらすと、たちまち水泡ができ、ただれてくる。	帽子に日よけをつける。白系統の長袖シャツ、ハイソックス、ニッカズボンで全身を覆う。サングラスは必携。	たしかに日射しは日本よりもずっと強かったが、雨、くもりがちの天候のせいもあり、たいしたことはなかった
2	熱風および突風。風をあびると、膚あれ、やけどがひどく、水泡ができる。	右記の服装に加え、ゴーグル、マスク、ウインドブレーカー、手袋といった重装備を準備した。	風はひんやりと涼しかった。突風は一度もなく、風向、風力ともに安定していた。
3	雨は降らない。	雨具を個装からはずす。エスパースのフライもカット。ビニシは団装の2枚のみ。	何と3日に一度の割合で雨が降った。ウインドブレーカーで雨具の代用ができるはずもなく、実に寒い思いをした。
4	湿度が極端に低い。空気は乾ききっている。	トローチを個装にする。うがい用の水を各自用意して、一本ごとにうがいの励行を心がける。	実際に、空気は非常に乾燥していた。そのせいか、陽なたでも汗はほとんどかかず、日陰に入るとひんやりする。のどを痛めた者が多数出た。
5	強烈な直射日光。	日よけ用にフライを2個団装とする。	極端に強いことはない。フライも用なし
6	日中と夜間の気温較差が大きい。	セーターを個装にした以外は特になし	気温較差は15～20℃もあった。

(2) 蘭州

蘭州の空はあまりきれいではない。いつもかすんでいる。黄土のせいであろう。空気は非常に乾燥しており、のどを痛めた者が多く出た。日中と夜間の気候較差は10℃もある。なお、蘭州に滞在した4日間のうち、2日間雨に降られた。うち1日はかなりの降水量だった。

(3) シルクロード

実に砂漠らしい気候であった。日中の気温は33～33℃であるが、日なたの温度は46～48℃、地表温度は60℃近くにもなった。だが、湿度が低いため汗はほとんどかかない。日陰にはいると、30℃という気温にもかかわらず、ひんやりと気持ちがいい。夜間はぐっと冷えこみ、砂漠の中では12～13℃まで落ちこむ。湿度の低さは、晴天の日と雨天の日の気温較差にも影響を与える。すなわち、日光がないと気温はあがらず、正午でも20℃をきった。

紫外線はたしかに強く、くもり空でもかなり日やけしたが、予想していたほどではなかった。

特筆すべきは雨である。砂漠のまん中で雨にうたれたことが何度もあった。「灼熱地獄」のイメージとはほど遠い、いつもどんよりとした重苦しい雲がたれこめる実に寒々としたシルクロードの旅であった。

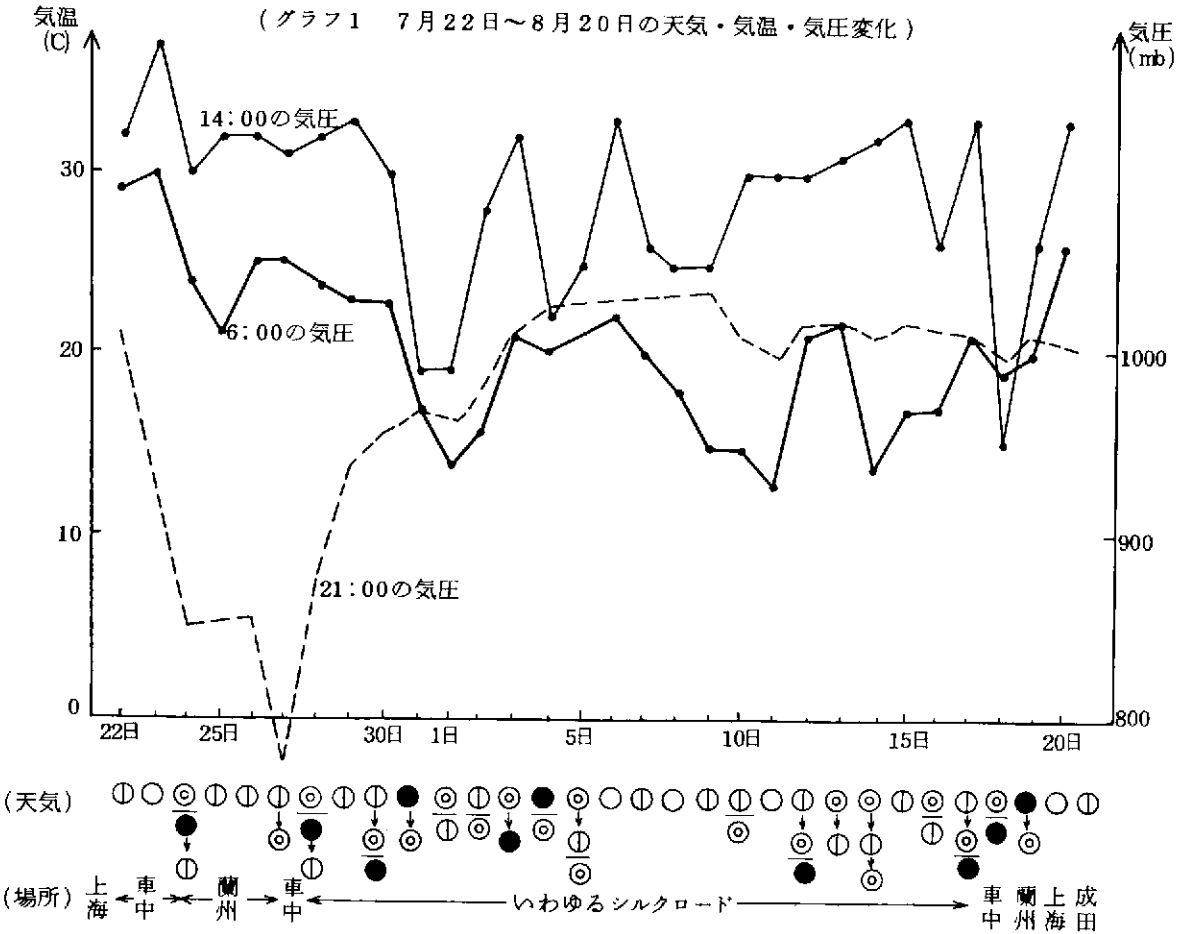
〔総括および今後の課題〕

今合宿における反省としては、やはり、準備の不足・遅れがあげられる。いくら資料不足だからと言って何もしないのはまずい。できる範囲内で分析・対策を行うべきである。例えば、今回の「雨」に見られたように、気象についてはとんだハプニングがおこりがちであるから、甘くみることなく、不測の事態にも十分耐えうるだけの下準備が必要である。付記すると、合宿中に雨が降るであろうことは、気象庁で過去のデーターを分析した際に、ある程度予想されたのである。それがいつのまにかうやむやになってしまったのは、気象係の責任であろう。

今回の合宿は、合宿前に予想した気象と実際の気象とのギャップの大きさに、大いに振りまわされた。土地の人々も口をそろえて、今年は異常気象だと言っていた。

今後の課題としては、合宿中の気象記録を整理し、後々まで保管することがあげられる。なにせ、中国の気象については資料がほとんどないゆえ、わが係のつたない記録にも希少価値があるだろうから。最後に記録の一部をグラフ1に示す。

（グラフ1　7月22日～8月20日の天気・気温・気圧変化）



トレーニング係報告

片岡正光

中国合宿に向けてのトレーニングは、以下三点を目標として行なった。第一に、シルクロードの暑熱乾燥した砂漠気候に一ケ月に亘って耐えられるだけの基礎体力、精神力養成、第二に、自転車行動に必要な体力を作ること。第三に、中国合宿へ向けて精神的な盛り上げを行なうことである。第一の基礎体力精神力の養成は、特に新人の体力と精神力の強化を考えたものである。入部三ケ月で一ケ月に及ぶ異国の地の合宿に新人が耐えられるかが心配であった。さらに、暑熱の中の行動が初めてであるので尚更であった。そこで、トレーニングメニューをハードにし特に五月末の新人錬成合宿までの間はランニング中心に基礎体力精神力作りに専念した。第二の自転車行動に対するトレーニングについて、自転車用筋力をつけるようなサーキットトレーニングをとり入れた他、実際に自転車を使用し、サイクリング等を行った。第三の精神的盛り上げの一環としてのトレーニングは、できるかぎり、全員でトレーニングを行うよう努めた。以上のようにトレーニング方針を立てたが、具体的なトレーニング方法について左記に記す。

新人錬成合宿までのトレーニングは、基礎的な体力を養成することにあるため、ランニングを主体にして、サーキット、筋肉トレーニング、スロープダッシュを曜日ごとに加え、毎回それにウェイトトレーニングを行った。次に錬成合宿以後の自転車をとり入れたトレーニングは、一週間を一サイクルとし、日曜にサイクリングを行い、一〇〇キロ程度走った。六月中旬から七月初旬

月　4Km走　自転車用筋力　ウェイト
火　早朝トレ二時間自転車で大学付近を走る。筋力
水　6Km走　サーキット　ウェイト
木　4Km走　自転車用サーキット　ウェイト
金　自転車20分走　自転車スロープダッシュ
土　休養　アルバイト
日　日帰りサイクリング　多摩湖往復

また六月末に二泊三日で自転車ワンダリングを実施した。千葉九十九里浜往復。

以上のようにトレーニングを実施したが、特に自転車使用によるトレーニングは、実践的ではあったが体力がついたかどうかは疑問である。結果的に、中国合宿はそれほど体力的精神的にきついものではなかったので是非は問えないが、自転車使用のトレーニングを行うなら今

一歩の工夫が必要であった。今回、中国製自転車を使用したことと、放置自転車を借入したことで思い切ったトレーニングができなかったのが実情であった。これはトレーニングとして反省すべきことではないかもしれないが、合宿前のトレーニングに加え、アルバイトや具体的準備により隊員の疲れが目立った。合宿中病人が多かったのはひとえにトレーニングが原因とはいえない。その証明として心配された新人よりもむしろ上級生に病人が多く出たことにある。

最後に海外合宿を行う場合、海外という特殊な環境で活動を行う場合、体力精神力をトレーニングだけでカバーできると考えるのは危険である。すべての準備段階における、自己の体力、健康の日常的管理が最も大切である。しかし、今回の合宿において自転車を日本でとりいれたトレーニングを少しでもつんだことは、今一歩の工夫は必要であったけれども、大いに役立ったと考える。

カメラ係報告

片岡正光

カメラ係は、合宿直前になって準備を始めたため、基本方針、フイルム・器材計画、事後記録について万全な準備を行えたとはいえない。特に、合宿中隊員からのカメラ係への不満が出たのは、準備段階での基本方針の万全性と統一性が欠落していたものと深く反省する。

(一) 基本方針

今度の中国合宿は、河西回廊の地を初めて自転車で行動するものであり、中国学生との交流という重要な要素も含んだ計画である。この探険冒険に類する活動において、部内の自己満足に終ることなく、その活動を広く世間に発表できるような記録を作る必要がある。この意味でカメラ係は、文章記録とならぶ完全な写真8ミリ記録を作成することを基本方針として左記の具体的な方針を立てた。また、資金面の補助を合宿後行うために商業用写真をも撮るが、あくまでも活動の範囲内で行動し、隊の行動の支障にならぬようにした。

(1) 商業用写真をも含め、中国合宿を外部へ発表できるような写真記録を作るため、リバーサルカラー、モ

ノクロフイルムを主体とした。

(2)すべての対象に対し撮りこぼしのないように、被写体分担をし、自然風土・スナップ・行動記録・建築物係等を決めた。

(3)隊員の行動を中心にした合宿後記念になる写真をとることにした。ネガカラーフイルムを使用。

(4)現役隊員は、自転車からの撮影を原則とし、OB隊員は、自動車からの撮影も可とした。

(5)8ミリ撮影も行うことにした。毎日放送の協力。

(二)フイルム・器材計画（別表参照）

(三)係別計画

○行動・自然風土・建築物―片岡（三年）リバーサル主体

○人物スナップ　―　香山（二年）リバーサル主体

　　―　川相（モノクロ主体）

○部内記録　―　関口（四年）ネガカラー

○行動全般記録　―　佐藤淳（四年）モノクロ

○8ミリ　―　芥川（OB）

　　―　原（三年）アシスタント

(四)総括反省

商業用写真が主体になりすぎるという隊員の不満が生じた。カメラ係としては、資金不足から商業用写真を重要視し、プロカメラマンの御協力で講習を受けるなど取り組んできたが、良い写真を撮ることが主眼になってしまい、自由行動時に部員とは別行動をとりすぎて部内の和を乱してしまったことは大いに反省している。商業用写真を撮ること自体を疑問視されたのは事前の隊員への説明不足であった。基本方針の綿密な立案と、隊員への確認が大切であった。また、写真係が五名8ミリ係が二名というのは、他の係との重複もあり、係責任が中途半端になってしまった。また、フイルム・器材計画については、自転車の行動中に撮影するのには限界があり、フイルムを八〇%程しか消化できなかったことは当初のフイルム計画に無理があり、器材については、一眼レフにおいて特に、旧型モデルであるため、レンズ交換にてまどり、自転車行動を主体にした活動において迅速性に欠け、結果的に、広角を中心にした変化のない写真が多くできてしまった。また係分担について合宿前半においては、被写体別に撮っていたが、後半の自転車行動においては、被写体が限られてくるために同じような写真が多くできた。しかし各自、係分担に留意していたため、撮りこぼしは防止できたと思う。

(五)写真・8ミリ記録の活用及び今後の管理

(1)記録リスト（別表参照）

(2)活用①写真展開催（自転車文化センター）

②各新聞・雑誌掲載　毎日新聞、サンデー毎日、山溪アウトドア・高二コース・アドバタイズ

(3)今後の管理

部の貴重な記録であるため厳重管理とし各代おくりで保存する。

①庶務係の責任下に写真管理を加える。

②庶務係は中国写真8ミリフイルムのリストを保存し継承する。

③原則として中国写真スライド・ネガ・アルバムは部外持ち出し不可とするが庶務係の責任範囲においては例外を認める。部員は必ず庶務の了解を得ること。

(六)今後への提言

今合宿においてカメラ係は急造されたために、方針、具体的準備で統一性に欠けてしまった。記録というのはともすれば、軽く見られる傾向にあるが、今合宿のように隊員から行動中に不満が出るようでは、活動自体の活性を減退させる大きな要因にも発展するものであるので、今後、カメラ係の位置や具体的行動について、計画段階での決定が必要である。合宿直前でカメラ係を作ることは避けるべきである。また、商業写真の是非については、慎重に決断するべきであり、もし、資金面で必要とされるなら、事前の意志疎通が必要である。

フィルム器材計画及び
記録（アルバム、ネガ、スライド、8ミリ）リスト

(1) フィルム器材計画

《フィルム》

種　類	数量(本)	内　訳
リバーサルカラー	80	部購入60（ASA64　36枚撮）
		サンデー毎日10（ASA200　20枚撮）
		山溪10（ASA400　36枚撮）
モノクロ	60	部購入30（ASA400　36枚撮）
		毎日新聞30（ASA400　36枚撮）
ネガカラー	40	部購入40（ASA100　36枚撮30　ASA400　36枚撮10）
8㎜フィルム	50	毎日放送　高感度10　普通40

㊟ ①　現像は毎日新聞社の御協力をうけ無料。　②　フィルムは各カメラ係
　　②　フィルムは各カメラ係に分配、各自保管

《器　材》

種　類	数量	種　類	数量
○本　体		広　角　28㎜	2
1眼レフ（アサヒペンタックス）	3	望　遠　135㎜	1
自動焦点カメラ	1	200㎜	1
防砂・防水カメラ	1	○付属品	
自動露出カメラ	1	三　脚	2
8㎜カメラ	2	レリーズ	2
○レンズ		クリーニング	1
標　準　49㎜	2		

㊟ ①　1眼レフのレンズ配当は、1台2～3コ
　　②　8㎜フィルムのケース（ジュラルミン）持参1コ

(2) 記録リスト

種・類	数量	備　考
スライドファイル	3	№1（1～240）　№2（241～360）　№3（361～568）
カラーネガファイル	2	№1　№2
白黒ネガファイル	1	№1
8ミリフィルム	2	№1　№2　1巻約25分
ネガアルバム	3	№1　№2　№3
白黒アルバム	1	
スライドネガファイル	1	スライドの形にせずネガのまま

おみやげ

庄　和也

一、日本から中国に贈った物

ライター	三〇個
手ぬぐい	五〇本
折り紙	一五セット
絵葉書	四セット
電卓	二〇台
早稲田大学のバッジ	五〇個
カセット付きのラジオ	一台
ペナント	一五枚

ライター、手ぬぐい、バッジは、中国でお世話になった人に、そのつど差し上げた。折り紙、絵葉書は、主に子供たちにあげた。電卓は、行動中、我々に同行してくださった中国の方々に、また、ラジカセは、中国国際旅行社酒泉支店へ贈った。ペナントは、蘭州大学、雁准人民公社、酒泉地区、酒泉中学校、玉門石油管理局、安西県共産党学校、楊家橋人民公社、南湖公社、敦煌県知事、甘粛省外事事務室、同省旅遊局、上海旅遊局、中国国際旅行社蘭州分社、同酒泉支社、同敦煌支社に贈った。

なお、ペナント一〇枚、ラジカセ、バッジ、電卓などは追加購入として、土屋OBに持って来ていただいた。

二、中国から贈られた物

蘭州大学から—ペナント、バッジ、詩一編、書物（「敦煌学・一集、二集」、「学生論文」）

酒泉体育委員会から—ペナント、バッジ

酒泉地区から—帽子

玉門石油管理局から—バッジ

楊家橋公社から—月牙泉の伝説の天馬の置物

中国国際旅行社蘭州分社から—シャツ

三、その他

日本においてお世話になった方々に贈るために、中国で飛天の壁掛けを八〇枚持ち帰った。

また、帰国後、額入写真を特にお世話になった方へ贈り、また写真展で使用したパネル一枚を、新日本国際株式会社へ贈った。

さらに、蘭州大学へ文庫本を、また蘭州分社を通して同行していただいた中国人へ、写真を送った。これらは、蘭州へ行く用事のあった新日本国際の方に、持って行っていただいた。

中国語学習会と中国研究ゼミナール

庄　和也

中国合宿を行なうにあたって、我々は、全部員がある程度中国という国について知っておく必要があると考えた。そこで、部員の自主的な研究を励行すると共に、一定期間、中国語学習会と中国研究ゼミナールを開き、中国への理解を深めようと考えた。

一、中国語学習会

期間は五十六年六月九日から七月十六日までの、毎週火曜と金曜で、合計十回の講義を設けた。時間はそれぞれ夜六時から八時までで、体育局の教室を借りて、原則として全員参加で行なった。講師は、新日本国際株式会社の長谷部氏にお願いした。（一回だけ長谷部氏の都合が悪く、同じく新日本国際の横井氏にお願いした）

内容は、中国語独特の発音である四声から入り、主によく使う日常語や数字について学んだ。四声一つとっても、なかなかうまくできず、部員一同、長谷部氏に叱咤激励されながらの授業であった。

教えていただいた内容を少し示すと、

こんにちは	你好
さようなら	再見
すみません	対不起
はじめまして	初次見面
わかりましたか	明白了
いくらですか	多少錢
ごちそうさま	吃好了
ありがとう	謝々

といったごく日常的なものが中心であった。こうして習った中国語は、中国の方々とコミュニケーションを持つ上で、大変役に立ったと思う。上海の街で、蘭州大学学生との交流会で、またずっと同行して下さった多くの中国の方々との会話の中で、我々はここで習んだ中国語を自分なりに駆使し、もどかしいながらも、ある心のふれあいを持つことができた。その意味で、中国語学習会は、有意義であったと思う。

また、六月二十三日の講義から、やはり新日本国際の加藤氏にお願いして、中国語の歌を勉強する事にした。「さくらさくら」「富士山」「故郷」といった日本の唱歌の中国語版や、「火車向着韶山　」「草原情歌」「我愛北京天安門」などの中国人になじみの深い歌を、中国語学習会の一環として学んだのであった。合宿中、我々は数々のレセプションを経験したが、その際、何か出し

物を出さねばならない我々を救ってくれたのが、これらの歌であった。特に「天安門」は好評だったし、中国の方々と交流を深める上で、中国語の歌が果たした役割には、大きいものがあったと思う。

また、七月十三日の講義では、新日本国際社長の渡部氏に、河西回廊や大学生の生活ぶりなど中国の楽しい話を聞かせていただき、部員一同中国への思いを熱くした。

中国合宿を、より楽しく、より意味深いものにした点で、中国語学習会は大きな成果があったと言えよう。ここで、お忙しい中、毎回足を運んで下さった長谷部氏、加藤氏に、厚くお礼を申しあげます。どうもありがとうございました。

なお、中国語の学習に関しては、五十六年四月から二ケ月間、四年の佐藤淳と関口勝正が、早稲田奉仕園の中国語講座に通ったことも付記しておきたい。

二、中国研究ゼミナール

また、中国そのものへの理解を深めるために、部員各自に一つずつテーマを決めさせて、中国研究ゼミとして、それを発表する場を設けた。期間は同じく六月九日から七月十日までの毎週火曜と金曜で、合計九回であった。時間は夜九時から十一時までで、場所は、四年佐藤淳の住む下宿の一室を、大家さんのご好意によって使わせていただくことができた。部員各自のテーマは、概要次の通りであった。

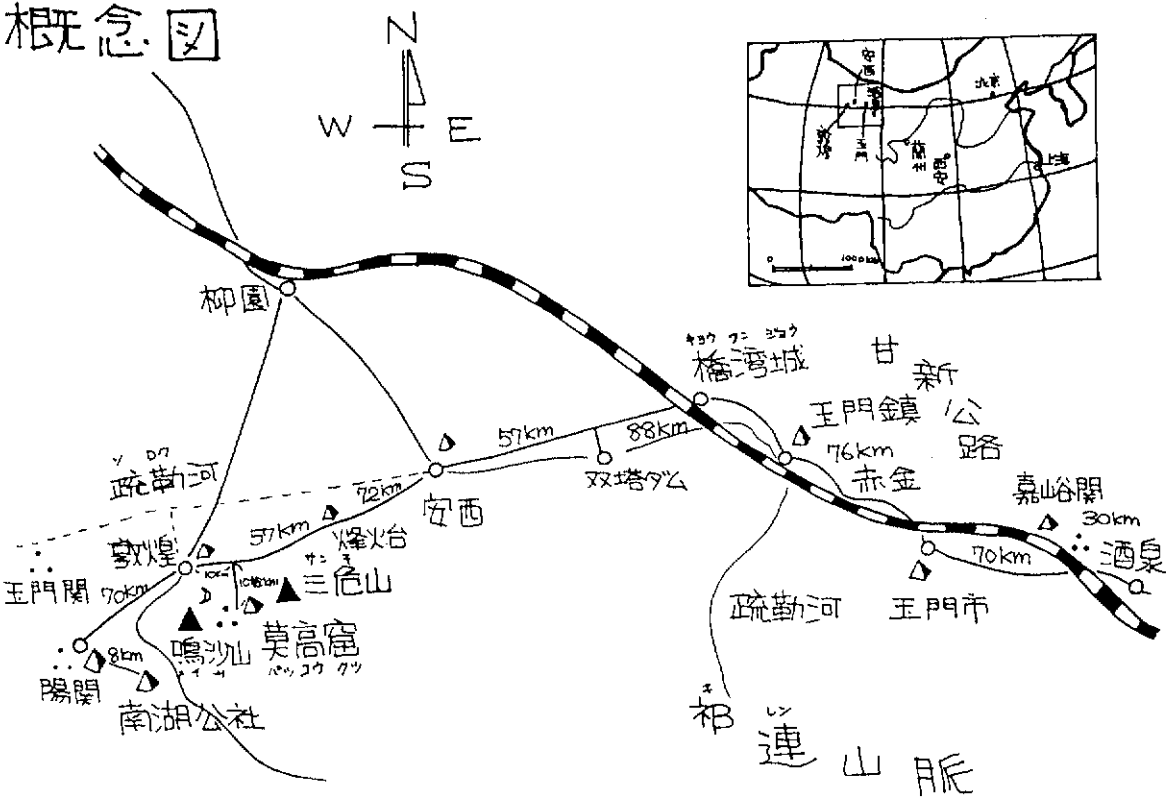
六月	九日	(火)	佐藤(佳) 河西回廊について
			栗原 シルクロード探検史
	十二日	(金)	飯田 東西交渉史
			是枝 敦煌―莫高窟を中心に―
	十六日	(火)	山口 日中関係史
			岡 敦煌―その思想的意味―
			広瀬 四つの近代化
	十九日	(金)	大家 シルクロードの自然風土
			渡辺 シルクロード周辺の民族
			片岡 中国の教育問題
	二十三日	(火)	香山 中国の内政
			原 中国の文学
			庄 日中プラント問題
	三十日	(火)	三宅 文化大革命
			関口 中国をとりまく国際環境
七月	三日	(金)	寺沢 中国の料理
	七日	(火)	佐藤(淳) 中国の農業事情
	九日	(金)	佐藤(佳) 中国人の生活

各自にテーマを与えて、自主的に研究させたので、中国に対する理解は、少しでも深まったものと思う。中国

について少しでも知っておく、という意味で、このゼミはそれなりの成果はあったと思う。しかし、合宿前の、忙しい中で、短期間にやってしまったので、その内容に浅く乏しいものになり、中途半端におわってしまったと思う。しかし、それにも増して感じたのは、我々の、日本に対する知識が、なんと乏しいことか、ということである。今後、海外合宿で同様の研究会は、必ず行なわれることと思う。その時は、なるべく早い時期から、その国に関する研究はもちろん、日本に対する知識を深めることも考慮しながら、研究会を行なうべきであろう。

行動記録

概念図


N
W
E
S
柳園
安西
敦煌
玉門関
陽関
南湖公社
鳴沙山
莫高窟
三危山
烽火台
疏勒河
57km
72km
57km
88km
双塔ダム
橋湾城
玉門鎮
76km
赤金
甘新公路
嘉峪関
30km
酒泉
70km
玉門市
疏勒河
祁連山脈
8km
70km

中国合宿日程概略

	月日	曜	行程	交通	Km	宿	備行
1	7月21日	火	成田10:15－上海13:50	飛		飯	市内見学
2	22	水	上海16:10－	列		列	市内見学。1等軟座
3	23	木	列車	列		列	
4	24	金	－蘭州着8:15	列		飯	五泉山，蘭州飯店泊
5	25	土	蘭州	車		飯	蘭州大学訪問
6	26	日	蘭州	車		飯	雁淮公社，白塔山
7	27	月	蘭州17:30－	列		列	午前中フリー
8	28	火	－酒泉12:30	列		学	バスケット，酒泉中泊
9	29	水	酒泉	車		学	備備，歓迎会
10	30	木	酒泉－嘉峪関	自	30	幕	
11	31	金	嘉峪関－玉門市	自	70	招	玉門石油管理局泊
12	8月 1日	土	玉門市	車		招	ゴビ庄農場・油田見学
13	2	日	玉門市－玉門鎮	自	76	幕	玉門鎮招待所脇幕営
14	3	月	玉門鎮－双塔ダム－安西	自・車	自88	招	洪水警報のため
15	4	火	安西			学	休養，共産学校泊
16	5	水	安西			学	神沢団長・土屋副隊長と合流
17	6	木	安西－烽火台	自	72	幕	
18	7	金	烽火台－敦煌	自	57	公	楊家橋人民公社泊

	月　日	曜	行　　程	交通	Km	宿	備　　行
19	8月　8日	土	敦　煌	自	10	公	鳴沙山
20	9	日	敦　煌	自	10	公	沙州故城，白馬塔
21	10	月	敦　煌 － 莫高窟	自	25	幕	莫高窟見学
22	11	火	莫　高　窟				〃
23	12	水	莫高窟 － 敦　煌	自	28	公	夕方　砂あらし
24	13	木	敦　煌 － 陽　関	自	70	幕	南湖人民公社 林場園泊
25	14	金	陽　関 － 南湖公社	自	8	幕	共産党委員会泊
26	15	土	南湖公社 － 敦　煌	自	70	公	座　談　会
27	16	日	敦　煌	車		公	梱包，敦煌賓館で宴会
28	17	月	敦　煌 － 柳　園 － 車　列	車・列		列	柳園 16：05 発
29	18	火	－ 蘭　州　17：17	列		飯	夜宴会，蘭州飯店
30	19	水	蘭州 17：10 － 上海 22：00	飛		飯	宝山賓館泊
31	20	木	上　海	車		飯	静安賓館
32	21	金	上海 13：50 － 成田 17：40	飛			上海動物園

（注）飛－飛行機　　列－列車・車中泊　　自－自転車

招－招待所　　学－学校　　公－人民公社

幕－天幕　　車－バス　　飯－ホテル

調査記録

佐藤佳一

一九八一年三月の春合宿中に、蘭州分社より正式な許可を認めた返事が到着し、そこで、「早急に打ち合わせのため蘭州分社に来て欲しい」ということであった。

春合宿後、新日本国際株式会社の渡部社長と、主将の佐藤佳一が四月十三日～二〇日に、さっそく手続きを済ませ、蘭州に赴くことになった。

一、調査に関して

一九八〇年の十一月、中国側から何も返事が来ないこと、情報・資料が乏しく現地の状況がわからないこと、障害となっている問題点が明確となり、交渉・対策が進め易いということから、早大長沢教授などの関係者の助言もあって、一九八一年の一月を目途に、十二日間の日程で調査計画を立案した。

しかし、十一月二一日、監督・コーチとの話し合いの結果、中国から何らかの返事が来てから考えても遅くない、時期尚早であるということでとりあえず中止した。

二、調査の準備

春合宿後、出発までの約二〇日間、毎日のように調査打ち合わせ事項をリストアップし、問題点を検討した。

先ず、送られてきた日程表を組み直し、それに伴う日毎の詳細にわたる事項、食料、自然、気象、医療、道路状況、通訳、案内人、自転車、連絡網などの計画内容にまつわる事項、そして最も重点を置いたのが資金の交渉であった。具体的な支出項目をあげ、予想額を想定しきりつめられるところはきりつめ、限度額を設定した。しかし資金が少なく、中国国内の移動を飛行機から汽車への変更や、自転車を中国製に切り替えるなど、節約のため苦慮し、三人で徹夜で考えた。

三、中国にて

責任の重さをずっしり肩に感じ、ともかくも出発。

四月十三日（月）　成田～上海

日航機にて八時十五分成田発、十二時五〇分上海着、上海旅游公司の方が2名迎えに来てくれる。小型マイクロで宿舎である和平飯店へ。午後、黄浦公園、上海友誼商店へ。夜、社長と打ち合わせ。

四月十四日（火）　上海～蘭州

上海十三時十五分発、中華民航で蘭州へ。途中西安に寄り十八時十五分蘭州着。蘭州分社の季さん2名が迎え

に来てくれる。一時間半程かかって、蘭州市内にある庁臥庄招待所へ。車窓から見る景色は荒涼とした起伏に富んだ台地が拡がり、はげ山の連続。まるで別世界であった。招待所では、去年ホテルニューオータニでお会いした谷氏、劉氏らが迎えてくれる。一年ぶりの再会を喜びあう。

四月十五日（水）　蘭州滞在

午前中、劉氏、楊氏、と渡辺社長に通訳をお願いして四者で会談、今日のところは、予め用意していった要望事項、質問きいて、分社の方でそれを検討してから、明日返答するということであった。

午後、五泉山散策。谷慶春氏の御子息で、蘭州分社に勤務しているという谷さんに案内してもらう。車の送り迎えを手配してくれたのは、李さんであった。みな親切にしてくれるので恐縮してしまう。

夜、シルクロードの花吹雪を観劇。敦煌を舞台としたものですばらしく、感激した。

しかし、日本で決めてきた限度額を提示した時の二人の困惑した顔が頭から離れず、なかなか寝つけない。

四月十六日（木）　蘭州滞在

午前中。再び四者で会談。劉氏は、昨夜一睡もせずに、資金等の問題を再検討していたという。提示額が、分社で計算していた半分以下のものだったのだから無理もない。学生でお金がない事、友好を目的としたものであるということを強調したが、特別な団体として扱い、計算しても、滞在費は一人一八〇〇元（約二四万円）が必要最低限度額であり、採算を度外度した額であるという。しかしこの額は、日本で決めてきた限度額を約五万円程も上回るものだったので話し合いは難航した。

どうお願いしても、これ以上下げられないということなので、判断に迷い、東京の監督に電話を入れ、指示を抑ぐことにする。やってみようということで、話は決まったが、毎度と電卓とにらめっこをし、気分は沈痛そのものであった。帰国して再び対策を練らねば。

午後、その他の打ち合わせを行う。

夜、谷慶春氏を交えて宴会。後から後から出てくる豪華な料理と、ノドが暑くなる程の白酒に目がくらむ。

四月十七日（金）　蘭州滞在

午前中会談。最終的な細部にわたる確認。協議書を交す、しかし、全体を通じ、食料、装備、医療など突っ込んだ話し合いになると、大丈夫、心配する必要はないと

いった調子で、のんびりと構えている。暢気なようにも思えるが、これも中国という広大な大陸に育まれた性格からであろうか。ちょっと不安になる。

午後、一人で蘭州市内めぐり。黄河、繁華街に行く。みなの視線が集まり、シャッターを押すのがためらわれる。夜、渡辺社長、劉氏と談話。

四月十八日（土）　蘭州滞在

一日中、大望の中国製の自転車に乗って市内めぐり、思ったより軽快で、これならいけると直感する。日本のいわゆる実用車で、サドルが高く、ちょっと重い。

四月十九日（日）　蘭州〜北京

朝早く招待所を出発。劉さん、楊さんが空港まで見送りに来てくれる。蘭州分社の人達は、我々が滞在中、家にも帰らず、親身になってやってくださった。夏に再びこの地を訪れることを誓い合って、北京へ出発。

十二時北京飯店着。ここが中国では最高のホテルだというだけあって、外国人がやたら目につく。

午後、市内をちょっとぶらつき、社長にOBの矢口さんのところに連絡してもらい、夜会う。ビールをご馳走になり、頑張るよう励まされる。

四月二〇日（月）　北京〜東京

朝食前に天安門広場まで散歩、朝の通勤時間とあって自転車の大洪水である。門をくぐり、故宮の中に足をのばす。日本とはスケールが違う。身じたくを整え、十四時二十五分発の日航便で成田へ。飛行機の中で、いろいろな問題点どうすべきか考える。一九時二八分成田着。ほっとする。私にとって貴重な体験であった。

以上が調査のおおまかな日程である。この旅では、渡辺社長にお礼の言葉も見つからない程お世話になり、心から感謝いたします。ありがとうございました。

以下に話し合いの結果合意した協議書の内容を示す。

協　議　書

早稲田大学自転車遠征隊代表佐藤佳一、および新日本国際株式会社渡辺社長は、中国国際旅行社蘭州分社代表楊達山、劉大庸と早稲田大学自転車遠征隊（四－SLT－26）の甘粛省内の実施に関し、一九八一年四月十四日より一九日まで関係各方面と協議し、以下の協定に達した。

一、協議のうえ、早稲田大学自転車遠征隊二十五名が一九八一年七月二十一日上海入境、八月二十三日上海出境の日程で蘭州、酒泉、敦煌間の開放地域で自転車旅行を実施することで同意に達した。

二、遠征隊は中国滞在中、上海入出境時および宿舎に居住する以外、蘭州、酒泉、敦煌において指定された地点でテントに宿泊し、自炊する。中国国際旅行社蘭州分社は、自転車隊のために主食糧、飲料、副食、燃料を準備し、あわせて二名の随行員、二名の医師、トラック二台、十二人乗りのマイクロバス一台を提供する。

三、中国国際旅行社蘭州分社は、早稲田大学自転車遠征隊に対し、経済等級の旅行費用を適用する。

早稲田大学自転車遠征隊は汽車移動の際、硬席寝台車を利用することに同意する。

四、日中両国青年の友好、理解促進のため、早稲田大学自転車遠征隊が蘭州滞在中は蘭州大学学生五～八名を、また酒泉、敦煌地区においては酒泉師範学校学生五名を派遣して同行させる。

また、その他の個所においても中国国際旅行社蘭州分社が文芸、娯楽、体育活動交流の場を設けるよう努力する。

早稲田大学自転車遠征隊は、中国側同行者一〇名に対する旅行装備を用意する。

五、早稲田大学自転車遠征隊の中国滞在中、中国側の連絡所を設ける。新日本国際株式会社と中国国際旅行社蘭州分社の連絡を密にし、あわせて下記の三箇所を連絡ポイントとする。

蘭州―中国国際旅行社蘭州分社
蘭州市南昌路六五号
電話　二六一三七
電報番号　三六〇二

酒泉―中国国際旅行社酒泉支社
酒泉地区招待所内
電話　二九四三、二五六〇

敦煌―中国国際旅行社敦煌支社
敦煌賓館内
電話　敦煌県電話局より回線連絡

六、早稲田大学自転車遠征隊が遠征中隊員に急病、不慮の事故が発生した際は、中国国際旅行社蘭州分社及びその関係接待機関が急救措置をとる。また必要に応じて新日本国際株式会社と連絡をとり対処する。

この際の費用は日本側の負担とする。中国側の同行社に病気、事故が発生した際は、その費用は中国側の負担とする。

七、包括料金、決済方法及び査証について

早稲田大学自転車遠征隊（一行二十五名、中国内旅行日数三十四日）の包括料金は、計四五〇〇〇元（一名当り一八〇〇元）とする。この金額は中国側の今回限りの

価格である。新日本国際株式会社経由で、六月十五日以前に中国国際旅行社蘭州分社に送金すること。

旅行完了後は再決算しない。

査証取得など旅行手続きは新日本国際株式会社、および中国国際旅行社蘭州分社において行う。

一九八一年　四月十九日

第二自己

三年　片岡　正光

「第二自己」　中国には、はっきりとこんな単語が存在する。他人を第一に考え、自分を第二に考える他人を思いやるという意味である。敦煌楊家橋人民公社で、甘粛画報社の高冠威記者と蘭州分社の李氏との会話の中で、出てきた言葉である。私はこの言葉がいつ発生したのかは知らない。共産党が命令的作ったのかは知らないけれどすばらしい言葉だと思う。特に日本の都会では失なわれかけている思いやりは、中国全土に今はっきりとした単語の形で存在している。農場へ行っても招待所へ行ってもこの第二自己からおこる行為に幾度か出くわした。

第二自己が上からのやらせでなく、中国の人々の心底から自然におこってきたものであると私は確信している。嘉峪関址でのフリーの時私は一人で嘉峪関市の方へ向かい嘉峪関址への道へはどれが近いかと考えている時、私が道に迷ったと思ったのか、ある農耕青年は、私をわざわざ嘉峪関址まで送ってくれた。何もよけいに語らずに。私は彼を共産党員と思わない。

行動記録

佐藤　佳一・佐藤　淳

七月二十一日　晴　東京→上海　上海達華賓館泊

出発前夜、全員早稲田界隈に分宿し、二十一日五時半早稲田駅に集合する。ここで関先生、木の内OBの激励を受け、勇躍、合宿が動き出す。箱崎でのチェックイン、空港での諸手続きなど、庄を中心にトラブルなく済ませ、JAL七九五便で出発。手島OB会長をはじめとする多数の方々、関係者の皆様の言葉が、否応なく合宿への期待と不安と責任を高まらせる。見送って下さった方々に感謝しつつ、飛行機の中から生まれ育った山河にしばしの別れを告げる。長崎を経由して、飛行機は雲の上、東シナ海（中国では東海という）を越えて上海へ向った。遥か眼下の青い海に、白い航跡を残してゆく船が、どこの国のものかわからなくなった頃、突然雲間に見える青い海が、黄土色に濁った境をもち、緑色の中国大地が見えた。部員の誰かが、「大陸だ！」と叫んだ。十三時三十五分に上海に着いた。タラップを降りると、ムッとしてむし暑い。上海までわざわざ蘭州分社の劉大庸さんと、谷杰さん、女性通訳の慎麗華さんが出迎に来てく

はじめまして
初次見面

二年　広瀬　明彦

夜になって、上海の街をぶらついたあと、ホテルの前で中国人に話しかけてみる。ちょっとこわい。声が上ずる。だが相手は実に好意的に耳を傾けてくれる。こっちはほんの数語、カタコトの中国語しかできない。汗だくになり、声を張り上げ、必死になって話しかける。相手も何とかして理解しようと懸命だ。口だけにはまかせられない。はやる心でノートを取り出しペンを走らせる。すると突然、相手はニッコリほほえみ、手を指し出してくる。「やった！通じたんだな」そう思うと、どうしようもなく嬉しくなってくる。ガッチリ握手を交し、その後も会話に励む。はじめの二、三人がたちまち十数人となり、囲りをビッチリ中国人に取りまかれる。いつしか、日本人も僕一人になり、聖徳太子も顔まけの会話を懸命に続ける。そろそろ門限だ。「請休息！」と言って逃げてくる。懐しい中国最初の夜である。

ださり、他に上海分社の鄭光明さん、陳彩霞さんらが来て下さる。再会を喜び、佳一と劉さん、谷さんが劇的に握手しているが、部員一同、あっけにとられて何が起ったのかよく理解できない様子。チャーターして頂いた日本製の大型観光バスに乗り込み、まず上海市内のホテルに向う。人口一一〇〇万人を越えた上海は今や世界一のマンモス都市。郊外の人民公社を通り抜け市街地へ入る。道の両側のポプラ並木がいかにもそれらしく、部員たちは、はじめての中国に目移りしているようだ。道の名は全て、中国各地の地名で呼ばれているらしい。虹橋路を東にとり、ロータリーから安西路を通って宿舎に近づく。圧倒的な数の人々は、白地のシャツと黒っぽいズボン、サンダルという姿が一般的。華洋折衷のしゃれた建物、白壁の目につく旧租界の古いビルなどは労働者のアパートになっているものが多く、洗濯物が風にゆれている。トロリーバスはゾロゾロ歩いている人と自転車を避けるように激しく動き回り、人々もどこか車をバカにしている様に、ゆうゆうと歩いている。ホテルに着くまで二度三度、自転車が人とぶつかって口論しているのを見る。

横光利一の「上海」の面影はなかった。清新と、喧噪と、おおらかさ、これが中国での第一印象だ。

達華賓館に着き、部屋割をし、上海のメインストリート南京路に沿った上海展覧館に行き、そこで各自一万円づつ換金させる。それから玉仏寺という、ビルマから運んだ玉造の仏像が安置してある寺院を見学。

夕食はホテルで。上海のホテルの味つけは日本人向の様だ。夕食後二〇時半までフリーとする。各自町に出ていろいろに体験をしたらしい。初日から頼もしい。スイカの旬で、食券でそれを買うためにところどころで人が並んでいる。夕方でもむし暑い。路地や歩道で本を読んだり、編物をしたり、街灯の下でトランプをしたりしながら涼んでいる人。外国人に対して絶大な興味を示す。日本人同志、ドラッグストアで一諸になっても一言も話さない。変に意識する。まだまだ国際感覚が正常でないらしい。例え、経済力で多くの人が海外に出るとは言っても。ミーティングで、部員をまず引きしめる。

二十一時半から二十二時半まで上層部ミーティング。短縮しなければならない日程の問題を話し合う。二十四時まで主将佳一は劉さんと話し合う。ワンゲルの自主性と中国の国情と。コミュニケーション不足はまだまだ多い。二十三時部員就寝。

七月二十二日　晴　風強く暑い　上海→列車泊

茶をば一服

岡　聡

中国人の荷物を見ると、必らず入っているものが一つある。大型のカップ。中国は、水が硬質なために、必らず一度沸かしてから飲むが、汽車に乗っての長旅の場合など、湯が配給されるので、それをもらうために、カップが必要なのだ。湯は大底茶にして飲む。彼らは、各自茶袋を持ち、その茶をそのままコップに入れる。葉は2センチ程の大きさに復元し、カップの底に沈む。上澄液を飲むから、日本のように、急須などは必要としない。彼らは、じつによく茶を飲む。つまりは茶が、水のかわりをしているためであるが、この中国茶が体の脂を落とす、と言って土産に買って帰る者が割といたようだ。そう言えば、中国人は皆、スマートで、肥満体質の者など皆無であった。眉唾ものと思っていたが、脂を落とすというこの話、意外と本当かもしれぬ。肥満にお悩みの方は、この中国茶、一度試してみるのも良かろうかと思う。

七時起床。朝食前に散歩を許可する。八時朝食。ホテルの部屋でひげを剃っていると、ゴルゴサーティーンを思い出す。通勤時。道路は職場へ向う自転車と人であふれ、その中をホーンを鳴して車がすりぬける。広場で太極拳に興ずる老人の姿もある。

九時豫園着。楼閣。築山、池などを巧みに配した四百年の歴史を誇る奇異な庭園。白壁と黒々とした竜塀が青空に映え見事である。中国国内の観光客が思い思いのポーズでカメラに収っている。十時四〇分、長江の支流、黄浦江沿いにあるガーデンブリッジと黄浦公園へ。平和な時代の日本に生まれた部員達は何の感概もなく橋を渡ってゆく。のんびりと東海からの風に吹かれて、公園の中を歩く。太極拳をする人、大道芸でハミガキ粉を売っている中国版寅さん。ジャンクの帆をもぎ取った様な舟が何艘も続いて江を下っていった。江の向こう側にはサンヨーの看板がある。昼になりかなり暑い。昼食は紅雲楼という食堂でとる。南京通りをブラついてからバスで、魯迅故居と虹口公園にある魯迅墓へ向う。だだっ広い公園のあちこちに置かれたベンチではアベックが何やら楽しそう。ふと残してきたアノコを思い出す。頭の半分では、魯迅の偉大さをかみしめている。朝方、荷物をまとめてバスに積んであったのでそのまま上海駅に向う

驚いたことに、バスは列車がすでに入線しているプラットホームにまで乗り込んだ。この列車こそ、我々が中国の鉄道時刻表の中から徹夜して捜し出した上海発十六時八分ウルムチ行直通急行である。二等のはずがなぜか一等コンパートメントに変更となる。ここで上海ともグッドバイ。旅行社のお二人にはお世話になりなんだか離れ難い。中国に来てからはじめての〃再見〃。

夜、上層部ミーティング。昨日にひき続き日程の事。帰りをフライトにするか、それとも日程をつめて列車にするのか。これ以上の負担はどうかと考え、日程をつめようかと考えたが、やはり、隊の行動を第一にし、余裕を持たせ、フライトとすることにした。長い列車の旅が始まる。

七月二十三日　晴　終日列車　列車泊

今日は二十四時間列車の旅。七時起床。朝食は車内食堂でとる。うどんともラーメンともつかない油こいめん類。コンパートメントの中はベットが二段づつ、水が飲めないので服務員がお湯をサービスしてくれる。トイレの隣に暖房用のカマがあって石炭を燃やしている。お湯もこのカマで沸かす。二等車は硬臥車といって室別に仕切られてなく、日本の一般的なB寝台とそれほど差はない。いろんなニオイがする。すっぱいような甘いような、ビータン、りんご、汗、肉、お茶、麦のニオイ。田舎に帰る人々が、かかえきれないほどの荷物を積み込んでいる。買い出し列車のよう。食堂に行くためにこの二等車両を三つばかり通り抜けるのだが、はじめのうちは、中国人の目が気になって仕様がなかった。

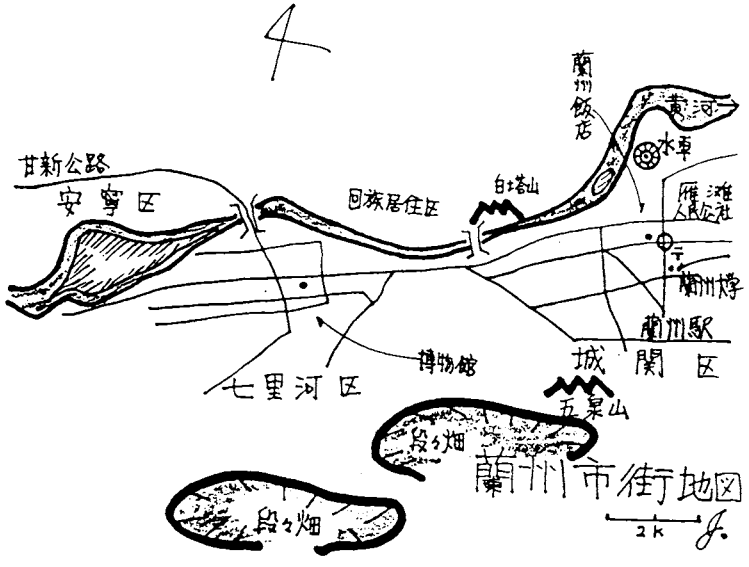
中国側、劉さんと、中国に来て何度目かの話し合いをする。日程、装備、食料、など細目にわたる確認をする。セーターを持っていると言ったら、大笑いされた。しかし、後日、このウール行動着が役立つことになる。毎日、しつこく劉さんと話しているうちに、徐々にお互いのことが解ってくる。それからはもう、他の中国人とも急速に接近した。十六時から、蘭州からの行動について上層部ミーティング。その間でも窓のすきまから容赦なく、砂まじりの風が入る。暑い。十五時の車内の気温は三十七度。体がだるくて、疲れ易い。

唐の都、長安、今の西安あたりでは、彼方で風選されて宙に舞う小麦が黄麦色にあたりを染めている。田園を夕ぐれが脚色する。二〇時、日没。陽に向って列車は西へ。二十二時半就寝。

七月二十四日　曇後小雨一時晴　蘭州着　蘭州飯店泊

六時二〇分起床。蘭州分社経理の息子さんである通訳の谷さんの話では、夜中の二十四時に甘粛省に入ったという。夜中、暗い外ばかりながめていたので何かと聞いてみたら、狼を捜していたらしい。夜でも目が光る、という。八時十七分蘭州着、ガンガン荷物をホームに降ろす。蘭州分社の庸さん、李さん、それに蘭州大学の五人の学生、王さん、胡さん、杜さん、劉さん、林さんが出迎えに来てくれる。特有の笑顔で迎えてくれる。日本語の特訓をしたそうで、ボツボツと話しかけてくれる。蘭州に着いた途端に、女性通訳の慎さんと別れることになる。我々のアイドル的存在になりかけていただけに実に惜しい。風邪で具合が悪そうであったが、赤いホッペタは常に笑顔だった。

蘭州では、蘭州大学に幕営する予定であったが、期末試験中のため、蘭州飯店に変更となる。部屋割をし、荷物を置いてから五泉山へ向う。蘭州の南にある山で、斜面には公園が広がり、頂上からは黄砂に煙る蘭州市街、北には大きくくねる黄河が望まれる。小雨まじりの風の中、小一時間程で登る。標高は千六〇〇m、木はほとんど無く、表面の土はパウダーのように細かくやわらかだ。風も強く、ほこりが舞うせいか皆ノドが痛いと訴える。山腹の接待所で茶をふるまわれて一服してから、蘭州



ちょっとくさいお話し

2年　寺沢秀記

話しには聞いていたが、あれほどのものとは思ってもみなかった。勿論トイレのことである。

な、なんと戸がない。戸があったとしても錠がかからないではないか。おまけに個々の仕切りが、腰ほどの高さしかないのである。誰がトイレに入っているかなどは、ひと目でわかってしまう。

「どうも今日は、体調が悪いようだけど。」

などと、その場で報告も出来る訳だ。

日本には、このトイレ・コミュニケィションというものは、まったく存在していない。人間が、最も理性的になれる場の意志疎通を欠いていることは、人類学、社会学的にも、大きな損害である。

―トイレが人間を創造する―

こんな言葉は聞いたことはないが、中国人の寛容力のある性格は、まさにこの言葉を象徴しているのではなかろうか。トイレ人類学の幕あけといったところである。

飯店へ戻る。昼食の後、甘粛省博物館で古土器などを見てから、蘭州の繁華街で自由行動とする。切手を買うために郵便局へ入るが多勢の人が集ってきて、上海よりもたいへんな騒ぎとなる。五、六人から同時にものを言われて、もう訳がわからず。新人連中は、食堂に入って、パンを買おうとするも、糧票がなければダメダといわれたそうだ。

宿舎に帰って今夜もまた中国側と打ち合わせ。蘭州でも、できるだけ部員の自主性を大事にしたいという我々。

なるべく数多くの場所を訪問させたいとする劉さん。ようようその接点を見い出し、それから帰途のフライトの件を依頼する。予想以上に、アレンジの機会が多く、みやげの質量も再考せざるを得なくなる。リーダーの失敗で大変勝手とは思いながらも、後発の土屋OBに追加のみやげを御願いすることにする。

二〇時より全員で京劇を見る。場内熱気ムンムン。ドラがジャンジャン。食いいるようにみる。セリフはわからないが、俳優の動作がすばらしい。中国では、テレビの普及率が低いため、映画や、京劇、雑技団のスターが国家的アイドルである。中には官僚並みの暮しをしている人もあると聞くが、それほど彼等の芸は素晴しい。淳は途中抜け出し、一足早く宿舎に戻り、みやげの追加の

依頼もしなければならないので予定より一日早く、在日本部の手島さんに連絡をとる。夜遅いためか、十五分程で東京とつながる。言葉をくぎり、大声で細かい要件を御願いする。すぐに手島さんに了解していただいたのでホッとする。そのうち皆も帰ってくる。二十四時就寝。

七月二十五日　晴　蘭州　蘭州飯店泊

終日、蘭州大学にて、学生達と交流する。午前、午後、夜の都合三回訪れる。大学は市の大通りの一つ天水路の中程にあり、西域第一の大学であるので、西域各地の少数民族の学生も多く学んでいる。蘭州は近年、背後に玉門油田等の原料供給地を配し、一大工業都市に変身した。人口も二〇〇万人とふくれあがり、まさに甘粛省都にふさわしい風格を備えている。のみならず、敦煌莫高窟をはじめとする貴重な遺跡を研究している大学の存在は、文化的にも蘭州の名を世に広めている。

午前中の大学での交換会、対面式ではまず、副学長の先生から歓迎のごあいさつを受けた。続いて青木隊長が、清水総長のメッセージを読み上げ、あいさつを行う。その後、先の蘭大生五人を含め、他の学生も一諸に、キャンパスの中を案内してもらう。静かだし、広くて、緑も豊富な快適な学園である。午後は、一室で学生達と座談会をもつ。日本語、中国語、英語を駆使してコミュニケートする。彼等の勉強熱心には感心するばかり。何せ、大学入学の動機から我々とは異っている。自分が情けなくなりつつあった時、ようやく終了の時が来た。それでもこの試練に耐えたせいか、全員蘭大名誉学生のバッヂをいただく。――彼等も下放されていたと言う。

夕食が終って十九時半よりミーティング。日程がつまり、慣れない生活のためか、体の不調を訴えるものが出る。ノドの痛みを訴える者、それに二年香山、新人飯田、三宅の三人が熱を出す。実行動の前に中国での環境順応を兼ねて蘭州で日程をとったのにこれでは先が思いやられる。各自の健康管理に責任を持つよう活を入れる。三人と医療係の原を残して、大学での夜の歓迎会へ出かける。漢詩の朗読、民歌、笛、バイオリンの演奏、八木節まで飛び出す。学生達の芸はプロ並のうまさ。我々の方も我愛北京天安門、安曇節、校歌を唱い、喜ばれる。モンゴル族の女性の踊りが清礎で皆の人気を集める。ベナントを交換し、清水総長のメッセージを読み上げ、再見を約して、遅くまで続いた会もおひらきとなる。感謝の気持ちと、名残り惜しさでいっぱい。会うは別れのはじめである。後日、日本語の本を送ろうと思う。帰り着くと、三人の熱も下っていた。すぐに就寝とする。興奮

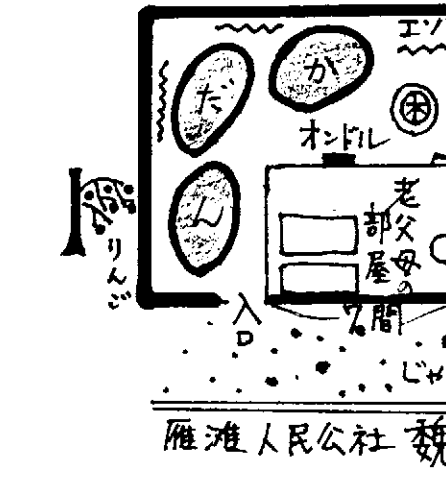
さめ止らずなかなか眠れない。

七月二十六日　晴　黄砂で薄く曇る　蘭州　宿舎同じ

六時半起床。朝から暑い。地元の人でも今日は暑すぎると言う程。日射も強い。太陽の奴がだんだん本領を発揮してきやがる。午前中、蘭大生五人と伴に郊外の雁滩人民公社へ往く。公社の人の家の中までお邪魔する。一軒目のお宅は魏さんといい、オンドルのあるこじんまりとした家で、先日の長女の結婚式では豪華に三百元も使ったそうである。三女と老父が案内してくれた。おだやかな農村である。犬鶏こだます。二軒目の王さんのお宅には日立のテレビまである。それでもまだまだ田園の豊かさはかわらない。この公社は果樹と野菜が中心で一万六千人の人が住んでいる。黄河の水を上手に引きあげ、苦労して耕作している。講堂で公社代表の馬さんの話をきく。外にいんげんが干してある。日本のものの倍程の大きさ。清々しい気分で辞去する。

市内に戻り、銀行で庄に、帰りのフライトのお金のために換金させる。上海では一元百三〇円だったのがレートが上って百三十五円となっている。一万五千円の損をした。

午後、黄河を渡り市の北部にある白塔山に登る。山腹



大親切

栗原勝義

蘭州で僕は仲間と本場のギョウザ屋に入りました味は思った程ではなかったのですが、ラー油の辛さにはまいりました。余りヒリヒリするので勘定を払った後、お願いして水を一杯もらったのですが、なにか様子が変です。店の娘さんたちがポケットの僕のサイフを指さして中国語で何か言おうとします。水代を取るのかな、そんなばかなとドギマギしていましたが、やがて一人が僕の腕の小物入れをつつくのでハットしました。驚いたことにポケットのサイフがはみでていてなくし易いから小物入れにしまっておきなさいというのです。僕は大いに感激して店を出ましたが心の広さということを考えさせられたでき事でした。

に古い伽藍を配した白塔寺のある山である。ふもとには少数民族の回族の居住地をしたがえている。往復一時間程だが、とにかく暑い。黄河沿いの公園には写真屋、ジュース、菓子を売る店が客を待ち、市民が木蔭で中国将棋、的あてに興じている。

上海よりもしつこい味つけの夕食をとり、十九時十五分より全体ミーティング。二十一時から劉さんらとミーティング。自由に外食をしたいと希望するが、外国人でもあり、食糧票も手に入らぬため困難らしい。実際には、糧票がなくとも外国人に売る店もあるのだが。やはり本番前でもあり、衛生状態をも考え、宿舎の食事をとることにする。就寝は二十二時としたが今日も今日とて、リーダーは話し合いが長びき二十三時前には休めない。熱心に話してくれる劉さん等にもすまなく思う。夜、新人、二年の九人が大学の寮に遊びに行ったという。人柄がよく表われたそうだ。しゃちほこばっていては、交流になりにくい。

七月二十七日　晴のち曇　蘭州→列車泊

六時半起床。蘭州とも離れて、ようやく河西回廊へ入る日。朝食前、なまった体をほぐすため宿舎の前ではでに体操をする。まさか体操が珍しい訳ではあるまいが、

見物が囲む。九時まで全員移動の準備、パッキング。終って昼食までフリーとする。新人は貧欲に町中を回ってくる。山口など床屋に行った者もある。この時間上級生でOBへのハガキの仕上げをする。昼食では、いよいよ本番が近づいているせいか、皆ガッガッ食いながら、午前中の出来事を話している。食事の時間が一番たのもしい。午後も十六時までフリー。すいか〇・七八元（百円ぐらい）ジュース一本〇・二元（三〇円ぐらい）町に出て日射にあたると、すぐに水分が欲しくなるので道端の小母さんから買う。人民元でなく、兌換券を渡すと、ものすごく喜ぶ。そちらの方が価値があるのだろうか。駅に向う前に我々の宿舎を分社の社長の谷慶春氏が訪れ、励してくれる。あたたかな人だ。駅まで蘭大の五人も見送りに来てくれる。知り会って四日だが旧知のように親しみを覚えていたので皆別れ難いようだ。〃再見〃と言い合って硬座（二等）寝台に乗り込む。またあのニオイ。OBの自転車も蘭州で受け取っていたので車内で荷物を整理するのに一苦労。動き出した列車の窓から乗り出していつまでも手をふる。蘭州のみなさんありがとう。

列車の中では各自相席の中国人と盛んに話している。二等の良さはここにある。普通外国人は全て軟座（一等）に回される。我々にはやっぱりここが似合っている。ほとんどの中国人は里帰りの人らしい。同乗の我々ともまた、同じ中国人同志でも乗客はすぐに仲良くなるらしい。乗ってまもなく片岡がサーブされたお湯でヤケド。三宅の熱もまだ三十七度四分ある。本番前にして余計な心配事は気をしめて排除しなければならない。

七月二十八日　晴　列車→酒泉　酒泉中学校泊

七時起床。朝六時から始まる音楽放送には驚く。DJつき。国鉄とは大違い。民歌からクラシック、シャレタテンポの洋曲まで。おかげですごく目覚めがいい。外の風景は西安あたりとはうってかわり、緑はまるでない。羊やラクダの群れがいたる所に見える。黄土色のゴビタンの世界。左には六〇〇〇mの万年雪をかぶった祁連山脈。

十二時三〇分酒泉駅着。駅頭まで酒泉支社の科長の張思平さん通訳の余さんが出迎えてくれる。駅から市街まで十Km程あるのでバスに乗り込む。このあたりの手配は、観光旅行だろうと何だろうと中国では完璧で、まず安心であるが、あまりの手配の良さについ皆甘えてしまう時がある。うまく下級生を動して合宿を進めなければと、水の少ない畑を左右にみながら走るバスの中でふと考える。バスの後の窓には「日中両国民は子々孫々まで仲

よくしよう」の張り紙。酒泉支社着。地区の責任者柳さん、支社の副経理の秦さん、酒泉中学校長の劉さん。など関係者が出席され、歓迎会が開かれる。合宿のためにかなりの人数が動員されたことを知り恐縮する。引き続いて宴会が開かれる。アルコール六〇度という老白酒はせき込む程強い。さらにいつもの食事に輪をかけて次から次へと料理がでてくる。すいかの皮に〃友好〃と彫ってある。

今日の宿となる酒泉中学に戻り、OBの自転車を組み立てる。それから現役の使う自転車を一台持ってきてもらい広瀬にカゴをつけさせ、背の一番低い庄に乗らせてみる。なんとか行けそうだと確信する。

二〇時半からバスケット友好試合。町の人がどんどん競技場に集まり、観衆数千。我を忘れて皆興奮する。熱狂的な声援の下、飯田、原、寺沢、淳、佳一の五人は大巨人揃いの酒泉チームに立ちむかうが、百点ゲームで敗退。なにせ動きが見えないのだ。敗北感に打ちひしがれながらシャワーを浴びる。酒も入っているので選手はすごく疲れている。ゴノロウサン。

明日の予定の打ち合わせをする。早く出発準備を終らせたいので中国側に（張さん）午前、午後の参観をカットし、準備と休養に専念したいと申し入れる。可以と、責任者の張さんが受け入れてくれるが、中国側の予定していた事も変更になって大変だろう。しかし我々は自転車行動がメインである。スケジュールで体が疲れていてばかりでは仕様がない。何れにしてもこれからますます考え方の調整がむずかしくなるであろう。二十三時就寝。

七月二十九日　晴　酒泉　酒泉中学講堂泊

七時起床。午前中に酒泉公園、博物館、夜光　工場参観等アレンジされていたが、キャンセルして愛車フライングビジョンの整備をする。彼女は中国での大事な友人の一人である。故に皆の整備にかける熱意は推して知るべし。

張さんの話では、中国のメンバーは十七名で内訳は、旅行社の張さん、劉さん、李さん、余さん、谷さんの五人、酒泉中学の先生の張さん、李　さん、張さん、李さん、それに体育委員会の張さんの五人、医師の高さん、看護夫の田さん、ドライバーの周さんと李さん、コックの常さんと李さん、甘粛画報カメラマンの高さん、以上である。大学生と一緒に走れず残念であるが、旅行社と中学校の先生の方々十人が自転車に乗るという。

朝から上層部ミーティング、中日合同ミーティング、

部員ミーティングと話し合いを重ねる。人数が多いので行動は三分隊とすること、食当は中日合同ですること、中国人の自転車にも団配を積んでもらうこと（実際には三Kg程）ワンゲル活動に近い型で合宿を進めていくこと等を確認し合う。

十六時、招待所にて中国側の現地事情説明を受ける。いろんな方々、特にこの酒泉地区の多くの方々の陰の協力によってこの合宿が準備されたことを感じ、新たな責任を痛感する。昼食に次いで、二度目の自炊によって作られた夕食を食べた後、二〇時から酒泉公園でのレセプションに招かれる。これまた一万人の歓衆。陽が長いので未だ明るい空だが、あまりの数の人が動めいているので、中空に砂ぼこりが舞いたつ程。信じられず。昨日以上の人出に、何が始まるのかと他人事の様に皆自失している。雑技団の芸は流石に素晴しい。我々は一つ覚えの我愛北京天安門や校歌などを力一杯唱う。へたなりに頑張ったので、一万人の拍手が沸いた。期待には答えなければならないと、つくづく思う。中学校に帰り、二十二時十分就寝。いよいよ、二年ごしで待った明日という日を迎える。夕方、在日本部に電報を打つ。

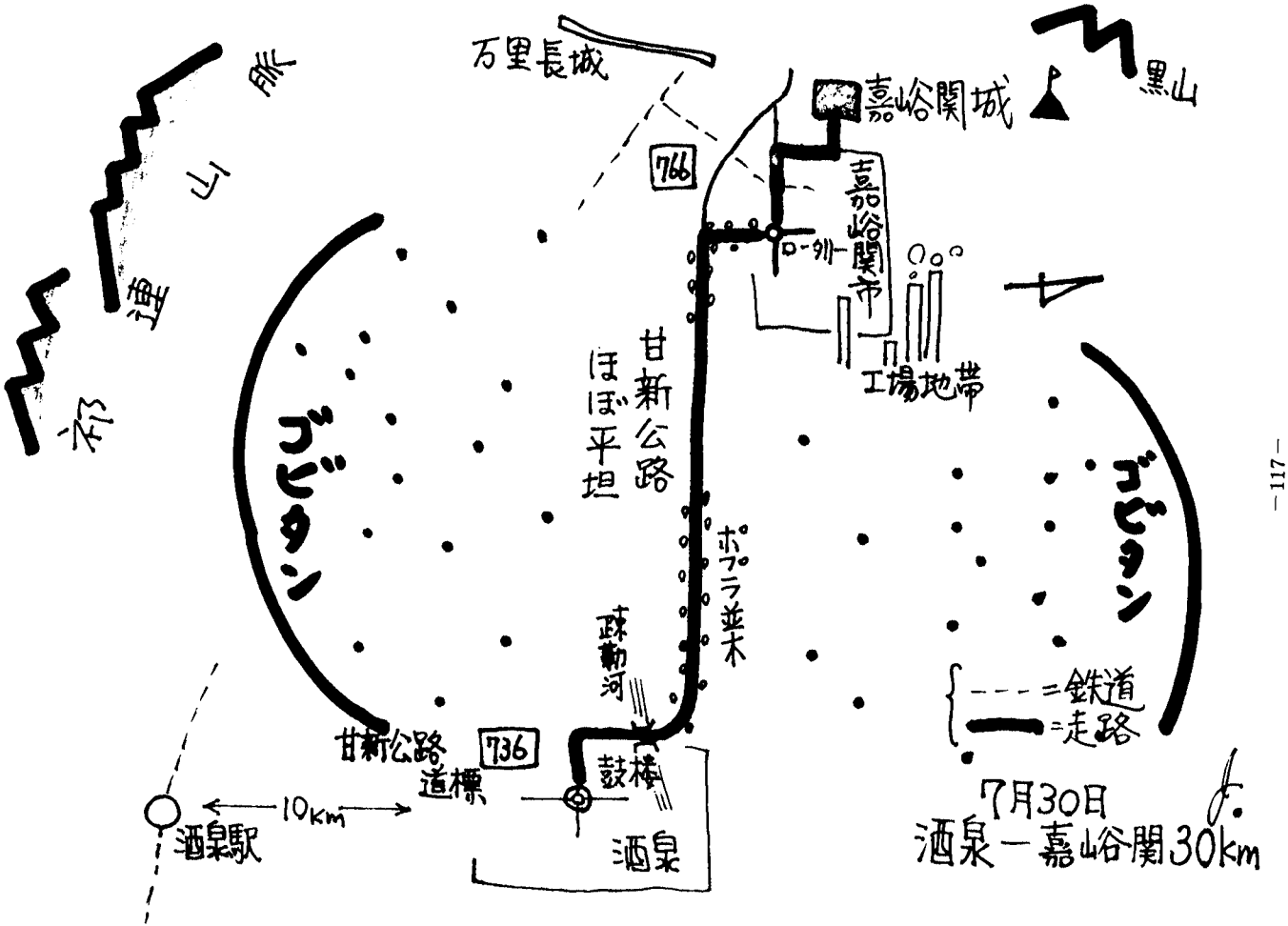
七月三〇日　曇後雨　酒泉→嘉　関域内幕営峪三〇Km

華中から西へ向かうには、どのコースを採っても荒涼とした険悪な道を辿らねばならない。その中で一番条件の良いのがこの黄河の西の河西回廊である。ゴビタンの南に沿い、南に祁連山脈を控え、その氷雪の山々から流れ出る水のおかげで点々とオアシスが出きている。河西四郡中第三のオアシスがこの酒泉である。日干しレンガの住居でうまった碁盤目の町で、センターサークルには三重層の鼓楼が趣を添えている。

六時起床。あわただしく出発準備。朝食は、始めて日中合同で食べる。中国人は食べ終えた先から席を立ってしまう。なんとか皆で一斉に「ごちそうさま」「吃好了」といきたいものだ。この＝習慣＝のギャップ。

A隊は新人・食い気の栗原。でっぷりとした三宅、ひげ面の人見知り渡辺、二年・装備係の要、体力の岡、三年、経密な計算が定評のある庄、四年・まとめ役の主務佐藤淳、加えてワンゲルの頭脳川相OBの以上七人。旅行社の張さん、体育委員会の張さん、通訳の余さんが一諸。

B隊は新人・小回りのきく飯田、返事だけの大家、二年・ロマンのカメラ男香山、食糧管理庁の寺沢、四年・ワンゲルの活性剤、関口勝正、そしてワンゲルの普賢と文珠といわれる芥川、正田の両OBが加わり、隊を後か


祁連山脈
万里長城
766
嘉峪関城
黒山
嘉峪関市
ロータリー
工場地帯
甘新公路
ほぼ平坦
ゴビタン
ゴビタン
ポプラ並木
疎勒河
鉄道
走路
甘新公路
道標
736
鼓楼
酒泉
10km
酒泉駅
7月30日
酒泉ー嘉峪関30km

ら見て頂く。そして、旅行社の李さん（老李と呼ばれる）、谷さん（小谷と呼ばれる）、巨人の中畑に似ている射撃の先生、張さんが同行する。

C隊は、新人・寡黙でガンバリ屋の山口、建設界の卵是枝、二年・自転車整備に命をかける長身の広瀬、熱血看護夫、原、三年・三〇日間で飛躍がまたれる片岡、そして四年・誰が何と言おうと佐藤佳一、最後に、今なおミスターワンゲル青木隊長。ここには蘭州の鉄人、劉さん、化学の先生の龔さん、あたたかみのある体育教師の李さん、サングラスの似合う物理の先生、李さんが加わる。鼓楼前で記念写真をとってから、いよいよ行動開始。八時四〇分、三隊は五分おきに酒泉鼓楼を出発。七三六の距離表が起点となる。市民が見守る中、西へ町を抜けると、濁流の疎勒河に出る。河を渡れば、お世話になった酒泉ともお別れ。昨日、中学生の女の子等は、食当まで手伝ってくれた。皆様行って参ります。ゴビタンの真ん中に作られた西へ一直線に延びるポプラ並木の道を行く。アゲインストがきつくて、ペダルが鉛のようだ。先行の二隊はポプラ並木で一本とる。九時半。C隊は、二年広瀬が、下痢だの鼻血だのでモタモタしている。走っていてもほこりと、乾燥で、ノドがガラガラする。とにかく風が強くて一向に進まない。先行二隊は、十時半嘉峪関市手前の人民公社あたりで二本目。多勢人が集まり、「どこから来た」と聞くので「リーベン」（日本）と答えると白い歯を見せニヤッと笑う陽焼けした人々。三本目十一時二〇分、嘉峪関市をぬけ、鉄道が下を通るじゃり道の陸橋を上ると右手の高台に、嘉峪関が姿を見せる。城内へ上る坂道を必死で上り、自転車に乗ったまま城内へ。ここが万里の長城最西端である。天幕を設営してから、文物研究所長の高さんのお話を伺う。考えてみると、国宝級遺物である嘉峪関城内の中に寝泊りするということは、日本で言えば桂離宮の庭でキャンプするようなものだ。中国人の寛大さに感謝。望楼からは遠くから続く長城と、嘉峪関市、西方遙かに広がるゴビタンが見える。六百年の歴史の中に黒ツバメが巣を作っている。

夕食後、十九時半から、全体ミーティングで問題点を話し合う。一つは食当の新人が思うように食当に加われないこと。料理人は国家の命で仕事をしに来ているのだから止むを得ない面もあるが、これでは正常な合宿とは言えない。他に中国側との行動形態の統一のこと。隊列を無視してバラバラに走る人がいることだ。問題の解決はリーダー層の指導力にかかっていると自覚するが、ワンダーフォーゲルを飽くまで中国側に浸透させるのは簡

単なことではない。ゆずれない一線は断固主張していくことにする。二十一時、ここでこうして幕営できる幸福に浸りながら就寝。

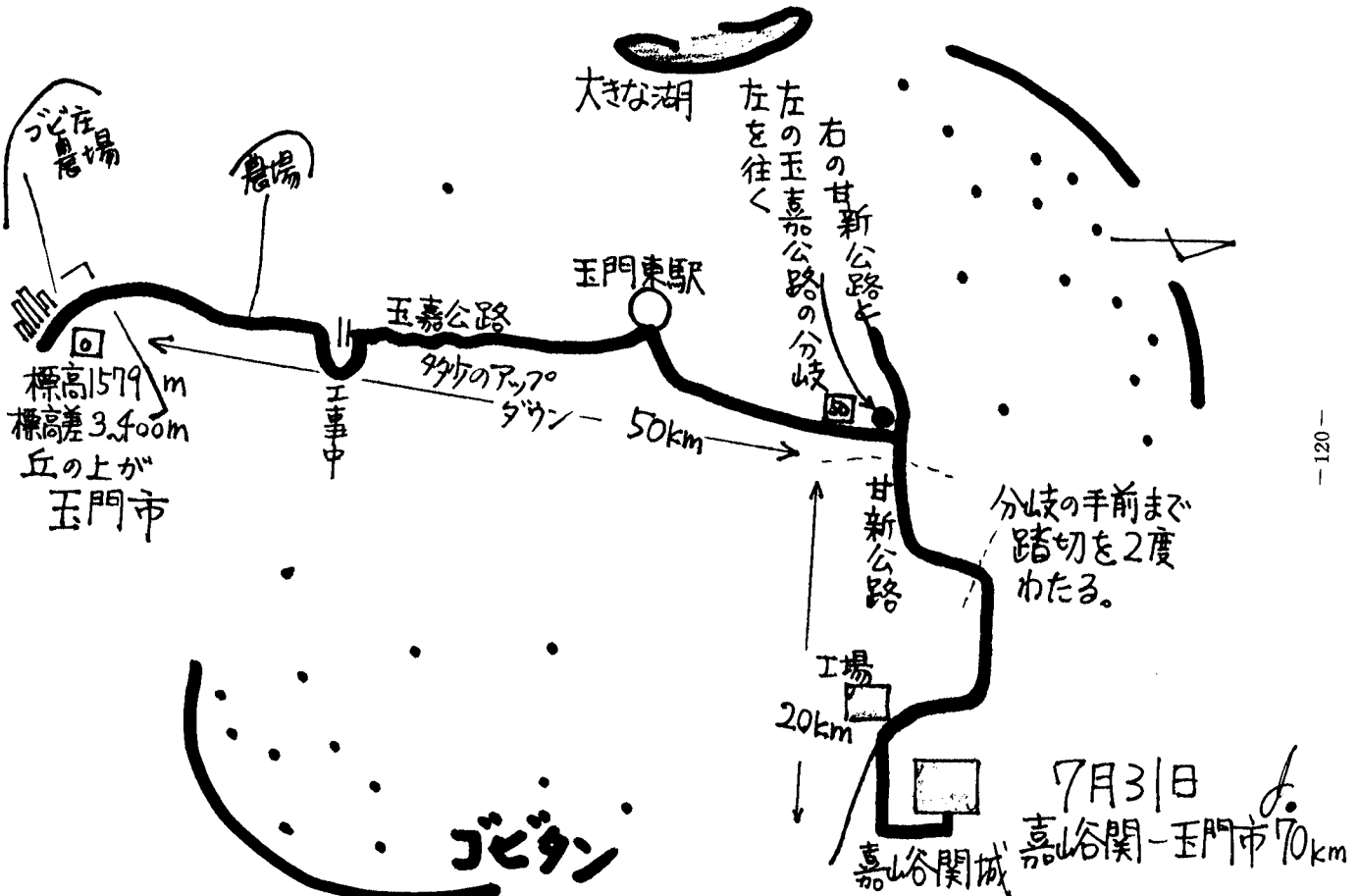
七月三十一日　雨風強く、寒い　嘉　関→玉門市
玉門石油管理局招待所泊　七〇Km

五時起床。未だ陽昇らず。小雨まじりの風が強く、肌寒い。朝は、カレーとみそ汁の初の日本食。中国人はそれに手をつけたがらない。材料が不足し、食当は苦労したようだ。あわただしく天幕撤収。一諸に体操をやり、小雨の中、三隊が五分おきに出発。嘉峪関の紀元を記した石碑が陳列してある部屋に我々の自転車を置かせてもらえたのには驚いた。これはもう、正倉院の倉の中に自転車を持ち込むようなものである。出発前、モタモタして、中国人にバッキングを手伝ってもらっている新人を叱る。とは言うものの、あっという間に寄ってたかって手伝ってくれるのだから仕方がない。要は我々が今以上に俊敏な動作をすること。

七時四十五分関城の門から坂道を一気に下り、二日目の行動開始。いよいよ砂漠的風貌が強くなり、さえぎるものは雨と風のみ。A隊の余さんは道案内を命じられているのか、リーダーの「余さん、列の中で一諸に走りましょう」の言葉もふりきりビュンビュン飛ばす。昨日とはうって変り、フォロー気味の風があるので時速二十Km以上は軽く出る。モルモットの様にペダルを踏む。踏切を二度渡り、八時四〇分、玉嘉公路に入った所で一本。右手にかなり大きな湖が見える。左には鉄道。二〇分前に、解放軍のミサイルを積んだ列車が通る。他には何もないゴビ。雨は降り続いている。

二本目。距離表が五〇から減ってめく。すれ違う車は公司や解放軍のトラックだけ。あまりの寒さに身も凍えウインド・ブレーカー着用。装備表に雨具はない。このあたりでは今日、一年分の雨が降っているのだった。九時五〇分、玉門東駅到着。工場の事務所を借りて休ませてもらう。なんと！ヒーターが使われている。ここで昼食を取り、十二時三〇分出発。暑い日などは特に、昼寝の習慣のある中国人は、昼食後長く休もうと主張するが我々は早く目的地へ着きたいのである。そうもしていられない。

再び玉嘉公路に入り、ガンガン西へ西へと一本道を進む。十三時十分、ちょっと早いが、ラクダが五〇頭ばかり群をなして道を横切ろうとしているので一本とる。雨があがる。いやがるラクダを無理矢理連れてきて記念撮影。酒泉中学の先生と伴に、先程までの雨も忘れてラク


大きな湖
左を往く
左の玉嘉公路の分岐
右の甘新公路と
ごビ左農場
農場
玉門東駅
玉嘉公路
タタリのアップダウン
50km
標高1579m
標高差3,400m
丘の上が
玉門市
工事中
甘新公路
分岐の手前まで
踏切を2度
わたる。
工場
20km
ゴビタン
嘉峪関城
7月31日
嘉峪関－玉門市70km

ダいじめに興ずる。しぼんだコブが可愛い。

四本目、やや道がのぼり始め、アップダウンも感ずる。途中、C隊にいた劉さんが、工事中のため、じゃり道をう回していたら転倒する。足を痛めたらしい。かなり痛そうなので、医者の高先生と自転車を変わる。この人は、余程楽しいのか、自転車に乗りながら子供の様にはしゃいでいる。十四時十五分、玉門市の七Km手前で休む。左手の丘の上に玉門市のコンビナート、煙突が見えてくる。今まで何もなかった砂漠地帯に忽然と姿を見せ、異様である。丘と言っても、日本の山程もあるデカサ。三〇〇m程標高差があるのでここからやたらときつくなる。しかも市内に入りなお上りが続き、死闘レースの様相を呈してくる。自転車と荷物が重いので足がつりそうになる。七Kmに五〇分もかかり、十五時十五分ようやく玉門石油管理局招待所着。今日は最後の一本でかなり疲れている。近くでシャワーを浴びらせてもらう。また雨が降り出し、本当にシルクロードの夏だろうか。ブルブル震えながら招待所へ帰る。標高は千五百七十九Km。まさに山の上である。幕営の予定であったが、この天気なので、全員招待所に泊ることにする。

招待所で夕食をとってから上級生ミーティング。どうも、委員会、上層部レベルのミーティングばかり多くて今まで下級生とのコミュニケーションが不足していたと痛感。やはり現役主体で、合宿の中の問題の解決にあたらねばならない。海外に来てもやはり合宿の基本は、特別なところにある訳ではない。青木隊長の言う〝基本的〟という言葉が頭に残る。料理人主体で進められる食当のあり方をどう変えてゆくか活発に議論する。二十三時就寝。

八月一日　曇がち時々雨　玉門市停滞　同招待所泊

七時起床。どんより曇っている。昨日の激走で体がギクシャクする。午前中、砂漠のど真ん中に井戸水だけで開拓されたゴビ庄農場を見学。よくもこれだけの農場を作ったものだ。「愚公移山、改造中国」のスローガンのもと全国的に緑化が進んでいる。そこでトマト、りんご、李、尺上のきゅうりを御馳走になる。ガツガツかじる。とても「很好吃」（ヘンハオチー＝うまい）。

バスで宿舎に帰って昼食をとった後、中日首脳ミーティング。食当と行動形態について話し合う。料理人と、新人合同で一諸に食事を作る事（各ディッシュを分担）にし、行動については、一列縦隊を守ること、トップをワンゲル二年生にまかせること、などで合意した。中国側は我々を客として大事に扱ってくれているので、どう

しても、合宿自体過保護になり易い。中国で主体的に、ワンゲル活動することの難しさを知る。

午後からは、玉門精油所、市内より一時間程山あいにバスで行き、油井の現場にそれぞれ訪れる。玉門市は戦前から石油の町である。油井のC－五〇九隊は、天幕で寝泊りしながら仕事に従事していた。隊長の史さんに説明して頂く。彼の若さ、頑健さ、誠実さがひしひし伝ってくる。鉄人王進喜の再来のような好人物であった。

夜、管理局の御好意で「孫悟空」の映画をみせていただき、二十二時就寝。今日、山口が熱を出したため休ませて置く。また片岡もカゼ気味なので午後から休養。部員の疲れがかなりたまっている。

八月二日　曇後晴　玉門市→玉門鎮

玉門鎮第二招待所前幕営　七六Km

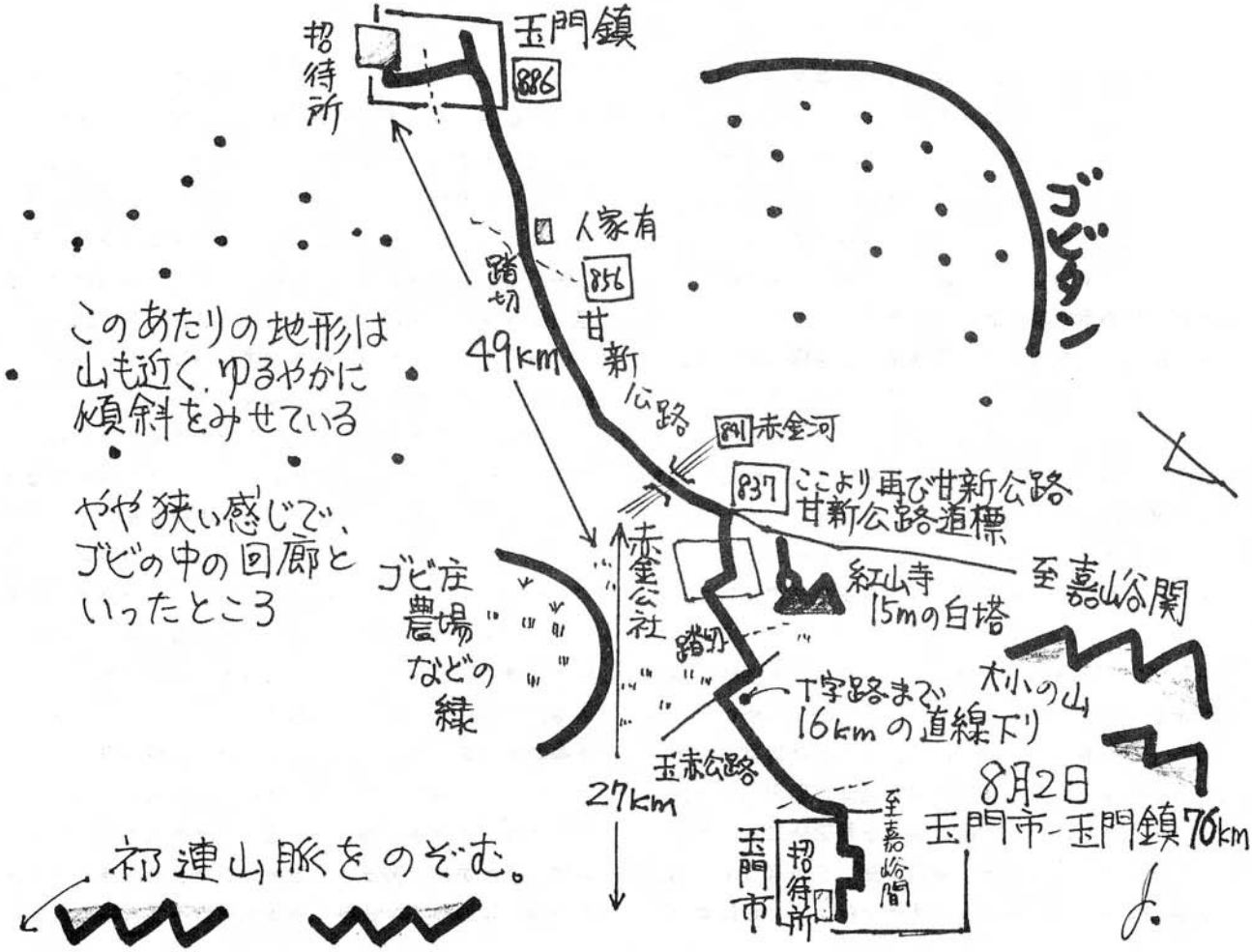
六時起床。山口、広瀬が腹痛、片岡がカゼ気味で不調。なんとか大丈夫だろう。八時〇五分、招待所の方々の見送りを受け出発。一昨日必死で上った市内の坂道を今日は快適に下る。さらに郊外の踏切りを越れば、眼下にゴビ庄農場、はるか彼方の回廊状のゴビが望まれ、ここからは十数Kmおよそ三〇分、一直線に下り降りるだけ。左右のラクダ草が矢のように流れていき実に気持がいい。

下り終えたT字路を右に曲り、さらに一Km程じゃり道を行ったところで左に折れる。これが玉赤公路。数Km先にある踏切の手前で一本とる。九時一〇分

二本目、玉赤公路、じゃりまじりの赤土の道を数Km。時間は早いが、紅山寺の白塔が美しいので休む。このあたりは赤土だらけ。赤土の小高い丘の上に白塔が青空に映えて実にいい。集落も近いらしく、子供たちが、おそる、おそる寄ってくる。赤土にようやく作った田園では、春小麦の刈り入れが終っていた。

三本目。久しぶりの青空の下、心地良い風に吹かれて、赤土の道を進み、赤金公社の人家の中を通り抜ける。ようやく元の甘新公路に戻る。距離表八三七地点である。再び簡易舗装の一本道を快適に走り、四Km先の八四一地点、赤金河畔にて昼食のため一本。十時四〇分。昼食では、中国風のインスタント食品、快食（パン、カンヅメ、ビータン）を中心としたので、時間の使い方が、本来のワンゲルのものに近くなる。広瀬と山口には病人食をとらせる。

四本目。大地の起伏のため多少のアップダウン。甘新公路に出てから再び人煙が絶える。やや追い風。向う側から逆風をついて、自転車に乗った郵便配達少年が必死にペタルを踏んでやって来る。一体、この砂漠の中、ど


玉門鎮
886
招待所
人家有
886
踏切
甘新公路
49km
ゴビダン
このあたりの地形は
山も近く、ゆるやかに
傾斜をみせている
やや狭い感じで、
ゴビの中の回廊と
いったところ
841 赤金河
837 ここより再び甘新公路
甘新公路道標
至嘉峪関
紅山寺
15mの白塔
赤金公社
踏切
ゴビ庄
農場
などの
緑
T字路まで
16kmの直線下り
小の山
玉赤公路
27km
8月2日
玉門市-玉門鎮76km
至嘉峪関
玉門市
招待所
祁連山脈をのぞむ。

こまで配達に行くのだろうか。赤金という名は、昔から水が赤く燃えていたのでその名が由来したらしい。NASAの地図を見ると、玉門市から赤金あたりには石油パイプラインが通っているが、それらしいものはない。左に　連山脈が雲をかぶっている。六〇〇〇mの未登峰がごろごろしている。いつか彼の山々にも日本の登山隊がどんどん遠征してくることだろう。十三時、距離表八五六地点で一本。鉄道管理のためこのあたりに住んでいる現代の砂漠の住人が集ってくる。ここで今まで元気一杯だったA隊の余さんがリタイヤする。

五本目。暑さを感じると思ったら、右手遠方のゴビの砂礫の中にシンキロウが現われる。蜃影が湖上にゆれているようだ。突然また左に、竜巻状の砂ぼこりが出現。かなり大きい。クワバラクワバラ。前方に緑が広がり始め、オアシスの近さを知らせる。八七六地点で一本。

六本目。走り始めてすぐにポプラ並木が始まる。玉門鎮の町並に入る。典型的なゴビの中の農村。市内中央の手前で日本人観光客を乗せたバスとすれ違う。ハンカチを振って激励してくれる。甘新公路八八六地点から左に入り、踏切を渡ったところの玉門鎮第二招待所に到着。十四時四〇分。山口と広瀬も不調ながらよく走った。招待所の前の広場に天張る。

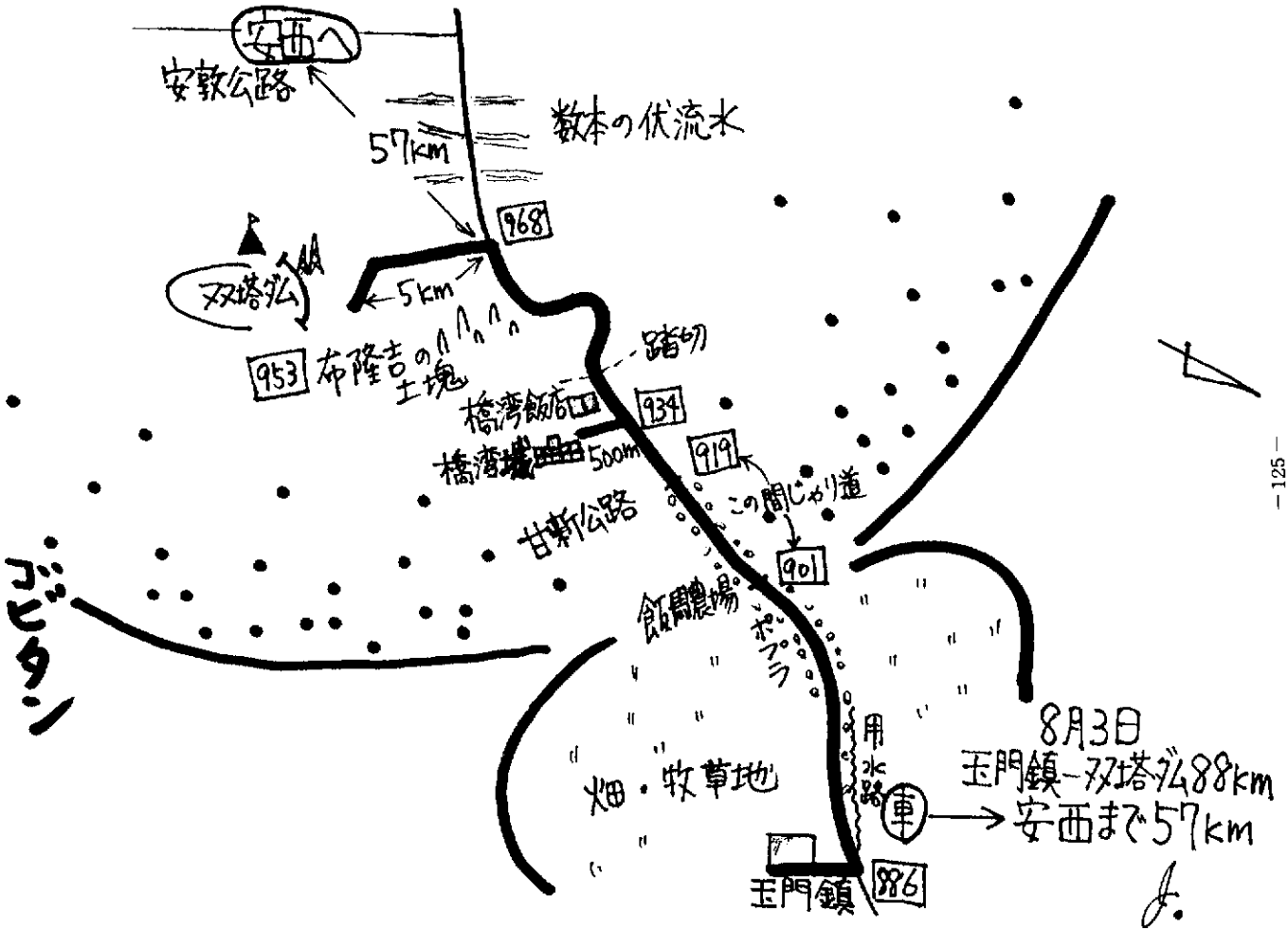
夕食はカレー。なかなかうまい味つけ。それでも中国人は手をつけない。第一印象が悪すぎたのだ。

広瀬と山口が医師の世話になる。何とか全員完走をと考えたが、医師の判断次第では明日は車に乗せることになるかも知れない。中国側では部員の健康を第一に考えてくれるが、一方、医師の世話にはなりたくないという気持ちが我々にはある。その都度、本人の具合を見て対処してゆくしかない。

一斉に自転車の点検をさせる。ネジが粗悪でよくネジ山がつぶれるものの、パンクが今まで一度もないということは特記すべきだろう。二十一時過ぎに暗くなる砂漠の夕暮。夕陽が朱とも黄色ともつかぬ色で、とっぷりと落ちてゆく。二十一時半就寝。

八月三日　曇後雨　玉門鎮→双塔ダム　八八Km　ー自動車ー安西招待所前幕営　五七Km

五時半起床。広瀬と山口はやはり無理をせず車に乗せる。八時十五分出発。いつものことながら地元の人の見送りを受ける。来た道を戻り八八六地点から甘新公路に出る。右に用水路とポプラ並木、左には畑が広がっている。このころからやっと自転車行動の隊列もまとまる。九時一〇分飲馬農場前で一本とる。百人ぐらいの大人や


安西へ
安敦公路
57km
数本の伏流水
968
双塔ダム
5km
953
布隆吉の土塊
踏切
橋湾飯店
934
橋湾場
500m
919
この間じゃり道
甘新公路
901
飯場
ポプラ
用水路
畑・牧草地
車
玉門鎮
886
ゴビタン
8月3日
玉門鎮－双塔ダム88km
安西まで57km
J.

子供がワイワイ集って来る。九〇一地点。ここからちょうど二〇Kmはじゃり道となっているそうだ。

二本目。じゃり道を時速二三Kmほどでガンガン飛ばす。石に気をつければ、平担なので比較的走り易い。九一五地点から並木がとだえ、オアシスの緑がきれる。甘新公路距離表九一九地点、再び簡易舗装となり一本とる。水と緑に見離された荒涼の大地がどこまでも我々を包んでいる。目前を延びる一本の道しか頼るものは何もない。十時三〇分

三本目。フォローに助けられ、時速二五Km程で進む。中野浩一の様にペタルを踏む。公路から五〇〇mばかり左の砂礫の中にある橋湾城で一本とる。清代の城壁だけが砂風にさらされている。古銭捜しなどをして三〇分ほど休み、近くの橋湾飯店に移動し、昼食。中国製即席カレーラーメンを食べる。十三時十五分までまた一休み。

四本目。九三四地点から出発。走り始めてすぐに砂礫の土塊を左に見る。薄く日がさしているだけだがまぶしい。蘭州線の踏切を渡る。風が横から吹く。十四時五分、九五三地点到着。無数の一m～三m程の高さの土塊が左に見える。ここは布隆吉と呼ばれ、このあたりでも一番の風庫（風の通り道）である。風が地形を作っている。上海汽水（サイダー）を飲み、しばしこの地獄図にみとれる。

五本目。多少の起伏はあるもののなだらかに道は下っている感じ。右側一面シンキロウ。多少曇っていても現れるものかと驚く。ひょっと二匹のヤギだかシカだかわからない動物を見る。九六八地点より左のアップダウンの激しいじゃり道に入る。数Km程行くと、砂漠の中の双塔ダムに到着。十五時四〇分。鉄の双塔が目印。こんな砂の海の様な所なのに、信じられない程の貯水量。一同目を疑う。エスバースを建て、砂ぼこりの中で遅い夕食をとる。建設途中のダムらしく、泊りがけで働いている人々が多勢いる。現代のオアシスはこうした仕事によってできているのだと実感する。

事件はいつも前触れなく起る。劉さんの話によれば、ここ数日間降り続いた雨のため（このあたりでは勿論異常気象だろう）工事途中のダムに水がたまりすぎてしまい、今日夜十二時を期して放水するという。そのため、甘新公路からダムまでのじゃり道が冠水し、明日は不通となるから、安西県招待所（五七Km西方）までこれから車で避難した方がいいと推める。急いで天幕を撤収し、すでに陽も落ちて暗い夜の中、バスで安西へ向けて出発する。

バスの中での事。公路に出るまでのじゃり道は振動が

ひどく、フロントガラスが割れる。と同時に冷たい雨風が吹き込む。それを防ぐために、旅行社の劉さん、谷さん、李さんの三人が、止めて下さいという言葉も受け付けず、安西までの間ずっと窓がわりとなってフロントガラスの前に座り続けてくれた。その優しさと強さに頭が下る思いである。本当に。二十三時、安西招待所に全員到着。今日は長い一日だった。

八月四日　雨後曇夜半雨　安西停滞

安西共産党学校講堂泊

七時起床。小雨が降り続いている。幕営の予定であったが、降雨のため招待所の隣にある共産党学校の講堂に移動。長椅子を並べてベッドとする。荷物を整理し、自転車の整備に取りかかる。その後各自町に出る。安西は強風の吹く町として有名。「西を安んずる」という名の通り、昔は西域途上への一要衝であった。今では学校、公署、映画館の建ち並ぶ近代的なオアシスであるが、町の南には崩れた城壁（一辺が七〇〇m程）とその中に空襲のあとのように荒れ果てた、日干しレンガの残がいだけがるいるいと散らばっている棄てられた町の跡が残っている。わらくずやレンガのかけらがくだけて風に舞っている。「兵どもが夢の跡」

昼食後、町の自転車屋を捜し、部品を買う。十四時半青木隊長、川相副隊長、劉さん、張さん、余さんが神沢部長と土屋副隊長を出迎えに酒泉に出発する。

夕食はギョウザを作る。中味を皮でくるむ手つきはさすがに中国人の方がうまい。水ギョウザだけの夕食なんてこれが最初で最後だろうか。腹一杯食う。

夕食後フリーにしたので上映中の「我們相愛」という映画を見にいった者もいた。勧善徴悪物の人生映画だったそうだ。予告では山口百恵の「絶唱」を流していた。

八月五日　曇後晴　安西停滞

安西共産党学校講堂泊

七時に起き、朝からのんびりと停滞日の気分を味わう。町に出る者あり、自転車の具合を見る者あり。十九時半、待望のお二人が元気に到着される。合流を祝して、ビールで乾杯。夕食にリーダーがナス天をあげる。中国人も食べてくれた。

淳が、定期連絡日のため、在日本部に電報を打つ。外国人が電報を打つなんて珍しいせいか、局員もオロオロしている。

庄が体調を崩し、一日中何も食わずに寝ている。ギョーザの食い過ぎらしい。明日の様子を見て行動させるか

どうか決めることにする。就寝二十二時。

八月六日　快晴　安西→空心墩烽火台　七二Km

空心墩烽火台下幕営

六時起床。本日は晴天なり。待ちに待った絶好のコンディション。ヤル気がムンムン沸いて来る。やはり庄は不調だが、走らせることにする。

八時半、新人の入れ替えをし、三隊五分おきに安西を発つ。ことより安敦公路を南西へ向かう。起点の道標は六である。朝方は走っていても涼しい。今日は典型的な大陸気候のようだ。昼からの暑さを覚悟する。正面に、赤茶色のひだのある低く長い山、三危山を見ながら、田園の中の一本道を一〇Km進む。直角に右に折れると道は三危山に沿って延びている。何せこのあたりの道というのは、地ならしさえすればよいのだ。このあたりはまた、河西回廊各民族がその覇を唱えるべく永年の争乱を起した舞台でもある。右手には草原の緑が大きな風景を作り、羊やヤギ、牛などの群をなしている他は風だけだ。左手には三危山下まで上り気味の砂礫が広がっている。ぽつんと安西の人のものだろうか、石を積んだだけの、賽の河原にある様な墓塔が作ってある。道標十九地点。九時二十五分、十工道班前で一本とる。

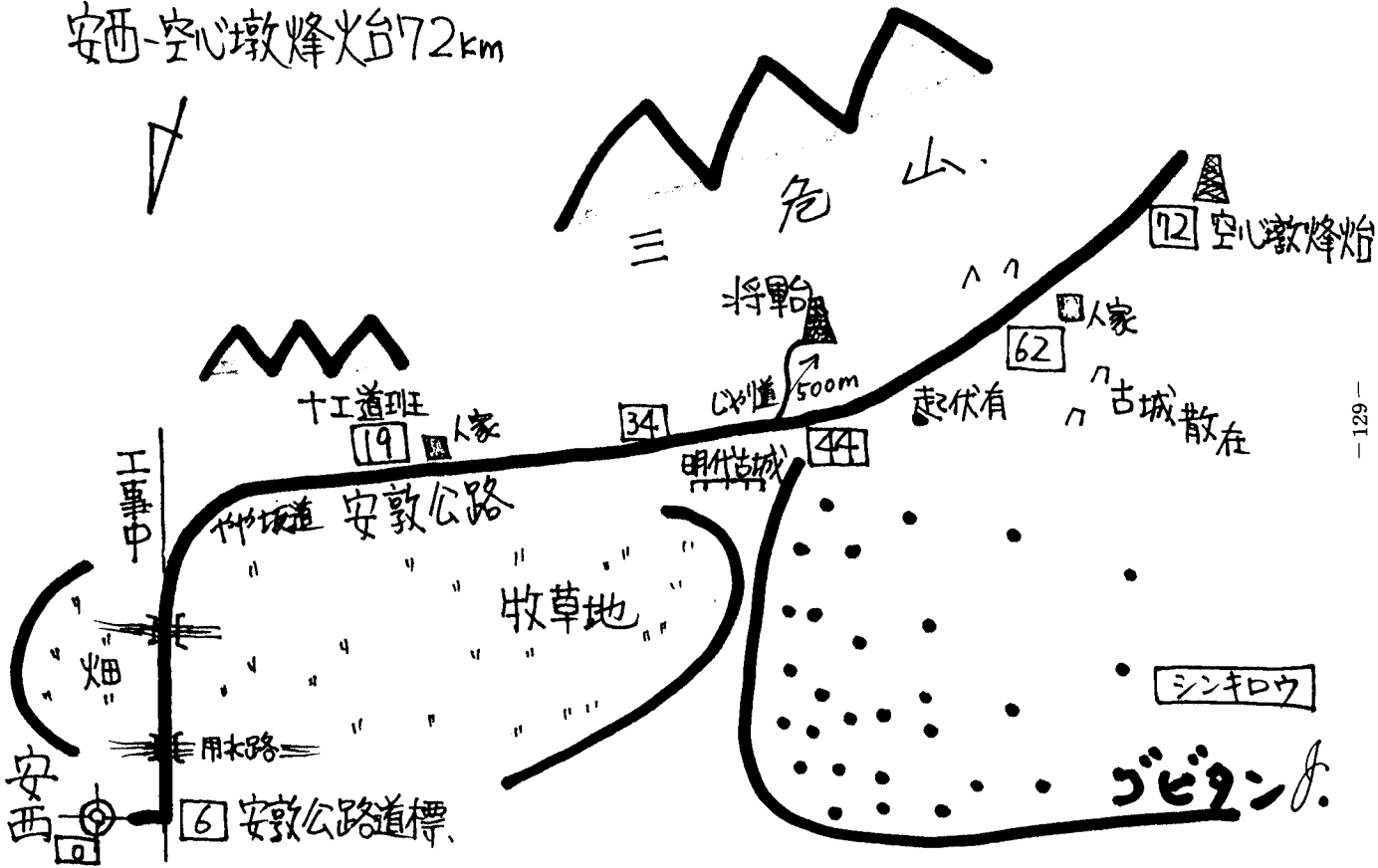
二本目、気温二十七度。右手の緑も消え、再び雲煙万里の大絶景となる。ところどころに明代のくちかけた城壁も見えている。日射しも徐々に強くなる。十時二十五分、三十四地点で一本とり、スイカを飲むように食べる。

三本目。大地の起伏は実は、大泉河の河床であるらしい。NHK報道班はここで水のある時に往生した。安敦公路を左に五〇〇m入り、将軍台烽火台の下で昼食のため一本。十一時二〇分、四十四地点である。昼食で、即席カレーラーメン、あげパン、つけもの、牛肉のびんづめ、ビータンをたいらげる。十三時まで、城壁の日陰で休む。

気温三十五度まであがる。めっぽう暑くなり、風も熱風に近くなる。アスファルトから陽炎がゆらめき出す。地表温度は五〇度を越えている。十四時五分、六二地点故城が散在している道端で四本目。

五本目。やや上っている道を、向い風をものともせずにガンガン飛ばす。ところどころ、コールタールが溶けて、車輪や衣服に飛び散るスゴサ。先行隊が陽炎の中をゆらゆらゆらめいて先を急いでいる。十四時五〇分、七十二地点、空心墩烽火台にいたる。スイカを口からすぐ胃に入れるようにばくつく。皆、水分を欲しがる。

8月6日
安西-空心墩烽火台72km



天幕を設営するが、中に入れたものではない。
十六時半、栗原が三十九度四分の熱を出し、腹痛を訴える。行動中は元気そうに見えたが、苦しそうなので、今日も調子が悪かった庄と一諸に、敦煌の病院で見てもらうことにする。張さんや余さん、関口に付添ってもらい、マイクロバスで行く。その車で神沢先生にも一足先に敦煌まで行って頂くことにする。
夕食後に部員ミーティング。各自に一層の健康管理をうながす。部員の感想を聞いてみると、日本で考えていたよりも制約が多いので戸惑っている者が多い。いろいろとアレンジされてしまうことは予想できた。しかし中国人も我々のためになんとかこの計画を成功させようと一所懸命なのだから、無理矢理ワンゲルベースに持ち込むのはどうだろう。言うべきところは言い、お互いによく話し込んで隊を進めていくことが必要である。
二十二時一〇分、敦煌から張さんが報告に戻ってくる。楊家橋人民公社で二人を休ませているとの事。安静にすれば大丈夫らしい。
二〇時四〇分頃日没。夕陽が地平線の彼方に溶けてゆく。荘厳。太陽が時間を刻んでいく風景。歴史の音が聞えてくる。満天の星の下、全員シュラポン。幾つもの星が流れ落ち、人工衛星がゆるやかに夜空を渡ってゆく。二十二時半、就寝。夜は夢を見るためにある。

八月七日　快晴　空心墩烽火台→敦煌
楊家橋人民公社泊　五七Km

六時半、起床と伴に東の空が明るくなってくる。将に我々は朝日と伴に起き、落日と伴に寝る生活を繰り返している。何という幸福だろうか。
出発前、張さん、関口等、敦煌で病人に付き添っていてくれた人々がマイクロバスで戻る。二人は元気になったらしい。
八時五〇分、出発。相変らずのゴビの一本道を突き進む。幾つかの小高い丘を越えると正面遠方に敦煌オアシスの緑と鳴沙山が見えてくる。いよいよ敦煌が近づいてくる。九時四〇分、安敦公路道標九〇地点で一休み。
人家が、二、三見えてくる。東に数Km進み、再び右に向きを変えて、正面に鳴沙山を見る。ゴビが緑化され始め、オアシスが近いことを知らせている。日本製のダンプと何度もすれ違う。トラック野郎を相手に道端で、スイカを売る農民を見かける。十時五〇分、町に近づいたところで一本。一〇七地点。
三本目。荷物を引くロバ、自転車、人の数が増してくる。道標一一〇地点から左に一〇Km行けば莫高窟である

三危山
大泉河
莫高窟
鳴沙山
10km
楊家橋人民公社
陽関・チベットへ
人家
107
ポプラ
110
120
敦煌
畑・牧草地
党河
(氾濫)
人家
90
安敦公路
このあたりはやや
丘状になっている。
ゴビタン
8月7日・10日・12日
空心墩烽火台-敦煌 57km
敦煌←→莫高窟 28km
空心墩烽火台
72
安敦公路道標
J.

ポプラ並木と田園の中に入り、敦煌の町の中心を抜けて、庄と栗原、神沢先生の待つ楊家橋人民公社へ。敦煌は安敦公路一二〇地点であった。十一時五〇分、ひまわりの咲く、人民公社の講堂に到着。

二時間程昼寝、十五時より、食当以外はフリーとし、町に出る。この公社は市街の南三Km程のところにあるので、町へは皆、愛車に乗ってゆく。町の人の間では、OBの変速機付ツーリング車に人気が集まり、店の前に停めておこうものなら黒山の人だかりとなる。また部員の間では、冷飯部と呼ばれる喫茶店が好まれる。

夕食後、大家が腹痛を訴える。原因は暴飯暴食。あきれてものが言えない。きつく叱りつける。庄と栗原はもう大丈夫のようである。

二十一時、甘粛省外事弁公室主任の潘志仁さん、酒泉地区外事弁公室主任の芦逢奎さん、敦煌県知事の李天昌さんがお見えになり、励しのお言葉を頂く。

石畳の講堂の中に簡易ベッドを持ち込んでそこで寝ることにする。余った時間は、中日入り混って、卓球や、中国式玉突きに興じている。遊びの面白さに国境はなかった。二十二時半就寝。

八月八日　快晴　敦煌燈楊家橋人民公社泊　一〇Km

午前中、公社から四、五Km離れた鳴沙山まで自転車でゆく。標高差一二〇mの山登り競争をする。流砂といわれるだけあって足がどんどん流れ落ち、皆、よつんばいになって登ってゆく。山口、佳一、寺沢、淳、関口、渡辺の順で入賞。中国人の先生などは途中で争うことを放棄したようだった。頂上にたどりつくと、敦煌オアシスの全貌が美しく見える。呼吸の乱れがおさまらないので、ゆっくり景色も見ていられない。反対側には、三日月の形をした湧水湖の月牙泉が青く澄んでいた。

午後は敦煌博物館で、梁さんの話を聞く。いつも年配の方が多いそうで、若い学生が来ると本当に嬉しいと言う。そう言われると、わからないものもわかった顔をして聞かねばなるまい。中国の歴史というのは、密度が濃すぎて覚えきれないと部員がぼやく。

町の西側を流れる党河が、先日来の雨で増水し、陽関へ至る道が寸断されている。トラックが四台水没している。陽関へ行くには、自転車をかついで、渡渉しなければなるまい。全く、異常な砂漠の夏である。

原が熱を出し、庄も食欲がまるでない。部員の彼れがたまっている。行動は陽関と莫高窟を残すのみである。自己管理に気をつけるよう部員に指示する。

神沢先生、土屋副隊長の顔色も良くないようである。

点滴恐怖症になってしまった

二年　原　英泰

八月八日　夜中からひどい下痢を起した。ついに俺の番か。医療係がダウンしてなるものか！　意地で鳴沙山へ登ったが、もうフラフラ。腹の中が大しけのようであった。ついに観念して敦煌県病院へ。言っちゃあ悪いが汚い病院だった。公社へ戻ってから点滴を受ける。これで治るかと思ったらそうはいかなかった。針をさされてしばらくすると全身がケイレンしだしたのだ。自分の意志に逆って体がかってに動くってのはまったく気味の悪いものだった。腰が抜けるかと思ったがどうにかおさまる。この夜は高先生と看護夫さん（男の人です）にはホントにお世話になりました。しかし、ホッとしたのも束の間、朝起きてみると右手が恐しい太さにはれ上っている。これじゃあまるでボバイだ。隣りのベッドで庄さんが腹をかかえて笑っている。人の気も知らないで、まったく！おまけに川相さんはおもしろがって顔をひきつらせながら写真を撮るし…。もう点滴なんて二度とさせないゾ！

先生は御高齢にもかかわらず、よく部員と一諸に合宿をこなしておられる。その強さにあらためて敬服する。

酒泉地区外事弁公室主任の芦さんに小麦粉をいただく。訪れる各地で有形無形にいろいろと気を使っていただき、とても有難い。二十三時就寝。

八月九日　晴　敦煌　楊家橋人民公社泊　一〇Km

八時起床。午前中は休養とする。原の体に点滴が合わず昨夜具合が悪くなり、腕がはれあがる。医師の高さんと看護夫の田さんに一晩中寝ずに見ていただく。何とも御礼の申しようがない。洗タクをしたりして過していると、またまた芦さんが、高級乗用者〃上海〃に乗って訪ねてくれる。我々のために三顆の礼まで尽して下さり、たいへん恐縮する。

昼食後、原と庄を残して、自転車で、沙州故城と白馬塔へ出かける。神沢先生も自転車に乗って参加される。白馬塔は敦煌で唯一残存する塔であり、印僧羅什が長安に往く際に失った馬の霊を弔うために作ったものだという。そばの畑では綿花が咲きほこり、（綿花は敦煌の特産のひとつ）七星人民公社の社員が小麦の脱穀におわれていた。沙州故城の城壁を利用して人が住んでいた。歴史よりも現在の生活が大事なのである。

夕食は包子と呼ばれる、肉まんの小さくしたものである。それに辛子正油をつけて食べる。なかなかの美味。ニンニクをポリポリかじりながら食べると一段とうまい。中学校の化学の先生龔さんがそれを十八個食べると李さんらと賭けをしてビールを勝ち取り、喝采を浴びる。

原の左手に再び高医師が点滴を打とうとすると、原は右手がはれた事もあって嫌がる。今までこれで三人治っているし、熱も明日には下るかも知れない、また今度のは単なるブドウ糖であるということなので指示に従おうとしたが、結局、本人の精神面を重視して点滴を取り止めてもらう。食物があわず、不調を訴える者が多い。暴飲暴食は絶対やめさせるようにしなければならない。二十三時就寝。

八月一〇日　快晴　敦煌↓莫高窟　大泉河畔幕営　二八Km

七時起床、原と庄が不調なので車で行かせることにする。九時五分、出発。安敦公路一一〇地点まで元来た道を引き返す。そこから右に折れると道標は一から始まっている。三危山と鳴沙山の山あいを流れる大泉河（水はほとんど流れていない）を目指して、一本道をまっすぐ進む。朝早くゴビの中の木切れを集めに出かけていた少女達の自転車三、四台とすれ違う。一〇時、二地点で一本とる。

ゆるい上りが続く。水がない大泉河にかかった橋をわたると、三危山と鳴沙山の間、鳴沙山寄の河の段丘崖の下に唯一の緑がおかれている。あの林の奥に洞は作られてある。手前で二〇〇mほど続く気持ちの良い林をくぐり抜けとうとう十一時、莫高窟に着いた。十五地点である。乾ききった河床に天幕を張る。目前に莫高窟。

昼食後フリー、各自思い思いのルートで見学に出かける。結局真面目に入場料二分也を払って入ったのはLの佳一とSLの淳だけ。ほとんどが大きくう回し、山を越えて無料侵入する。管理人ものんきなものである。

窟内の壁画や、仏像はどれも実に素晴しい。何が素晴しいかと言うと、日本みたいにガラスケースに入っていないところだ。やはり仏教はエロチシズムを備えていると実感することしきり。LとSLは盛んにそのあたりの学術的考察に終始する。中国各地から、香港から、日本からと、観光客が数組来ている。一番土産を買いあさっているのはやはり我民族であった。

夕食中、ちょっとしたトラブル。清華大学の学生連中（中国でも一、二のエリート大学）が我々の食事風景をのぞきに来たので、劉さん達が「失礼だから帰ってくれ

」と言ったらしい。そこで口論となり、清華大学生はエリート意識をまる出しにして劉さん達に食ってかかっている。劉さんは国際人らしくきわめて誠実に我々を擁護している。後で通訳の余さんが一言もらす「彼等は礼儀を知らない野蛮人だ」

寺沢が食い過ぎで調子をくずす。神沢先生の顔もすぐれない。二十三時就寝。

八月十一日　快晴　莫高窟停滞　大泉河畔幕営

終日、ガイドの案内を得て、窟を見学に回る。ここを全て見て回るには一週間を要するというから、その窟の多さたるやたいへんなものである。無惨にも異教徒に破壊されたところや、外国人に持ち去られた跡が残る。唐時代の国際色豊かな仏像の顔にみとれているだけでも一時間ぐらいすぐに経ってしまう程、趣のある遺跡である。

庄が元気になる。かわりに今度は飯田の調子もおかしい。調子の悪い者は、建設中の招待所にふとんをしいて休ませる。今日は新人は皆シュラポンをするようである。二十時就寝。

八月十二日　晴　莫高窟→敦煌　楊家橋人民公社泊　二八Km

六時起床。朝食は敦煌に着いてから食べることにする。朝方、佳一も下痢で苦しそうにしている。

今日は、来た道を敦煌までガンガン飛ばしていくだけだ。七時十分に発ち、風に乗って走ったので八時二十五分には早くも公社に帰ってくる。二八Kmを一本できた。

明日の陽関行に備えてゆっくりする。十五時、香山と庄に換金に行かせる。

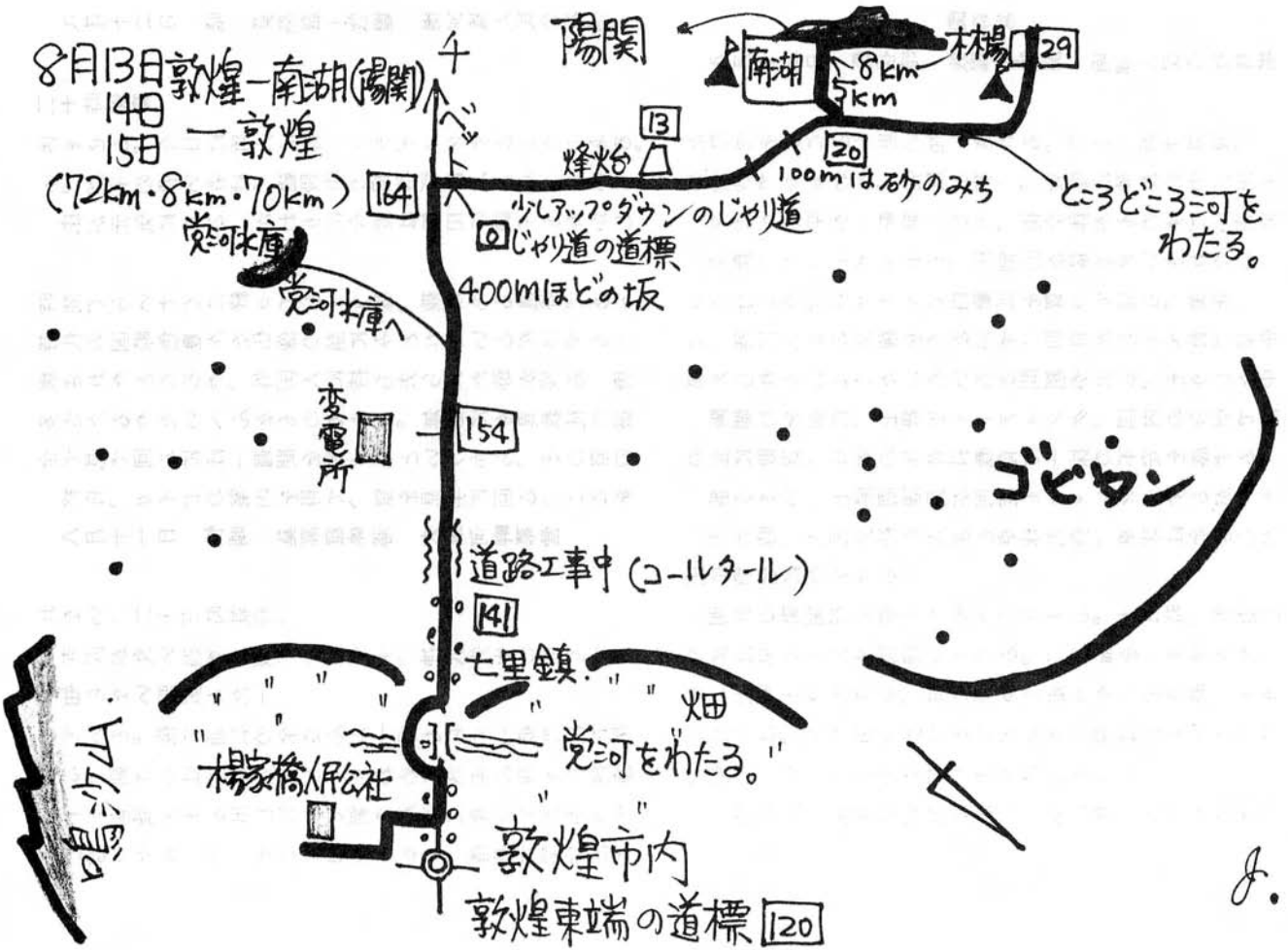
十六時、人民公社の人達と卓球大会。卓球は余さんが一番うまい。土屋副隊長が何度もチャレンジするが、その度に敗退。日本の体育科教育に一抹の不安を感ずる。

陽関行を前に、上級生ミーティング。国内の合宿では考えられないようないろいろな問題が出る。そうした中で、特に二年の活躍をうながす。明日からも全員で頑張って行こう。バザールで白蘭瓜を買って帰る。美味。

夕食にギョーザが出る。圧倒的な量で食いきれない。

夕方から空が一転暗くなり、街全体がものすごい密度の黄砂でおおわれ、強風が吹く。敦煌は砂漠の中に出来た町であることを思い知らされる。二十一時半就寝。

八月十三日　曇後晴　敦煌→陽関　南湖人民公社林場園幕営


8月13日敦煌－南湖(陽関)
14日
15日 ― 敦煌
(72km・8km・70km)
164
党河水庫
党河水庫へ
陽関
南湖
木楊
29
8km
5km
13
烽火台
20
100mは砂のみち
ところどころ河をわたる。
少しアップダウンのじゃり道
0 じゃり道の道標
400mほどの坂
ベット
変電所
154
ゴビタン
道路工事中(コールタール)
141
七里鎮
畑
党河をわたる。
楊家橋人民公社
敦煌市内
敦煌東端の道標 120
J.

五時半起床、慢頭とコーヒーで軽い朝食をすませ、いよいよ出発。安敦公路一二〇を起点とし、七時四〇分公社を抜けて、陽関へと向う。党河渡渉の際は全員自転車を肩にかついで裸足になる。河床は砂なので楽に渡る。ちょっとした工場地帯の七里鎮を越えると、ポプラ並木となる。完全に向い風。かなりペダルが重い、懸命にこいでゆく。八時三〇分、A隊の岡の自転車が今合宿中初めてのパンク。ここで一本取る。一四一地点。修理に三〇分ぐらいかかってしまう。

二本目途中、C隊の栗原と先生が接触し、先生が転倒。同じようにしてB隊の寺沢も続いて転倒。風をさけるために下を向いているからなのか。疲れも出ているのだろう。今日は初めからアクシデントが続く。気を引きしめなおしていく。向い風のため、疲れるばかりで、まるで進まない。十時二〇分、一五四地点で一本。何処へ行くのか、トラックが道路をはずれてゴビの彼方へ走ってゆく。

三本目。同じく風のため疲労度が激しい。一六四の道標から安敦公路をはずれて、右の細かいアップダウンの激しいじゃり道にガタガタと入る。砂と石以外何もない。ラクダ草さえないあたりで休む。晴れてきて暑くなる。十一時二〇分、じゃり道の道標五地点である。上海汽水がノドをうるおす。

四本目。じゃり道のガタガタで走りづらい。途中で、ゴビの砂漠の中を走った方が、凹凸もなく、走り易いことを、土屋副隊長が発見する。全員それにならう。時々やわらかな砂にタイヤがめり込みハンドルを取られるが、じゃり道よりはましである。名もない烽火台の下、昼食のために休む。十三地点。十二時一〇分である。

昼食中、淳が不調。朝から吐いていたらしい。昨日のギョーザか。グッタリしてるので車へ乗せる。淳が朝からの不調を隠していたので、劉さんが、具合の悪い者は早目に車に乗れと言う。心象を害したようだ。

五本目、道が消えてゆくように暑い。シンキロウが右に見える。大きく左へカーブし、道は砂となり、自転車に乗れなくなったので、全員押して歩く。一〇〇m程。再びじゃり道となり、道が落ち込み、大地を侵触する河を渡る。二〇地点を過ぎたところで道が分かれており、右に向う。左へ行けば、南湖人民公社の町並に出る。右に向ったところからしばらくはさらに悪路となるが、すぐ、左前方に丘の上に赤茶色をしてそびえ立つ、陽関の烽火台が見える。突然道が下り、驚いたことに、今まで何一つなかったところから高いポプラ並木の緑のオアシスに出る。起伏が大きく、見えなかったのだ。

多小銭？

山口　浩

蘭州で散発屋に入った。私は会話の本を指差し散髪を頼む、三人の女性がやっていて、私はすぐ椅子にすわらされ散髪にかかる、いろいろ聞いてくる、さっぱりわからない、そのうち彼女はバリカンを持って私にとりかかった。私はあの王さんの青刈り頭を想像し必死の手振りでやめてくれと…、何とか不事終わり最後に中国語で多小銭？　四毛五分日本円で約五十円なり。

水

飯田　隆行

一汗かいた後、蛇口に顔を寄せてゴクゴクやる。スポーツマンならだれでも、あの水のうまさを知っている。ところが、中国では水が硬質のため生水は厳禁。沸かした水も、臭い、味ともになじめなかった。ヨーロッパでも生水はダメとのこと。世界広しと言へども、こんなにふんだんに水が飲めるのは、日本ぐらいかもしれない。思わぬところで、日本のよさを知った。

十四時二〇分、南湖公社林場園到着。二九地点である。

林の中に天幕設営。夕食後、陽関の烽火台に行く。三Kmぐらいの距離。道もない。足あとが続いている礫を頼りにとぼとぼ歩く。とうとう、最終目的地にたどり着く。ビールで乾杯。「都の西北」が夕やみと静寂の中に消えてゆく。この烽火台はなんと、日本の弥生時代と同じ頃に作られたのだ。西方万里のタクラマカンをぼんやりとみてすごす。無カラン無カラン故人無カラン

勿論全員がシュラポン。安らかに眼を閉ぢる。二十三時

八月十四日　曇後晴　林場園→南湖公社　南湖公社泊　八Km

七時起床。素早く朝食をすませ、九時出発。陽関を経由して南湖公社へ一直線に出る砂漠ルートをゆく。道も何もない。当然自転車を押して歩く。短かい距離だからこそできる芸当である。我々を追って蘭州から追って来たという蘭州大学のサイクリストに、陽関で会う。酒泉からでも我々と一諸に走りたかったそうだが、間に合わず、ここでこうして対面となる。

途中大きな河を渡渉した後、道に出る。十時二〇分、南湖公社人民政府に到着。本当にオアシスらしいオアシスである。

昼食のあと、貯水池まで散策。こんな砂漠の中に信じられないと思うぐらいの水量。双塔ダムの時と同じ驚き。池の向こうには緑の中に羊が群れている。そのあと近くの池に皆で泳ぎに行く。中国人も一諸になってパンツひとつで泳ぐ。

夕食前、休んでいた飯田が発熱。三九度四分。風邪らしいので寝かせておく。大家も不調、劉さんが心配してくれて申し訳なく思う。

夕食では南湖公社の方々とコイ料理を囲んで楽しいひとときをすごす満月の夜。二十二時就寝。

八月十五日　快晴　南湖公社→敦煌　楊家橋人民公社泊　七〇Km

六時起床。飯田の熱も平熱に戻る。公社人民政府前で記念撮影をして出発。

八時五五分、道標二五を起点とし、出発。道標の数がだんだん減ってゆく。二二地点でオアシスを離れじゃり道となる。二〇地点は、前に通ってきた分岐の地点である。同じ砂場で自転車を押していき、前に昼食をとった烽火台のところで一本取る。十三地点。十時。

祁連山脈が万年雪をかぶって青く遠くに見えている。じゃり道を順調にすぎて安敦公路に近づく頃、シンキロウが至近距離にみえ、先行隊がゆらゆらとその中に浮んでいる。安敦公路に出たところで一本。スイカを食べる。安敦公路道標一六五地点。十一時着。残り四十五Km。

三本目。舗装道路のありがたさをかみしめながら突走る。じゃり道では考えられないようなスピード。左前方に大シンキロウ。一四四地点で休む。十二時十五分。

四本目、これが中国合宿最後の力走。道路工事をしている所があり、しいたばかりのコールタールが小石のようにタイヤと言わずズボンと言わずベットリつく。敦煌の手前で羊の群れに進行を止められる。党河は水がひいていた。敦煌市中央のロータリーが見えてくる。体の力がぬけてくる。敦煌一二〇地点。終点。十三時二十五分到着。一本ゴクロウサン。大勢の市民がロータリーを囲んでいる。全ての人に今は御礼を言いたいと思う。

昼食後フリー。洗タク、荷物整理等を、静かな公社の中でのんびりとやる。

夕食後、座談会、甘粛画報の取材を受ける。

日本へ電報を打つ。Bicycle-was-over.

八月十六日　曇後晴　敦煌停滞　楊家橋人民公社泊

八時起床し、出発の準備に取りかかる。コールタール

がこびりついた自転車のフレーム、タイヤをきれいにみがく。使用した中国製のフライングビジョン号は全て、差し上げることにしたので、汚れたままでは相すまない。フライングビジョンは我々のつかのまの恋人だったが、彼女は本当に頑丈だった。

町に出て、土産を物色する。玉で造った夜光杯や切り絵が人気。自由市場（バザール）に行って、スイカや瓜を買って帰り、バクついている部員もいる。果物は豊富で、実にうまい。

午後、楊家橋人民公社の人々が、食いきれないほどのスイカと、とうもろこしを御馳走してくれる。この公社の御自慢の作物。

夜は、酒泉支社の招きで、敦煌賓館にて宴会。御世話になった、中学の先生、料理人、医師、カメラマン、ドライバー、そして旅行社の方々に御礼の意をこめて、一人一人に品物を手渡す。行動終了を祝って、陽気に皆で酒をくみ交す。実はもうすぐに、部員の間では、いろいろと中国の方にニックネームをつけていたのだが、ここでは差し控える。最初は皆さん、とっつきにくかったが、一諸に生活し、酒を飲んでいるうちに、旧知の様になった。余さんなどは、最初のうちは格好をつけていたが、恋人の話などをするとすぐにデレーとする。

公社に帰ってから、酒泉支社に贈ったラジカセで音楽をかけて、皆で輪になって踊る。なごりは尽きない。

二十二半就寝。

八月十七日　晴後曇　敦煌ー車ー安西ー車ー柳園駅

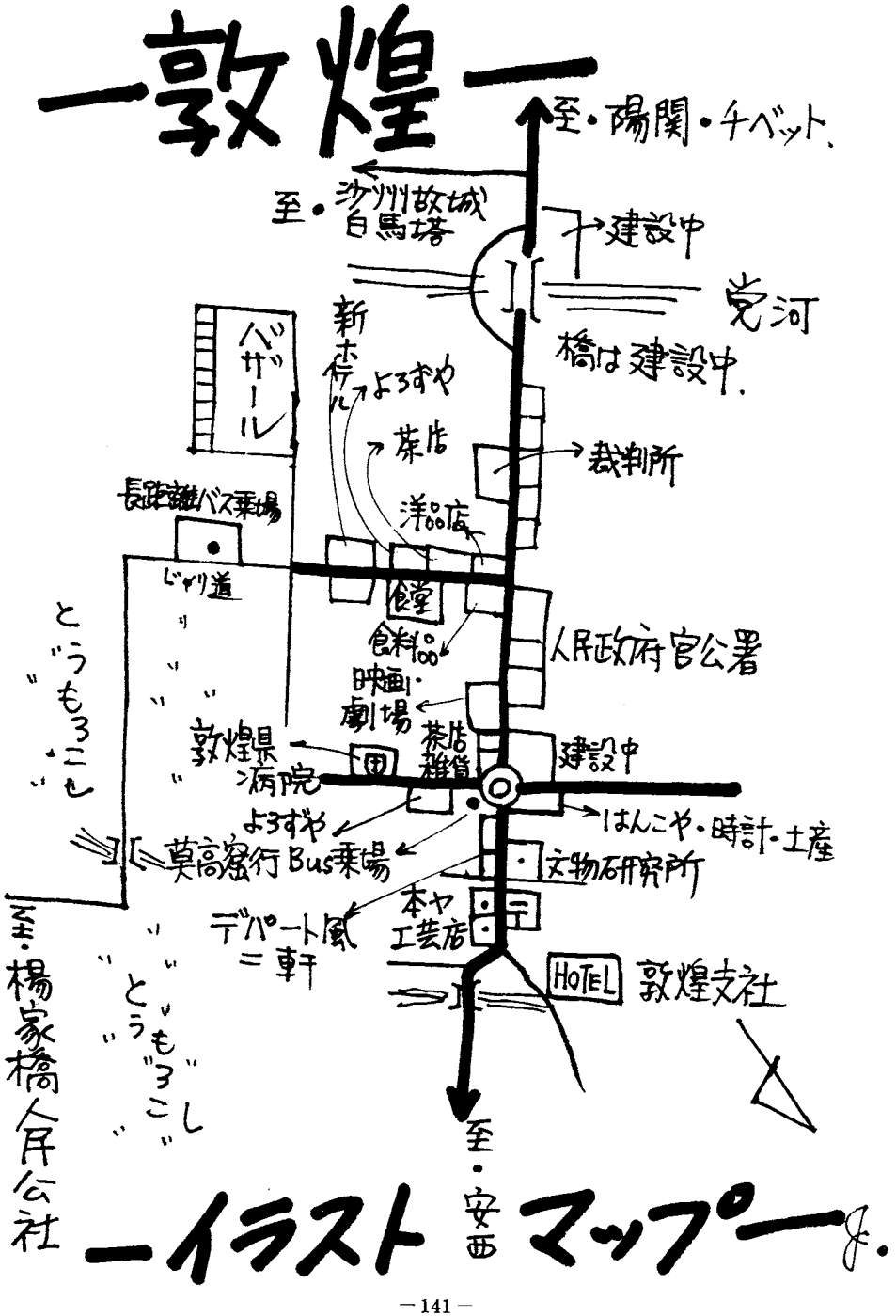
列車内泊

六時に起き、朝最後の団配をすませ、敦煌賓館で朝食をとる。六日間も宿泊し、使わせていただいた楊家橋人民公社の講堂、前庭などをきれいに掃除し、水をうつ。自転車は蘭州まで持って行くそうで、トラックに積まれる。我々は、安西まで四台の車に分乗することになる。公社で記念撮影。御世話になった公社の方々に御礼し、出発。一路安西へと、我々が走って来た安敦公路を車は走る。見覚えのある景色。あの山、あの故城と思っているうちに安西到着。安西招待所で昼食。

ここまでの道中、トラックに積んでおいた土屋副隊長の自転車見当らない。どこかに落したようだ。あのスピードだから無理もない。すでにトラックにひろわれて、「チベット、青海に持っていかれた」と中国人は口々に言う。あきらめるより仕方がない。

安西で、医師や料理人と別れる。いろいろと御迷惑をおかけいたしまして申し訳ありませんでした。

敦煌


至・陽関・チベット
至・沙州故城
白馬塔
建設中
党河
橋は建設中
バザール
新店
よろずや
茶店
裁判所
長距離バス乗場
洋品店
じゃり道
食堂
食料品
人民政府官公署
映画・劇場
とうもろこし
敦煌県病院
茶店
雑貨
建設中
よろずや
はんこや・時計・土産
莫高窟行Bus乗場
文物研究所
デパート風三軒
本や
工芸店
HOTEL
敦煌支社
とうもろこし
至・楊家橋人民公社
至・安西

イラストマップ

再見

柳園までの道は、悪路で、自転車ではとても困難なようだ。柳園という町は、本当に砂漠の中にぽつんとあるという感じ。木が一本もない。水も少ないのだろうか。柳園駅で、ここまで来てくださった、余さん、中学の先生と握手を交わす。余さんは、通訳として酒泉支社にいるが、実は現役の武漢大学の学生である。この人には、いろいろと中国人気質、学生気質を教えてもらった。

今日はどんどん中国人と別れ、結局、気がつくと、劉さん、谷さん、李さんの三人が、来る時と同じ様に、我々のそばにいた。張さんはまだ、土屋さんの自転車を捜して、安敦公路を行ったり来たりしているという。ろくろく、御礼もせずに別れてきたのが悔まれる。

蘭州まで二十六時間の列車の旅。

八月十八日　曇時々雨　蘭州着　蘭州飯店泊

相変らずの列車の旅

十七時十一分蘭州着。夕食を兼ねて、蘭州分社の招きで宴会が開かれる。分社経理の谷さん（谷さんの父親）庸さん、通訳の女性方梅蘭さんも加わる。そこでいろいろと、今回の中国合宿を受け入れるまでのいきさつを伺う。我々の計画を聞いた時、日程が長いし、部員の健康が一番の心配だったという。劉さんも言っていた様に、このような活動を受け入れるのはこれが最初で最後になるかも知れない。中国側の準備も大変だったことだろう。あらためて心から感謝する。日本から持ってきた土産を贈ったかわりに、「日本早稲田大学自行車遠征隊、蘭州〜酒泉〜敦煌」とネームの入ったグリーンのシャツとバッグをいただく。酒泉支社からいただいた帽子、各地でいただいたバッヂと伴に、金では買えない素晴しい土産である。

夜、淳が在日本部の手島ＯＢへ電話。予定通り二十一日帰国の旨連絡する。

神沢先生、青木隊長、土屋、川相副隊長、Ｌ佳一が、新華社のインタビューを受ける。

岡が四二度の熱を出す。異常な高さなので、原、李さん、谷さんに付き添ってもらい病院へつれてゆく。緊張がほぐれたのだろう。明日まで熱が下ればいいが。神沢先生が心配され、岡が病院から戻るまで起きておられ、恐縮する。風と腸炎を併発したらしい。

八月十九日　雨後曇　蘭州ー飛ー上海　宝山賓館泊

岡はどうやら下熱。ほっとする。

蘭州で、李さんと、とうとう別れなければならない。

皆から「お父さん」として親しまれていた。

蘭州空港で十四時二〇分から十七時一〇分まで、雨のためフライトできず待機。日本人観光団もいる。

西安を経由して上海に着いたのが二十二時。観光シーズンのため、宿舎が見つからず、上海分社の崔さんと程さんに苦労して宝山賓館を見つけてもらう。宿舎に着いたのが二十三時四〇分。二十四時、遅い夕食。さすがにグッタリ来る。

八月二〇日　上海　静安賓館泊

宝山は工業の町、この宝山賓館にも、日本人商社マン、技術者が多勢いる。宝山から、上海市内へバスで移動。静安賓館へ移る。

上海分社の案内で上海友誼商店へ。中国の名産、特産がずらりと品を揃え、外国人が多勢買物をしている。

途中、大家が腹痛を訴える。原をつけて、谷さんと一諸に病院へ連れていってもらう。明日は日本だというのに、ここで倒れられたら元も子もない。全員に節制をうながす。

結局、土屋副隊長の自転車は見つからぬとの事で、劉さんが弁償金を払うという。そんな事までしてもらっては困るというが、頑として受付けず、これは我々の責任

八月二十一日に日本に帰国した。一ケ月ぶりに日本人女性と対面したとき、スタイルの悪さに、驚きと同時に失望、また醜いとも感じさせられるほどであった。そして中国人女性のスタイルのよさを想い出し改めて感激をおぼえた。これは、日本と中国の食料事情の違いからくるものだろうが、実際、中国人女性は、美しい足をしていた。そのほかに中国人女性には、素朴な美しさがあった。日本人の化粧のうまさは否定できない、それだけ日本人女性は自分を奇麗にみせるのがうまいが、それは、女性の虚栄心ではないか。その点、まだ化粧をあまりよく知らない中国人女性には、すなおな純粋さがあったのではないだろか、帰国した時、山から都会にもどったときのような気持ちになった。別に中国の文化が遅れているのではない。中国には、そのままの自然が残っており、中国人女性は、自然であったのである。またそこには、ワンダーフォーゲルが求めるものがあったのではないだろうか。

新人　大家敏広

だという。
夜、最後の部員ミーティング。下級生の労をねぎらう。日本の土を踏むまで気を抜かぬよう注意する。

八月二十一日　曇　上海ー東京

大家も回復し、なんとか全員揃って帰国できる。
フライトの時間まで、バスで動物園に行く。流石に今まで、西にいた我々にとっては上海はむし暑い。
十三時四〇分、パンナム北京発、ロサンゼルス行に乗るべく上海空港にて手続き。帰りの税関も無事にパス。
いよいよ中国とも再見しなければならない。劉さんと谷さん。本当に御世話になりました。皆で握手をして、本当に別れ難いが最後の　"再見"
「また来て下さい」と劉さんが言う。さようなら中国
成田には、手島OB、石館OB、太田さん夫妻、INO企画の石川さん、それに神沢先生や、青木隊長、土屋隊長の御家族が出迎えに来て下さる。円陣の中で神沢先生、手島OBに最後をしめていただき、記念撮影をして、ここで解散とする。御苦労さん。

中国合宿総括

主将　佐藤　佳一

先ず海外合宿を行うにあたって中国を選んだ訳であるが、中国の国清をよく把握できないまま極端な情報不足の状態で、計画を進めた。そして、何としても実現させようという気持ちが先走ってしまった。予めある程度、予測されていたが、現状の中国で自由なワンゲル活動を行うことは困難である。その観点から見ると今回のように中国の人達との混合隊で行う場合なおさらのことである。
次に、交渉に手間どり準備が遅れた事があげられる。中国の国柄、現状からある程度止むを得ないとしても、本格的な準備は、わずか四ヶ月足らずという短期間であわただしく行うことになり、万全な準備ができなかった。そのため現地に行ってから交渉を必要とする事が多かった。
中国国内に於ては、特に大きなトラブルもなく、中国の人達と友好を深めながら、無事計画を遂行できたことは評価できると思う。確かに中国側が主体となって、我々の自主的な運営ができない面があったが、中国の現状

から考えると最大限に受け入れてもらったのではないだろうか。十七名の中国の人達が同行してくれたことにより貴重な体験ができたのも事実であり、大きな収穫であった。

この合宿に付随する問題としては、年間方針として、後代のことを考え、国内の平常合宿をある程度縮少、軽減させながらも行ってきた。これが部員の負担増になったのは事実であり、反面技術の低下も見逃せない。それを補うべきワンダリングは皆無に等しい。

このことは今後の問題として、真剣にとり組まなければなるまい。

資金計画は非常に甘いものであった。個人負担金が四〇万円以上というのはかかり過ぎであった。

四月に入ったばかりの新人を連れていくことは体力的・精神的に不安があり、資金負担が多くかかるということで、一つの大きな問題となった。新人にとって貴重な経験となったことは確かであるが、やはり入部して三ケ月の新人は連れていってもらうという気持ちが強く、自覚が足りないのは止むを得ない。今回の合宿ではよく頑張ってくれたと思う。実技のこともあり、今後夏に海外合宿を行うことは一考を要する。

いずれにしても一つの大きな合宿を行う場合、平常活動への影響、ある程度の犠牲を伴うことは確かであり、それをいかにフォローするかが問題であろう。

今回の中国合宿はワンゲンの既成合宿から見ると問題の多い合宿であったかもしれない。しかしそれをみなで団結して行い、所期の目標を無事遂行できたことは成功したと言えよう。

今後この合宿が部にとって、個人にとって、どう位置づけられ反映されていくかが問題である。この経験をプラスに生かさなければならない。

海外へ出る場合、部員の大変な労力、負担は避けられない。それだけに、それだからこそ、メリットも大きなものがある。

海外合宿が今後いつ、どのような形で行われようとも国内活動との兼ね合いを考えて、慎重にとり組み、周到な準備が必要である。

今後、国内外を問わず、創造性豊かな活動を期待したい。

在日本部記録

手島　広

遠征日程が夏休み期間中なので、在日本部窓口をOBの都合を案分し、期間を夫る定め分担して開設するとの案もあったが、連絡の上で混乱を招くおそれがありとし、、私が一貫して窓口を務める事とした。

在日本部スタッフ

2代　手島　広
10代　石館　昌二
27代　新谷　博

連絡網（前掲参照）

連絡記録

一九八一　七・二十一　本隊出発　在日本部窓口開設
七・二十四　蘭州より電話、全員無事行動追加装備調達依頼あり、後発隊土屋猛に連絡
七・二十九　関係先に無事行動中を報告。明日より自転車行動開始の旨（酒泉発）

電　報

八・五　神沢団長・土屋副隊長と合流す。（安西発）
八・十五　行動無事終了　（敦煌発）
八・一八　蘭州より電話、全員無事予定通り帰国

（後　記）

遠征隊行動期間中、日夜行動日程表をにらみながら唯只管全員無事を祈る日々であった。万が一の際、直ちに現地に飛ぶべく、心づもり、金づもり、気の小さい私としては、首をすくめた一ケ月で、この様な事なら遠征に加わって方が楽だったかなとも考える。成田で全員の顔を見て大安心。一九八一年夏は長く暑かった。

寄稿文

日本の皆さんへ

日本の早稲田大学ワンダーフォーゲル部自転車遠征隊の皆様より私に対して、この特集（報告書）に寄稿の御依頼がありました。私はここに、この機会を利用し、広範な日本人民、青年諸氏、並びに、早稲田大学の全教職員、学生の皆様に対し御あいさつ申し上げます。

昨年七月から八月にかけて、新日本国際株式会社と甘粛省旅遊局の共同手配による早稲田大学ワンダーフォーゲル部自転車遠征隊の一行二十三名の皆様が、団長神惣一郎先生、隊長青木稔氏の統率のもと、初めて自転車でシルクロードの甘粛省地域（河西回廊）を旅行なされました。二〇日余の実行動中、皆様は中国の同行者と一諸に自然環境並びに、天候の変化に伴う種々の困難を克服され、灼熱、風雨をものともせず、砂漠を横切り、野営をし、酒泉、嘉峪関、玉門市、玉門鎮、双塔、安西、敦煌等の市、県、七〇〇Km余を走破されました。皆様が示された強じんな不屈の精神は、神話の中に出てくる〝神鳥〟の様に美しく、大海を越え、ゴビタンを越えて中日友好の精神と不断の努力を伝えてこられました。これは中国人民、中国青年の賛美するところであります。

私たちは中日両国人民、並びに両国青年の友好が長く長く続くことを心より祈っております。

また心より早稲田大学の御発展をお祈り申し上げております。

願わくは、より多くの日本の友人が、中国甘粛省に訪ねられんことを。

甘粛省人民政府外事弁公室付主任　谷　慶　春

一九八二年二月十六日

（全文和訳させて頂きました。新日本国際株式会社　川上氏訳）

旅の印象

甘粛省旅遊局業務処科長　　劉大庸

I am very glad to accompany with your group for month's tour and much appreciate the sprit of your club.

I do hope China-Japanfriend-ship will be developed strengthened by our common effort. Be ever green the friendship between our two countries' people as well as the youth.

16 Aug. 1981

酒泉中学教師　　李守奎

能同日本青年朋友是我国古絲綢之路　与寄自行車遠征本人感到非常高興、是返私達中短短的二十一天中日本青年勇干克服困難、的精神給我乃留下乃張深印象、願中日青年朋友携　手来把青春貢献給世界人民的和平我幸福事業！

願日中両国人民友誼世代永存！　　八月十四日

中国国際旅行社酒泉支社科長　　張思平

贈日本青年朋友

祁連山下相会
名城敦煌喜別
渇望鳴雁頻飛
中日友好常青

八月十七日

甘粛省旅遊局業務処　　李悦

日本早稲田大学自行車遠征隊、在中国的蘭州—酒泉—敦煌的絲綢之路上、騎自行車旅行已勝利結束。你們遠紳不難困難、堅若奮科的精神。値得成功学習

祝中日友好万古長青　　八月十六日

酒泉体育委員会　体育教師　　張德功

解同早稲田大学学生隊自行車遠征我国絲綢之路酒泉～敦煌非常高興、也是我一生中銀有志義的一次活動。願通遠征堅有意義的活動進一歩加深我們両国的友宜。

願中日友好友宜万古長青！　　八月十六日

中国国際旅行社蘭州分社通訳　　谷杰

私は旅行社につとめているから、日本人と一緒に生活のきかい於たくさんあります。けれども、若い者と一緒

に生活のきかい於すくないです。
こんどの旅を通じて、たくさん勉強させていただきました。どうもありがとうございます。　八月十六日

中国国際旅行社酒泉支社通訳　余良遷

こんど日本早稲田大学ワンダーフォーゲル部の自転車のみなさまと同行できて、たいへんたのしいことでありまた生涯忘れられないことでもあります。こんどの旅を通して各方面で日本のわかものからいろんなものを学びとった。そして、わたし自身の日本語の勉強にやくにたちました。いままで私は日本の観光団と接触したことがあります。しかし、このような活動の代表団を招いたことがありません。ですから私は日本のみなさまとおなじようにこのうえないよろこびがあります。
目下中日両国の人民、とくにわかものあいだに友好往来の歴史をもっています。将来必ず順調に発展していくと信じております。中日両国の青年も手に手を取って中日両国人民の友好をいつまでも発展させるために、奮闘するようお願いいたします。

中日両国青年的友誼　万古長青！
中日両国人民的友誼万歳　高志才　八月十七日

酒泉地区医院医師
願中日友誼永世長存　李峰　八月十六日

酒泉中学体育教師
中日青年友好万歳！　龔智志

酒泉中学化学教師
学　神与精神架中日友誼橋梁　高冠威

甘粛画報カメラマン

鑑　真　精　神

中国国際旅行社酒泉支社運転手
中日両国青年情深意長　李玉杰

酒泉地区医院
WVC的精神永伝輩世　田君才

中国国際旅行社酒泉支社コック　常占元
中日両国人民要世世代代子子孫孫友　下去

願中国友好永垂長青

中国国際旅行社酒泉支社運転手　周志漠
盛夏之日絲綢路神鳥精神記憶深

甘粛省旅遊局局長　谷慶春
祝君愉快

甘粛省旅遊局蘭州分社
祝賀君今度自行車旅行完満成功　楊達山

（注）　原文を忠実に転記しましたが、一部正確を欠く部分があるかもしれません。その点御了承下さい。

中国合宿報告書に寄せて

新日本国際株式会社　長谷部　友　樹

今回の遠征隊が実現されるまでには、当然のことながら幾多の曲折があった。その一部を負って中国側との交渉窓口を務めた立場から、簡単な経緯を記しておきたい。

交渉過程は大きく三段階に分かれると思う。第一段階は私とワンゲル部諸君との初めての出会いから計画の概要が成るまで。第二段階は、中国国際旅行社蘭州分社との接触。第三段階は、計画の内容が最終的に決定となった過程。以上第三段階を順を追って記録してみる。

第一段階、私と当時二年生であった佐藤佳一君他数名の諸君との初めての会合は、一九八〇年一月早稲田で持たれた。この時の学生諸君の意向は、西安―カシュガルを結ぶ四〇〇〇Kmのシルクロードを二隊に分けて、自転車で走破するという破格のものであった。さらに計画では、中国側として受け入れ未経験の、しかしワンゲル活動としては基本である、天幕・自炊生活という方法が入ってもいた。その時私は、西安―カシュガルのルートはほぼ不可能と見、天幕・自炊・自転車の要件は、交渉の余地有りと予見した。ルートが不可能というのは、ウル

ムチーカシュガル間が基本的に外国人の旅行を禁止している地域であったからである。しかし、NHKのシルクロード取材班の他、数名の日本人が特別に入っていたこともあったので、学生諸君には各方面へ、可能性を打診してもらうことにした。学生諸君はこの時期、第一次計画案を作成して精力的に、各方面に参考意見を求めたが、最終的にウルムチーカシュガル間、及び、西安—蘭州間をルートからはずし、蘭州—安西（敦煌）のルートをもって、第二次計画案を作成するに到った。

この第二次計画案が作成できた頃、折良く、我社が蘭州分社の経理、谷慶春氏他数名のスタッフを日本に紹待することがあり、この機会をとらえて、ワンゲル部に谷氏を紹介した。ワンゲル部は非公式に、第二次計画案の受け入れ要請を、直接谷氏に行った。これがその年の七月であった。計画の受け入れを中国側のどこに依頼するかは、基本的で大きな課題であった。当時考えられたのは、中国体育総会、中日友好協会、中国国際旅行社総社、そして中国国際旅行社蘭州分社であった。私の方は、過去の経験から、蘭州分社一本に可能性を見ていたが、他の三ケ所も可能性はあったので、学生諸君は、それらと接触を求めるべく、日本側の各種団体、或は個人を訪ねて、交渉の依頼を行った。この状態は数ケ月続いたものの、結果は思わしくなく、次第に蘭州分社に可能性を見出す方向へ向かわざるをえなくなっていった。というのは、谷氏と会見した際、谷氏の意見は、計画の趣旨については賛同するものの、受け入れ体制作りに若干の課題が残るので、帰国後、検討した上で返事をする。というものであったからである。この時は谷氏からの要請で、遠征隊の人数・自転車の走行性能・必要とする飲料水・ガソリンの量・自炊道具の祥能、等の資料を渡した。

秋に入って、蘭州分社より、計画の検討を蘭州市体育委員会に委ねた、という連絡が入ったものの、正式の結論は出ず、交渉は進展を見なかった。

十二月に入ってようやく、蘭州分社より連絡が入ったが、その内容は、手配不可能という極めて単純明解なものであった。この連絡が入った時、しかし私は仕事で上海に行っており、幸運にも、やはり上海へ出張に来ていた蘭州分社対外連絡課の劉大庸氏と邂逅していた。私は口頭で劉氏から、手配不可能の件を聞かされた。その時落胆はしたものの、すぐその場で、代替案の可能性をめぐって劉氏とやりとりをし、計画から蘭州—酒泉間を省けるなら、手配はできるという考えを聞いた。蘭州分社側で検討に時間がかかったのも、蘭州—酒泉間の、公的には未開放とされている場所をめぐって、関係当局と交

渉があった為と想像される。一度は落胆したものの、又ほのかな可能性を見出し、私は帰国するとすぐに、ワンゲル部に、この代替案の検討に入ってもらった。ワンゲル部は、この代替案を持って、予定されていた冬合宿に入り、全員で意見を出しあって、最終的に、同意の結論に達したのである。年明けて一月早々、この同意の旨を蘭州分社へ連絡すると、しばらくして、蘭州分社より、コース日程表と先遣隊派遣要請が届いた。ここにようやく、計画の概要がまとまり始めたのであった。もう一息であった。ワンゲル部では、計画の詳細について、資料をまとめる作業に入り、この資料を持って、四月、佐藤主将が、我社の社長と、蘭州市へ交渉におもむいた。この交渉で、計画の概要、詳細面について、基本的に合意に達し、協議書を交すことによって、一年余り続いた交渉は、結論を得ることとなった。残るは出発準備の作業ばかりとなった。

交渉経過は大略以上の如くだが、ふり返ってみると、今回の計画は幾つかの幸運に恵まれていたと、改めて思わざるを得ない。その幸運の第一は、中国の旅行行政の変化である。

中国の対外旅行事業は、国務院の管轄下にある中国国際旅行社が行っている。この政府機関は、日本企業の本社に担当する「総社」を北京におき、各省都・主だった市に「分社・支社」をおいている。総社の仕事は、旅行コースの立案・対外業務連絡・旅行ＶＩＳＡの発給・各分社支社への指示連絡等を行い、分社・支社は、総社の指示に基づいて、外国人旅行客の地元での受け入れ手配を行っている。このシステムが、一九八〇年春から変わり、総社が行っていた上記の業務を各分社にも委任し、地方の独自性・責極性を引き出して、旅行事業を大いに発展させようということになった。ワンゲル部の遠征計画は、実にこうした中国側の行政変化と重って進行していったのである。それが為に、今回の計画のような、中国側にとっては前代未聞の旅行形態も、結果的に受け入れ可能となったのであり、又、谷氏が来日するという機会も生じたのであった。

この行政変化はしかし長く続かず、遠征隊が帰国して間もなく、すなわち一九八一年九月になって、再び旧態に復してしまった。分社の熱心さが災いして、観光旅行の次元で各地に混乱が相次ぎ、総社の強力な指導性が改めて必要となったが為の、再びの変化であった。今後、同じような計画が出ても、中国側の受け入れは、はるかに困難なものになってしまったのである。早大ワンゲル部は、いわば夢のように、つかの間の雲の切れ目をつい

て、はるかシルクロードを駆けてきたと言えるのである。

数えるべき幸運としては他に、谷氏のタイミング良い来日、私の上海での劉氏との邂逅をあげたい。谷氏の来日は、受け入れ窓口の確定につながったし、劉氏との邂逅がなければ、単純明解な手紙一本で、計画は断念することとなっていたに違いない。後者は全くの偶然で、まさに幸運であったが、前者、谷氏の日本への紹待は、我社の判断が導き出した幸運として、得点に加えられるのではないかと思う。

最後に感想を2・3述べておきたい。出発準備の一つとして、学生諸君の要請から、中国語講座?を開くことがあった。六月から週二度計十回にわたる、私にとっては冷汗かき通しの、しかし楽しい一時であった。現地へ行って恐らく使わざるをえないだろう会話をテキストから拾い出し、発音に重点を置いて、私が復習させてもらった。又中国語の歌を六曲ばかり、これも現地へ行って、大いに日本の大学生の意気を見せようと、しかし私は歌はダメなので、同僚の加藤武司に応援を求めて、練習を積んだ。これらの成果が現地でどのように役立ったか、私は知るよしもないが（知らぬが仏と決めこんでもいるが）、少くとも学生諸君の熱心には敬服させられた。ほぼ毎回、授業・トレーニングの後での、夕刻六・〇〇から二時間の勉強会であったにもかかわらず、熱意は終始おとろえることがなかった。この熱心さ、若さに、私はむしろささえられて、中国語ばかりでなく、交渉過程の全てに、たずさわれたと言える。

学生諸君へ私に期待がある。今回の計画は学生諸君にとって、非常に大きな仕事であったと思う。イメージの次元から始まって、その肉付け、変更への対応、計画概要の確定から実行・総括へと、この全過程に関わった体験は測りがたい価値をもつものと思う。学生時代に、この大仕事を為した体験を、腹の中で克く熟して、きっと未来の自分に役立つよう努力して欲しい。期待もう一つ。中国を垣間見てきた行きがかり上、今後の中国がどのように変化していくにしても、中国に対して関心を払い続けていって欲しい。

未知への挑戦の重み

毎日新聞論説顧問　杉　山　克　己

何よりもまず、早稲田大学ワンダーフォーゲル部の「中国合宿」の成功に、心から拍手を送りたい。随分前のことになるが、最初に主将の佐藤佳一君等から「中国大陸を自転車で走ってみたい」と相談を持ちかけられた時は、正直言って雲を摑むような話に思われた。

だいいち、中国へグループで渡ること自体、それほど容易な状況ではなかった。それに計画の舞台はシルクロードの河西回廊だという。遙か彼方の荒涼たる砂漠地帯であり、情報がどこまで入手できるかもわからなかったからである。

かって私は、京都大学探険部の南スーダン学術踏査隊派遣の際に、あれこれ助言などをしたことがあった。その時も永年、諸外国に門戸を閉ざしていた地域であり、入国は認められたものの、計画の実現にはかなり困難が伴なった。

無論、その時と今回とは事情も違っており、到底同列に考えることはできなかったが、当初は受け入れについて中国側の意向もはっきりしておらず、あらゆるルートを通じて打診し了解を取りつけることから話をつめなければならなかった。さらに入国がＯＫになったとしても総勢四、五〇人という大部隊である。

現地の状況を的確にとらえ、それへの対応を検討しておくことも、無論欠かせないところだった。砂漠の海をサイクリングで突っ走るとなると、厳しいさまざまな条件にさらされることは目に見えている。不慣れな土地での事故が起きた場合なども考え合わせると、壮挙には違いないが、気の重くなるようなことばかりだった。

何回となく部のリーダー諸君と話し合い、計画がある程度、具体化に向って進み出した段階でも、若い学生諸君だけではたして、どこまでやるだろうかという危惧は残っていた。

しかし私のそうした不安とは別に昨年、早々に中国側から明るい返事がもたらされて、計画推進にはずみがついた。でもいざ出かけるとなると資金や資材をどうするかという問題から初参加の新人の訓練まで、実に多事多端というほかはなかった。それを学生諸君は持ち前の行動力で周到にさばいていった。

過去のインド合宿のさまざまな体験が、今回の合宿計画に大いに役立ったであろうし、また監督の青木稔さんやＯＢの方々の意見や指示があったからこそ、手抜かり

なく事を進めることができたと思うが、主将やマネージャーを中心にした学生諸君の地道な努力は見逃せない。ともかく七月二十一日出発という時点に照準を合わせ、次々に計画実現へのハードルを乗り超えていったのは、さすがであった。

「中国合宿」は約一カ月に及ぶ長期のものだった。慣れない異境でのサイクリング旅行で、ほぼ全員が体調を崩すという苦しい時期もあったようだ。また砂漠地帯の中で、激しい風雨に見舞われ、洪水から逃がれるために一時バスで避難する事態も持ち上ったという。いくら計画を綿密に練り上げていても、こうしたハプニングは合宿等にはつきものだが、それにしても全員が無事故で約六百キロにわたる走破を終えることができたことは、当初からこの計画にかかわった一人として、喜びにたえない。この実績は、何ものにも優るすばらしい記録といえよう。

また、この合宿を成功に導いた背景に、カゲの力として中国側の並々ならぬ協力があったことも、忘れられないところだ。医師や中学の教師らの積極的なる合宿参加は無論のことだが、サイクリング・コースの酒泉から敦煌にかけて、行く先々で地元の住民や大学生等と、熱烈歓迎の交流の機会に恵まれたことなど、すべて大きな心の支えになったことであろう。

ともかく数々の得がたい体験のうえに計画が完璧な形で実現できたことは極めてラッキーでもあったが、見事というほかはない。今回の「中国合宿」は、またそれだけの深い意味を持っている。とくに注目されるのは、誰もやらなかったことを実現させたということであろう。何ごとも先鞭をつけるということは予想以上の苦難を伴なう。一つ間違うと大変な結果を招くものだ。それだけに慎重を要したことは言うまでもない。

いずれにせよ、このような計画の実行は、未開拓な世界への挑戦であり、先頭に立った諸君には、人知れず苦労も多かったことであろうが、リーダーを主軸としたチームワークがあってはじめて実現できたものと思う。

今回の合宿が部の歴史に新たな一ページを書き加えたことは言うまでもない。また参加した学生諸君自身にとっても、それぞれの生き方にはかり知れない自信と力を与えたことと思うが、この貴重な体験をどこまでも大切にし将来に備えてもらいたい。

（一九八二年　一月　記）

神鳥徒歩旅行讃歌

早稲田大学文学部教授　長　沢　和　俊

ワンゲル部主将の佐藤佳一君が、はじめて私の所へ姿を現わしたのは、昭和五五年六月十三日のことであった。彼は青年特有の真摯な表情で、

「先生、来年の夏、早稲田大学百周年とワンゲル部の創部三〇周年を記念して、シルクロード、それも蘭州から敦煌まで自転車で旅行したいのですがどうでしょうか？」

と言った。瞬間、私の悩裏には、佐藤君の顔とダブっていまから二〇数年前、はじめてヒマヤラに遠征したいと考えて、あちこち歩き廻った頃の自分が浮び上った。それにしても中国へ、しかも国内を自転車旅行することなど果して出来るだろうか。彼らはすでにＮＨＫのシルクロード室にも行って、「なかなか実現は難しいぞ」とおどかされて帰って来たのだった。

周知の通り、一般にいまの中国では、予定された旅行コースを、国内いくつかの友好旅行社の添乗員付きでなければ旅行できない。まして中国の西北辺境を線で結ぶような徒歩旅行など、とうてい許されそうもない。ただ幸いなことに、最近は地方の中国旅行支社の力が強くなり、各地の支社のＯＫさえとれれば、そうとう特殊な旅行も出来る可能性が出てきた。

そこで私は、まず国内の旅行社を決め、そこを窓口として、中国旅行社の蘭州支社と連絡をとること。次に蘭州大学と連絡をとり、できれば一緒に旅行するよう話合うこと。蘭州支社の許可さえ取れれば、この旅行は実施の可能性があることなどを話した。しかし私は過去何回かの中国旅行の体験から、万に一つもこの夢のような話が実現するとは、少しも思っていなかった。おそらく佐藤君もあちこち歩き廻って、結局「ノー、ノー」の連続で、ついには挫折してしまうだろうと思っていた。

ところが佐藤君は、物凄い努力で少しずつこうした障害を乗越えていった。まったく若い情熱というものは恐いものだ。それは不可能を可能にする力をもっている。恐らく窓口の新日本国際旅行の斡旋であろうが、同年七月には中国国際旅行社蘭州分社の訪日団の人々と会い、早速交渉して検討を依頼した。そして同年十二月蘭州分社から蘭州～敦煌間のうち、蘭州～酒泉間は外国人に未開放のため承認できないという返事が来た。

普通だとこの辺で「ああ、やっぱりダメか・・」と諦める所だ。しかし佐藤君は部員と相談してただちに修正

案を作り、昭和五十六年一月に修正案を送り、同年三月、待ちに待ったOKの返事をもらった。

ここですばらしいのは、彼等の実行力である。その後も一度佐藤君と会う機会があり、

「とにかくそんな話はなかなかラチがあかないから、細かい点は直接蘭州へ行って決めてきてはどうか」

というと、彼は早速蘭州へ飛び、一切の打合せを済ませてきたのである。

こうして許可はとったものの、いざ決行ということになると、それから先のワンゲル部諸君の苦労も一方ならぬものがあったに違いない。資金の収集、細かい実行表の作製、実際の訓練等に・・・昭和五十六年六月十日付の毎日新聞千葉版には、シルクロードツアーの訓練に、ワンゲル部が市川市から放置自転車二十台を借りたとの記事が出ているが、これも資金不足のため、やっと思いついたアイデアの一つだったのであろう。実際、海外遠征を一回やれば、その中心にたって苦労した人は、もうその後の人生に何一つ苦労を感じないほど、さまざまな苦難を体験するものだ。苦労が多ければ多いほど、成功の喜びも大きいし、その後の人生に役立つのだ。

およそ事業は軌道に乗ってしまえば、あとは時の流れである。昭和五十六年七月二十一日、成田を出発した一行は、上海から蘭州へ行き、同三十日酒泉発、八月七日敦煌着、約一週間を敦煌で過したという。シルクロード・マニアにとって全く羨しい限りである。帰途は柳園から蘭州に汽車に出て、八月二十一日上海経由全員無事の帰国をした。

ふり返ってみると、彼らは実にすばらしい体験をした。彼らは不可能を可能にし、文字通り日中友好を実施し、現地の人々にも大きな感銘を与えたに違いない。実際に若い彼らは中国の現地をペダルを踏んで歩いてみて、新生中国のすばらしさ、日本と比較して近代化のスローテンポさも、じっくり味わったに違いない。それはまさにいかにも早稲田大学のワンゲル部にふさわしい快挙であり、早稲田の学生らしさを満喫した旅だったであろう。

私はワンゲル部の内情も知らないが、恐らく今回の快挙にも、部長さん始め多くの先輩の協力によって成功したものと思う。しかしこの至難の企画の原動力となって、意志と若さでこれを実現した佐藤君の努力は、私自身何回も会っているので、もっともよく知っているつもりである。彼は旅が終ってまもなく次のように感想を書送ってきた。

「計画を立案した当初は、どこから手をつけていいのか、どこに交渉していいのか分らず、暗中模索の状態

でしたが、熱意をもってあきらめずやっていけば、何とかいけるのではないかという信念を持ってやっていたのがよかったのだと思います。途中うまく進まず、何度止めようかと考えたか分りません。忙しくて大変な思いもしましたが、大変貴重な体験ができました。この計画が実現できたのも、多くの方々の協力があったからだと思います。それらの方々に感謝しています。」

彼は率直に自分の気持を綴ったのであろうが、これほど大きな仕事をしながら、このように謙虚な心情の吐露も、なかなか得難いと思う。聞く所によると佐藤君は、まもなく卒業して社会に出るという。君は社会に出ても今回の快挙を忘れず、そこで得たさまざまな教訓を生かして、よりよい人生を築くとともに、ワングル部の後輩を暖かく育成してほしい。また佐藤君とともに今回の快挙を成功させた部員諸君も、今回のことだけに満足せず、今後も次々に大計画を立てて成功して頂きたい。ワングル部の今後の発展を心から祈りつつ止筆する次第である。

あの感激を大切に

社団法人日中協会事務局長
白　西　紳一郎

「シルクロードで銀輪を走らせたい」と、早稲田大学ワンダーフォーゲル部の学生の皆さんが、協会の事務所にみえたときには、正直言って驚いた。実は、私は四年前、同じコースを中国の〝北京号〟〝シープで走ったのだが、その時、快晴の朝、雪をかぶる祁連山脈を左にみながら酒泉をたったのもつかの間、嘉峪関見物をすませて玉門に向かうころには、暗雲ただならぬ風情となり、風も強まり、気温も急速に下がり、人を寄せつけぬゴビ灘の気象変化を体験していたこともあったからである。

しかし、学生諸氏の、未知の河西回廊だが、自転車を使って自己の労力のみで移動し、天幕で暮らし、現地の産物を料理して生活し、自分自身も人間的に高めていきたい、そしてそのことによって両国の相互理解を深め、友好増進に役立ちたいと「シルクロード行」の趣旨を熱っぽく語られるにおよんで、私は中国の関係方面への実現働きかけ協力をお引き受けした次第であった。

一行二十三名の早稲田隊は、中国側のあたたかい心の

こもったもてなしを受けて、無事所期の目的を達した。聞くところによれば、中国人のコック、医師まで随行してくれたという。広大な中国の大陸と人なつこい中国の民衆が、学生たちに与えた影響と感動は計り知れないものがあるにちがいない。社会に旅立ったのちもその感激を大切にしてほしいと思う。中国合宿の成果は、それに関わった者すべての海と陸をこえた共通の財産であるはずだからだ。

今回の「シルクロード行」には、協会顧問で早稲田大学の大先輩である河野謙三・前参議院議長（日本体育協会会長）の大変なお力添えをいただいた。同秘書の今井武志氏の適切な御助言も受けた。ここに記して御礼と致したい。

感想文

雑記

副隊長　川相智史

ふたつの事を記しておく。ひとつは、よかれあしかれ今度の中国合宿を象徴する出来事であり、またひとつは最も印象に残った光景である。

1

闇のなか、ヘッド・ライトが雨を浮び上がらせていた。石ころだらけのゴビをバスは車体を軋ませながら、縦に揺れ、横に揺れ、思うように進まなかった。くぼみにかかるたびにガラス窓は大きな音をたて、われわれの体も大きくはね上がらせた。そんなバスの奮闘とは対照的にわれわれは妙に黙りこくり、窓のすき間から侵入してくる寒気に身をこごめていた。

夕食後、テントの中でくつろいでいたわれわれに洪水警報がもたらされた。そして、この思いもよらない移動となったのである。時間はすでに十時近い。自転車で走り始めて五日目。前日あたりから病人も出はじめ、皆も疲れているのだろうか、この揺れにもかかわらず、寝息をたてているものがいる。

突然、フロントガラスに亀裂が入った――しかし、その時、われわれの何人がそのことに気づいただろうか。亀裂は震動とともに広がり、今にも大きな音をたてて崩れるのではないかと思われた。老運転手はまるで関心をはらわないかのように、無言のままで懸命にハンドルを操っていた。助手席の青年がガラスを手でおさえたのだが、それも長く続かなかった。彼はガラスをはずしてしまった。同時に、雨まじりの冷たい風が吹き込んできて、寒気は一段とするどくわれわれの頬を刺した。

劉さんが席を立った。そして運転席の横のエンジン・カバーの上に腰をおろした。それはまだ半分残っているガラスの危険から運転手を守ってやるためだと思われた。しかし、そうではなかった。しばらくして、劉さんに李さんと谷さんが入れ変わり、やがて三人がいっしょに肩をくんで、吹き込んでくる雨風の正面に立った。彼らはわれわれのためにそうしていたのである。

その間、青木さんがやめてくれるように何度も言ったが、聞き入れてはくれなかった。さしだしたウインド・ブレーカーもなかなか着てはくれなかった。バスの中は、依然、静寂そのものであった。なにか、寂しかった。

バスはコビのでこぼこ道から抜け出し、幹線道路に入ると、スピードを増した。雨が容赦なく彼らにたたきつ

けられた。五十キロあまりという安西までの道のりが、随分長く感じられた。燈ひとつない闇のなか、安西の街あかりはいまかいまかと焦燥感のみがつのった。この妙な興奮から早くのがれたいと思った。

2

苛酷なまでの太陽、悲哀さえ感じさせる青空、吹きすさぶ熱風。砂漠はなにか仮借のないものを持っている。しかし、陽関の烽火台から目にしたタクラマカン砂漠は厳しさという以上に美しいものであった。

茫漠として広がる砂の海を正面にして立つと、左手には断崖を隔てて、オアシスの緑が、さらには褐色のコビの広がりが望まれ、遙かかなたには、三危山のつらなりだろうか、岩質の山並みが低く見わたせた。右手には砂の海が低く、高く波うち、赤褐色の丘陵をなしていた。そして、なによりも正面の広がりは眩く、その果てしない広がりにぼくは吸い込まれていった。

空と大地が鮮やかな一線をひいて、触れあうところ。そこは、長安から、ローマから、ペルシャから、名も知らぬ人たちが各々の文化を背負って行き来したところであり、法顕、恵生、玄奘が、そして歴史にその名すらとどめなかった幾多の入竺僧が、仏法を求め、王国を求め、太陽と風の熾烈な浴みのなか、飢渇や不安と戦いながら、灼熱の太陽にもまさる情熱をもって往還した場所である。

「遍望極目、渡ル処ヲ求メント欲シテ、則チ擬スル所ヲ知ルナシ。唯々死人ノ枯骨ヲ以テ標識トナスノミ。」

砂漠の美しさとはこの凄絶さでもある。凄惨、苛烈な砂漠はいやおうなく孤独を感じさせる。やがてその孤独が乾いた明晰さにとって変わる。それは達観でもある。砂漠は、精神とか心とかいったものが何ものでもないということを訓えてくれる。身体の下す判断は精神の下す判断と等価のものであるということを訓えてくれる。すべてが空慮のなかにあって、求道心は欣求心へ、さらには本能ともなって、彼らは砂の上にためらいも、不安もない直線的な足踏を残していったにちがいない。それは永遠の現在を生きる姿であり、純粋、無垢、高貴な姿でもある。

太陽がゆっくりと沈みはじめる。太陽はすでに熱を失い、くっきりとその輪郭をみせ、西に傾いた。陽が地平線にかかるころ、世界は鮮紅色に染まり、透明感に満ちあふれた。砂漠は黄色、褐色、やがては紅紫色にその色を変えていった。それは陽光と陰影の織りなすタペストリーであった。太陽を追うように、空には蒼黒が広がり、

地平線の上には星がきらめきはじめた。
単純、すべてが単純であった。ここでは未来とか、名誉とか、地位といった言葉は何を意味するのだろう。
最後に、感謝の意を込めて。
同志、幸苦了。

逆噴射合宿

ＯＢ隊員　芥　川　泰　男

私は新人の時にインド合宿、ＯＢになってから中国合宿に参加するという幸運にめぐまれた。両合宿を実際に体験し、比較ができる立場にある。新人であった時の印象と、ＯＢである時の印象は当然、単純に比較できるものではないだろう。が、それを越えた決定的な違いが両合宿の間に感じられた。

週刊平凡の「片桐機長の謎多き『逆噴射人生』」という記事を見つけた。「逆噴射人生」という言葉に笑わされた。着陸時の逆噴射は、異常な、常軌を逸した行為で、それをそのまま片桐機長の私生活に結びつけたものかも知れない。また、〇〇人生という表現を使う場合、ある人が一生を捧げて何かを成し遂げたという内容を指すことが多いことを考えると、この「逆噴射人生」は完全に片桐機長をおちょくっている。それとも単に、限られた字数で内容を伝えることを要求されるタイトル文の性質上、「逆噴射の操作ミスを犯した片桐機長の謎多き人生」とすべきところを、このような形に単縮したのに過ぎないのかも知れない。いずれにせよ「逆噴射人生」というのは傑作だ。私はそれ以来「逆噴射」という言葉が気に入ってしまい、友人をこらしめたりしたい時に「そんなこと言うと逆噴射するぞ。」と言っておどかしたりしている。

助かった片桐機長は、まわりに責められてお気の毒というか、当然というか……。

事故が起こると、その原因が必ず追求される。そしてその組織のかかえる問題点がクローズ・アップされ、責任者が辞任する。他人事では無い気がする。

事故というのは、起こるべくして起きるものなのか、それとも単なる遇然に過ぎないのか、最近のクラブの状況を見て考えさせられる。

中国合宿とインド合宿の印象の違いをここで述べるべきではないと思うが、四年間でクラブの体質はずいぶん変わったように思う。

中国で絵を描いて

OB隊員　正　田　益　司

私はこの中国合宿中、六十数枚の絵を描いた。今、それらを見ると、殆どが人物画であったのに気づく。別に意識したつもりはないのだが、描いてゆくうちに風景画にはない面白みを感じたのである。風景には生きた人間がないが、人物画にはナマのふれ合いがある。対象となる人と私とは十数分の間共通の世界・密室に置かれるだけでなく、私は彼らを独占する事が出来るのである。写真の世界でいう〝カメラマンの特権〟に通じる様な感覚と言えようか。対象をみつめながら絵を描くうちに、彼らの性格までもが感じ取れたし、スケッチブックに残ったその一人一人が私の中の中国そのものであり、今なおいとおしく思われる。

人物画の中でも、やはり女性の絵が圧倒的に多い。酒泉の中学校に泊まった時、我々の食当などを手伝ってくれた女子中学生五人は、写真を撮ろうとしても恥ずかしがっていたのだが、描きためた絵を見せると、寄って来てすぐ打ちとけてくれた。絵の説明などをしながら談笑し彼女らの中に大変可愛い女の子がいたので絵を描かせてくれと頼むと、なぜか五人全員が横一列に座ってポーズをとった。リアルに描きすぎると不公平が生じかわいそうだったので、器量の悪い娘もそれなりに描く様努力したのだが、言葉は通じなくてもやはり思い入れは伝わってしまうのであろう。可愛いと思って描いた娘はそのあとも残っていっしょに色をぬってくれたし、道で会うと手をふってくれ、酒泉を発つ朝は沿道で見送ってもくれたが、他の娘はすぐに帰り、見送りにも来なかった。敦煌からの帰りの列車で、向かいの席に座っていた十歳の小女は、最初こそひとりでずっと黙って窓の外を見ていたが、私が絵を描きたいと頼むとちょっと驚いた様にし、ニコッと笑ってすぐポーズをとった。それからあとはもう大変で、絵が似ていないと言ってはすぐむくれたり、彼女の名前の発音が違うと私を強制指導したり、あげくは他の部員の席までおしかけて色紙を要求したりと、ジャジャ馬ぶりをいかんなく発揮したのである。あれ程しおらしくて可愛く見えた少女は、わずか数分で我々を圧倒し、まさに公害の様であった。

他にも私のスケッチにまつわる思い出は数多い。列車員の女性を描いた時は彼女らと一時間程も同席で話をし、ブドウなどももらったりした。又、親子づれを描いた時は、母親の愛情や子供への教育の一端をかいま見、年配

の労働者を描いた時は彼を囲む仲間との人間関係や仕事への意気込みがうかがえたりと、人物画を描くという事は私にとって単なるスケッチとしての意味を離れ、まさしく内面的な交流そのものであったといえる。

私が中国人の絵を描いて思ったのは、コミュニケーションは決して難しいものではない、という事である。歌とか絵とか、無条件の共感を提示しそしてまず自分の方から心を開くと、相手の方が心を開くのを期待する前に自分からそうすることこそ、コミュニケーションにおける誠意であり、またたとえ言葉や風習が異なっていてもその誠意さえあればお互いの理解の糸口は見つかるのではないかと私は思う。また中国での一か月という限られた期間が心のふれ合いの面で満たされていた様に、人生という有効の時間においてどれだけ多くの友人を得、またどれだけの深みを感じられるかも、〃自分から心を開いてみせる勇気〃により変わってくる様に思われるのである。

〃人生は旅である〃と言う。それは、通り過ぎてゆく人々や出き事の思い出が二度とくりかえせないものであり、かつそこに有限の哀しみがあるからであろう。だとすれば、有限を有限として諦めることなく自ら〃意味〃を実感する為に、私は〃心を開く勇気〃を持っていたい。この旅をなつかしく振り返る日は、まだずっと先のことなのだから――。

個人的な反省

四年　佐藤　淳

教育実習の折に指導教官が、中学生の非行のことを問われたので、私は無難に世論一般に沿った答えをしたら、その先生に真顔で、

「評論家の様な口を聞くものではない。」

と、一喝された。

苟も教師を目指そうとする者（当事者）は、真剣に、その世界の中に身を置いて責任と義務を果していかなければならないと云うプロ意識を教えられた訳である。

これは、私一人の個人的な感想であって、中国合宿と云う多勢の方々に御協力頂いたプロジェクトの本質とは別の問題であるのかも知れない。

それは、中国合宿を進めていく中で、果して自分がどれだけの当事者の自覚と責任を持って行動してきたかということである。中国の国情がよく把握できないとか、中国のお国柄では、仕方がないんだとして、どうしよう

もないはずの自分達の責任外のところに一つの答えを見い出してはこなかったのか。何も中国合宿に限らず、ワンゲル生活を通して大なり小なりそういうことがあった。特に下級生の頃は、合宿の意義や、詳細については計画書を見なければよく解らない程、受動的であったから尚更そんな風だった。

思うに、その原因の一つには、活動を作り上げていく段階でのイメージの貧困。それから派生して、活動の目的の不明確さがあるのではなかろうか。ワンゲルの合宿がおおかたそうだと言うのではない。前にも書いたように、このイメージの貧困、活動目的の不明確さ等は、私個人の、その活動に対する取り組み方の問題であって、自分自身がどれだけ活動の意義を咀嚼しているかという問題である。中国の前にインドがあった様に、毎年の各合宿の前には、前年の同合宿が、私の中にはあった。伝統と云う大きな思い込みの中にイメージは埋没していたし、WWVと云う組織の中に甘えていた様にも思う。どうか後輩諸君も覚えておいて欲しい。WWVの中にいれば、心に残る活動ができるというものではない。部員一人一人が主体的に行動して初めてWWVの伝統が活性化されていくのだということを。

中国合宿のリーダーの一人として、今さら乍らこんな事を書くのは恥かしいことでもあるが、敢へてこうしたのは、この中国合宿報告書が、次の活動への踏み台となることを願っているからである。

そして今、ワンダーフォーゲルというものに、現役を離れ、取り組む形はどうであれ、飽くまで固執したいと願っている。どうも未練がましい様だが、やり残した仕事が多すぎる。しかしそれも、これも、中国合宿の体験を通して初めて明確に感じた訳であるから、そういう意味では、中国合宿は私の中で一つの形を成している。

――ここまで考えてきて、やっぱり私は当事者以外の何者でもないんだと思い直していた。何よりもまず、中国へ行くために寝食を忘れて動いていた時間は自分以外の誰のものでもなかったからである。

貴重な時間をさいて御協力下さいました、中国の方々国内の関係者の皆様、在日本部を御願いいたしました手島OBはじめ多くのOBの方々、一諸に参加して頂きました神沢先生、青木監督をはじめとするOB隊員の皆様に心より、厚く御礼申し上げます。

中国合宿の収穫

四年　関口勝正

大学生活をワンゲル活動に、その中でも特に中国合宿に全力を傾けられたということは幸運であった。自分の様な怠惰な男が「やりがいのある仕事の場」を与えられる。こういう経験ができるのもワンゲルならではである。感謝せねばならない。

しかしながら、計画は、実に困難を極めた。問題点が山積みし、交渉に時間がかかり過ぎ、準備も多忙をきわめた。一〇〇％満足のいく計画とはいかず、実際に現地へ行って、意志決定するべき所が大部分を占め、計画の未熟さが露呈してしまった。中国で自由にワンゲル活動ができない事は予想されたが、やはりその通りとなった。中国の現状ではいたしかたない事とはいえ、悔まれる事でもあった。

良かった点も数知れない。特に全員が一つの目標に向って努力した点だ。これは大きい。またそれに対してのまわりの人々の協力。いろいろな人に随分御世話になった。とにかく一つの事を実行するにはいい加減ではダメで、地道にその為に活動しなければならないということを非常に痛感した。ただ単に欲し、それがすぐにかなえられるという甘い考えは通用しないのだ。

私は計画遂行までの過程で、中国での厳しい環境統制に置かれている状況と共に、物心両面についての〝有難み〟を感じた次第である。日本では味わえない中国の自然に魅かれた自分が、逆に今度は日本の恵まれた環境に気づくというのはいかにも皮肉めいていた。この事をいつも認識してこれからの自分を戒めていきたい。

暗中模索の日々

三年　片岡正光

四年生の皆様をさしおいて、私がこんなことを感想文として書くのは、ひけめを感じるのだが、私にとって「中国合宿とは何ぞや」と聞かれたら、残念ながら、中国で過した一ケ月間には答えが見い出せない。それよりは、何といっても中国合宿までたどりつくまでの暗中模索の海研の日々に答えがあると思う。今からふり返ってパッと印象に残っているものは、あの佳一さんの下宿の緑のじゅうたんであり、佳一さん宅からセブンイレブンまでの真夜中の暗い道端であったりするのである。思え

ばもう二年も前の記憶が、今終ったばかりの中国合宿の記憶よりも鮮明であるのはいったいどういうわけであろうか。「また今日も徹夜か」と思う裏には「本当に中国なんかに行けるやろか（この当時はまだ関西弁を使ってもはずかしくはなかった）」という不安と何とも言えないロマンのようなものが交錯していた。私は、海外へ行けるなら中国がええ、井上靖の『敦煌』『楼蘭』『蒼き狼』のイメージ、何とももの悲しい余韻を持ったシルクロードのイメージで漠然と考えていた。今となっては、ただ行きたいだけで、ワンゲル活動にとっての領域とか是非など全く考えていなかったような気がする。私は全く意識の低い新人であったと今思うと恥しく思うけれど、あの時はあれで幸せだったんだろう。二年になって本格的に中国を目標に計画が始まった。最初は確か活動形態からはいったように思う。ラクダ、ロバ、ジープ、徒歩、自転車いろんなものが出てきたけれど、実はそれ以前にシルクロードが暗黙のうちにきまっていて、活動形態としても本当は自転車がほぼ決まりであったのに、インド合宿に対する意地で、オリジナリティを無理に考えだそうとしていた。ロバとかラクダとか。これを書くと四年の皆さんは何か不服があるかも知れないが、実は皆んな自転車にしたかったのではないのかな、というわけでありオリジナリティもないまま、たぞインド合宿に対する意地で中国が始動したのであった。何とまあ、当初の計画は遠大なもので、西安からカシュガルまでの四千キロを二隊にわけてやるというものだった。佳一さん曰く「最初の計画はでかければでかい方が良い」と。第一次計画書の作成が始まる。趣旨でつまづく、あのころは監督は雲の上の人で、皆んなでどうしたら監督がＯＫを出すかなあと趣旨を監督の顔と照らし合わせて、合理的にこじつけ的に作っていたものだった。しかし、今となれば何度も練ったせいか、こじつけがこじつけでなくなり、本当の趣旨になっていることに驚くばかりだが、監督戦略を皆んなで練りながら、考えたことは、それだけの裏付けがあるだけの具体的な材料が必要であるということである。そこで、長沢和俊教授の研究室へ行ったり、シルクロード関係の書物を買っては読んだりした。このときだ芳林堂に足繁く通ったのは。また、わけもわからず中国大使館へ行ったり、全く相手にされないのに日中友好協会へ行ったりした。そしてようやく出きた計画書を武器に西門のＡＢＣの二階で初めて監督と会ったのだった。鶴の一声で、情報不足と不完全さを指適され、また佳一さんの下宿でアグネスチャンのＢＧＭなどを聞いて徹夜同然で再検討した。その時もまたまたセブンイ

レブンへの暗い路が待っていた。このような監督とのいたちごっこの間に、外務省へ行ったり、夏合宿があったりでなかなか先のみえない計画であった。ようやく陽があたったのは、長谷部さんとの出会いであったと思う。急速に情報がふえるし、交渉のターゲットもみえるやらで計画に自信が生まれた。それ以後二・三の挫折と再建があってようやくこの計画が成功した。長く暗い試行錯誤の期間のアルバイトはあまり身がはいらないこともあったけれど、私はこの二年間、ブツブツ言いながらも何とかやってきて今本当によかったと思います。しかし絶対に忘れないのは、新人問題で、もう時間が真近な時に新宿ランザンで、監督にだめだと言われた帰り、佳一・淳・関口先輩と庄とで食べたあのそばの味だ。

以上私の中国合宿に対する感想を述べたけれど、何かでかい計画を実行することは、ただ運が良く行ったのではおもしろくなく、地道な、積み重ねがあってこそ印象に残るものであってすばらしいものであると思う。最後にこの合宿を日なたになり影になり見守って下さった監督はじめ関係者の皆様、そしてよく私たちを引っぱって下さった四年生の皆様に感謝致します。

雨

三年　庄　和也

（その一）

小雨がぱらついていた。嘉峪関から、玉門市までは、約七十キロの行程である。万里の長城の西のはずれ、嘉関の城壁にのぼると、はるかに白い雪をたたえた

の山なみがのぞまれた。体中を歴史の香りで一杯にして、嘉峪関城内に惰眠をむさぼった昨夜であった。それが、もう出発である。

歴史の古城を後に、勢いよく飛び出すと、そこは果てしなく続く一本道：そのまわりは、すべてゴビタンの大平原である。想像以上に圧倒的な、この眺めはどうだ。自転車のスピードにあわせて、電信柱が近づいては、遠ざかっていく。人をよせつけないこの砂漠の中で、その迫力に押しつぶされそうになる僕を、かろうじて救ってくれたのは、人の勾いを唯一思い出させてくれるこの電信柱の隊列であった。あとは、ただアスファルトの道のみである。

途中、線路を横切る。雨足が激しくなってきた。出発前、シルクロードは、ほとんど雨の降らないところと聞

かされてきた。そしてそれは、まちがいではなかった。しかし、この雨はどうだ。いやおうなく、雨なのだ。雨具を着ていても、汗でぐっしょりにぬれて、まるで用をなさない。こんな雨を、一体誰が想像できただろう。ぼくらの脇を、行きつ戻りつ走っている中国の人達も、この雨には驚いたようだ。ワイワイやりながら走っている。酒泉でもらった、記念の帽子の「自行車遠征隊」の文字も、雨でにじんで流れ出してしまった。

一年分の雨が今日一日で降ってしまった、勧迎の雨です、体憩した玉門東駅で、そんな話を聞いた。

雨は降り続いている。水たまりの中を、一気につっきると、水しぶきがあがった。おもしろくないので、みんなで歌を歌いながら行く。

玉門市に入る。激しい登り坂である。あとわずかだ！踏みしめるペダルに、力がこもる。しかし、そこからの長かったことと言ったらなかった。雨と汗とで全身ずぶぬれ、フライングピジョンの重い車体に、ズタ袋である。懸命に、坂をこぎのぼっていくぼくたちが珍しいのだろう、人々が好奇の目でこちらを見ている。おたおたやっているぼくらに、トラックは容赦なくクラクションを鳴らす。もうクタクタだ。息がはずむ。悪戦苦闘のぼくらを尻目に、中国人はスイスイのぼっていく。そのタフさには驚かされた。（中国人は、遊びでも仕事でも、精力的にやる。同行の人々と接してみて、そう感じることが、何度もあった。）

あいかわらず雨が叩き続ける中、やっとのことで、招待所にたどり着いた。その時の、爽快感と言ったらなかった。目一杯やった後のあのすがすがしさ－この雨の日の印象が今も強く残っているのは、このさわやかさのためだろう。その後、行動中はいろいろ苦労したけれど、この時ほど満足感を得たことは、ついになかった。

（その二）

玉門鎮からは、向かい風であった。正攻法で進んだ。好奇心一杯の人々にとりかこまれた飲馬農場をすぎると、しばらくは、砂利道が続いた。オアシスの線がとぎれれば、あいかわらずの圧倒的な大平原である。

幻の橋湾城は、道標九三四にあった。風化したこの瓦礫の下に、はるかな歴史が埋もれている。まわりを取り囲んでいる、この土の壁も、やがて歴史の大きなうねりの中で、姿を変え、風の大きな力にさらされていくのであろうか。感概もひとしおであった。

風庫、布隆吉を越え、甘新公路をそれて、砂漠の中の

道を行く。戦車のキャタピラが通った後のような、でこぼこの砂道で、ハンドルがとられる。必死で着いたのは、双塔ダムである。砂漠の中に建設中のダムということであったが、思いのほか大きいので驚いた。

風が強い。素早くテントをはって、夕食をとる。ミーティングも終って、ほっとしていると、今夜十二時にダムの水を放出する、との知らせが劉さんによってもたらされた。ここ数日の雨でたまりすぎたダムの水を放出するので、甘新公路へ戻る道が遮断される、と言うのである。そこで急拠、安西へ出発することになり、テントを徹収し荷物をまとめて、ダムの事務所へおりる。風が、さらに強さを増した。

ぼくらが事務所を中国製のバスで出発した時、外はもうまっ暗であった。風はあいかわらず強く、雨が降り始めていた。ぼくらを乗せたバスは、猛然と砂漠の中のキャタピラ道を、とばしていった。激しい振動で、バス全体がビリビリ音をたてた。ふと見ると、石でもぶつかったのであろうか、フロントガラスに、ぽつんと小さな穴があいていた。と、それはみるみるうちに大きくなって、ガラス一面にヒビが入った。はじめのうちは、助手の人が、手でおさえていたが、それがおさえきれなくなり、遂に割れたガラスを、はずしてしまった。そのため、激しい風圧と共に、車内に勢いよく雨が吹きこんできた。ぼくらは、まっ正面から雨に叩きつけられた。

すると、劉さん、李さん、谷さんの三人が、立ちあがって、フロントガラスと、ぼくらの間に立ちはだかったのである。自分たちの体で、ぼくらが雨に打たれるのを、防いでくれたのである。

ぼくは、この時ほど感動したことはなかった。人間の本当の強さ、暖かさ、やさしさを、強く感じた。ハンマーでなぐりとばされたぐらい衝撃的であった。それと同時に、そのやさしさに甘えてしまった自分を感じて、死にたいくらい嫌になった。みじめであった。

人が人を思いやることの意味を教えてくれた、この雨の日を、ぼくは一生忘れないだろう。

蘭州最後の夜

二年　岡　聡

食い物が悪かったのか、行程をこなし切って気が緩んだのか、いずれにしろ、非常に情けないことに、私は熱を出した。四十二度。行程もこなし切り、明日は上海へ行くという、蘭州の夜であった。元々、私は体には自信

があった。体にだけは、と言った方が良いかもしれぬ。とにかく幼少の頃より、ひたすら、病気には縁が無かった。油断していたのかもしれぬ。

決定的に変調に気付いたのは打ち上げパーティの前であった。気分は悪いし、何やらフワフワと浮かんでいるが如き雰囲気、私は半分夢み心地であった。私の左隣には李さんが、右には一人おいて谷さんが座っている。実にまずいポジションである。この、我々にとっては一生忘れ得ないであろう。心優しき二人の中国人は、同時に私のように体の変調に気付きかけたものには、地獄の使者であった。同行されなかった方には、わからぬであろうが、中国人は極限的に心配症であった。チラとでも病気の片鱗でも見せようものなら、喜々として、悪いが私にはそう見えた、群がり病院へ送り込もうとする。医療の報告を見ればわかるが、やっためたらと病人が多い。情けないと思われるであろうが、病人が多いというよりは、病人にさせたがる人数が多かったのである。李さんと谷さんは、我々と身近に接していただけに難物である。病院などに送り込まれたらプライドにかかわる。ここはなんとしても隠し通さねばならぬ。

他の面々にとってはさぞや楽しかったであろう。この打ち上げパーティーは、時を経るにつれ、徐々に地獄の相を呈してきた。私は飯も喉を通らぬ状況に陥っていたのであるが、世間はそんなことに一切おかまいなく進んで行く。牌酒というドエラクきつい酒がある。中国ではこれを持って乾杯したからには死んでも飲みほさねばならぬ。酒に自信のない甲斐性無しの同僚共は、臨まれると、情けなくも私はけっこうですなどと小声で口走りつつ全々関係のない小生に向かって、おらおら、岡、何遠慮してんだ、などととんでもない責任転嫁をしおる。さも、オレはお前のために譲ってやるんだ、というが如き顔をしているだけに許せぬ。この、いじましき同僚達は自分は飲まぬくせに、人が飲むとなると、やあもう一杯などと嘶したてる。無責任極りない。こう言っては何だが私は臨まれて拒んだことは一度もなかった。拒んでは日本人のコケンにかかわると思っていた。しかし場合が場合である。ちょっと無理だなあ、と言うと、例によって、岡、何をいい子ぶってんだ、などという声が、続いて谷さんが、大丈夫ですか。この一言で私は決めた。飲まねばならぬ。なんとしても体調の悪いことに感づかれてはならぬ。私はぐいと一杯飲み乾した。さらにもう一杯ぐい。これで私の不調は極限にまで達した。寺沢の如きに至っては、自分で食いたいだけ食うと、あまった分を、おら食え食え、食いたいんだろうなどと言いつつ、

私の前に皿を寄せてくる、李さんなど一生懸命に盛ってくれる、こうなるともうこれはパーティなどといった生やさしいものではない。拷問である。パーティーが終わった時には立っているのもままならぬ状態であった。写真を撮った事もボンヤリとしか覚えていない。さすがにおかしく見えたのか、谷さんが心配そうに、どうかしましたか、と聞いてきた。まずい。私はにこやかに顔を引きつらせながら大丈夫ですと言うと早即退散することにした。

部屋に入るなり、私はベッドにもぐり込んだ。こうなったら寝て直すしかない。私がベッドの中で丸くなっていると、原がやってきた。何だ、もう寝てるのか、などと言いながら、突然、原の目がギラリと光った。原も病人を見つける目は肥えている。オイ、コラ、お前体の調子が悪いんだろう。いやおかしくなんかねえよ、眠たいだけさ。いやお前はおかしい。原の手にはすでに体温計が握られている。オイ、体温計らせろ、いやだ。ここで、計られては元も子もない。私は必死で抵抗した。私には一日寝ていれば直す自信があったのだ。しかし私は、ついに体を許してしまった。数分後、ウヒョッという奇声をあげると、原は言った。オイ最高記録だ。監督に知らせてくる。やめろという私の声も聞かず彼は走り出て行った。おまけに彼は、私に熱があることを廊下で叫んだのである。李さん、谷さんという　々たるメンバーが喜々として、私にはやはりそう思えた、乗り込んで来たことは言うまでもない。大丈夫です、大丈夫です、と上言のようにくり返す私の意志は全く無視され、病院送りが決定した。いかにも意外そうな顔つきの列の中、トボトボと李さんに支えられながら歩く私は、晒し物以外の何ものでもなかった。屈辱的であった。

病院はホテルから車で五分ほどの蘭州人民医院である。私はつくなり、事情聴取された。医師は、行程中地面の上で飯を食ったと聞くと、目を丸くし、それでは病気にならぬ方がおかしいと言った。中国人は地面で飯を食うなど野蛮極まりないことだと思っている。どうしてそんな事をさせたんだと、同行した李さんが責められたのには困ってしまった。私は台の上に寝かされ、看護婦に、この人は大変美しい人であった。アルコールで左の腕を拭かれた。注射をされるのか、いやだなと思っていると彼女は右の腕を、次に背中と腹を拭きはじめた。こんなにあちこち注射されるのか、となかば絶望していると、彼女のアルコール脱脂綿を持った手は、左脚、右脚に及ぶ。いったいどうなってるのかな、という私の疑問に容を見つける暇もなく、やおら、私の行程中一度としては

き替えずにすませた匂いやかなるパンツを持ち上げると、いきなりぐいと手をつっ込むなり、私の大切な局部をぐいぐいと拭き始めたのである。今だから、幾分目尻も下げながらも話すことができるが、その時は、目尻を下げるどころではない、私は中国などという異国に来て、異国の女性に局部をアルコールで拭かれたのである。私は股間に漂う清涼感と、心に大きく膨れ上がった驚愕の思いの中、漸く悟ることができた。私は消毒されたのだ。それも注射を打つ部分だけではない。私の存在そのものがばい菌と同等レベルの扱いを受けたのである。彼女は全身を拭き終わると満足したのか、にこやかに微笑むと私にうつ向くように指示した。そしてまたもや、パンツを引き下げると、今度は本当に、ぶすりと注射針を突っ立てた。ふと気付くと私の手は李さんにしっかりと握られている。考えてみると、台に横たわった時からずっと私の手を握っている。李さんの目は限りない優しさで私にそそがれている。私は、李さんのせいじゃないよ、とつぶやいたが、もちろん李さんに通じるわけもない。注射の効果は、てき面であった。ホテルで計った際、四十二度あった熱は、診察を終える頃にはすでに四十度ぐらいに下がっていた。明日の朝、三十九度以上あったらまた来なさいと言われ、帰されることになった。私はなんとしても私の局部をアルコール消毒した看護婦の名を知りたいと思い、その旨伝えると、医師は何を間違えたか自分の名を紙に書いて渡した。その看護婦の名は、ついにわからずじまいである。

病院からホテルに戻ると、みんなが心配して待っていてくれた。やはり四十二度という熱は異常な感じを与えたらしい。神沢先生まで見舞いに来て下さったのには、恐縮してしまった。今でもあの時のことを思い出すと、あまりの情けなさに、大声で叫んで走り回りたくなる。

翌日、私の熱は三十七度まで下がっていた。予定通り上海に行くことになる。バスに乗って見回すと李さんがいない。探すと外で手を振っているではないか、谷さんが言った。李さんはここで別れます。そうと知っていればもっと話すことがあったのだ。惜別の思いが私の胸に。私の未練を引きづったまま、バスは走り出した。

中国学生気質？

二年　寺沢　秀記

蘭州に滞在中、蘭州大学の学生と歓迎会をかねた、座談会の席がもうけられた。いいかげん列車の旅と超ハー

ドな見学スケジュールにまいっていた私たちに、新たな風をあたえてくれた。

学生といっても、日本で考えるほど若くはない。一度働きに出てから、大学に入り直すといったことも普通だそうだ。中には、既に三十才を迎えており、妻子までいる学生もいて、なんとも驚かされる。

聞きところによると、中国において、大学に入学することの出来る者は、エリート中のエリートということであり、そのため、日本とは比較のならない進学競争が、繰り広げられているとのことである。そのため、大学生ともなると、日本語か英語が話せると思ってまちがいはいい。とにかく、彼らの第一印象は、ものすごく勤勉家であるということである。

また、学校組織や試験・授業などの違いといったものは、数え上げれば少なくはない。簡単に説明すると、入学するまでは、日本的教育に似ており、入学後は、アメリカ、西欧のそれと類似している。

決して条件のよい環境のもとに、生活している訳ではない。その中でも、彼らはひたすら勉強するために大学へ通うのである。

ここまで彼らが熱意をもって、勉強するという態度には、将来の目標があるからこそ、出来るのであろうと、単純な私たちは考えて尋ねてみた。

「将来は、何の職につきたいのですか。」

「私たちは、自分の好きな職業につくことは出来ないのです。すべて卒業後、国家分配によって職が定められるのです。」

「でも、勉強しているからには、何か個人的な目標あるでしょう。」

「それはべつにはありません。ただ国家の繁栄のために努力しなければなりません。」

なんという答えであろうか。答えになっていないようで、答えになっているところが恐ろしい。日本で、このような答えをしたとしたら、まったく気狂い扱いをされてしまう。ただ、彼らの本心はどのようなものであるかはわからない。しかし、「国家のため」などと、口に出していえるのは、たいしたものである。

この座談会の中で、

「中国は、日本に教えを乞うて、我々は日本についていっそう学ばねばならない。」と言うことを、よく耳にした。彼らにとってみれば、私たちの訪問は、絶好の機会であったのだろう。しかし、私たちは、努力もむな

しく、彼らの期待に応えることが出来なかったように思われる。日ごろ不勉強は私たちは、簡単な会話にさえ、手こずるありさまで、教えるどころの話しではなかった。

私はどうかと言えば……。日本語・中国語・英語の三ケ国語会話を駆使し、汗みどろになりながら、受け答えをするのに必至であった。

「何を勉強しているのですか。」と、尋ねられ、

「私は、法律を勉強しています。」

私はここで、「一応」 付け加えたかったのだが、

「ではあなたは、将来、弁護士になるのですね。」

「いえ、私は弁護士になることはできないのです。」

この答え方がおかしかった。

「なぜ、弁護士になれないのか。」と、追攻撃。

ここで私は、弁護士になるのには、多大な努力と勉強が必要であり、多くの人々が挑戦するのだが、成功するのはほんのわずかであるということを、説明したつもりであったが、

「では一生懸命勉強すればよいではないか。」と言われて、返す言葉を失なってしまった。

中国の学生は、決して物おじせず、常に堂々としている。そのため、かえって、こちらが卑小な立場に立たされているような感じを受ける。それでいて、彼らに対しては、実に好感が持てるのである。

学生の個々の能力は、すばらしいものである。これで自由競争の資本主義であったなら、日本の将来は暗いであろう。

この座談会の直後は、この危機感によって、帰国したら直ちに勉強に励もうと決意したのだが、悲しいかな、月日がたつにつれて、そのような感情は、どこかの山に埋もれてしまった。

この原稿を書くにも、辞書を片手に、忘れさった字を思い出しながら書いている自分を励げましながら行くしかないのだろうか。

WANDERER IN CHINA

二年　原　英　泰

この「夏合宿」としての中国遠征が我々に与えてくれたものは、一体何だったのだろうか。その答えはまだ出せない。急いで出す必要は無いと思う。今後、いろいろな合宿を計画してゆく過程で、その答えは自然に現われてくるだろうし、またそうでなかったら、中国合宿の意味は無くなってしまうのではないだろうか。「夏合宿」は、その代のリーダー達の最終目標であると同時に、次の代の活動への基盤たるべきだ。それでこそ「夏合宿」というものに意味も出てくると思う。

観光旅行と何ら変ることのなかった前半、後半の一〇日間。自転車での行動中も我々の予定通りに事が運ぶことは少なかった。これは中国の人達が悪かったのでもなく、我々に問題があったわけでもない。中国という国で国内で行っているような自由な形態の活動を行うことが不可能であっただけだ。我々のようなワンダーフォーゲル活動をするにはまだ早すぎた。しかし、我々の活動によって、ワンダーフォーゲルは、いずれ理解されるようになるだろう。そして、それが広まってくれれば、と思う。中国ほど、ワンゲルに向いた国は無いのだから。その無限なフィールドをつぶしてしまうのはあまりにももったいない。

中国のような多くの魅力を持ったフィールドを見せつけられた我々は、ワンゲルにあまり向いているとは思えない国内で、一体どんな活動を探し求めて行けばよいのだろうか。可能性はまだ大いに残されているはずだ。山ばかりに固執していてはいけない。我々は〝登山家〟にはなれない。あくまでも〝ワンダラー〟なのだ。山岳部との差が、岩をやらない、冬山をやらない、というところだけというようならワンダーフォーゲル部などつぶしてしまった方が良い。意味の無くなった名前を看板にすることなど、とても耐え切れない。ワンダーフォーゲルはもっと新しく生き返るべきだ。中国での活動が、最もワンゲルらしいとは思わない。しかし、自分が今まで経験した合宿のなかで、最もワンダーフォゲルであることを意識させてくれる活動であったことは確かだ。山にも魅力はたくさん有る。完全に山を離れる、などということは不可能だし、また、もったいなくもある。しかし、山に登ることだけがワンゲルではないのだ。そのことを中国合宿は教えてくれた。ワンゲルの隠された魅力を中国は引き出してくれた。それをまた奥に引っ込めてしま

うのは忍びないことだ。中国の与えてくれたワンゲルの魅力を引き伸してこそ、〝一九八一年夏合宿〟としての中国合宿に価値がでてくるのではないだろうか。

話は変る。中国合宿は我々に、ひとつも孤独感を与えなかった。人との交流が多く有ったからだ。自分は国内の合宿ではいつも孤独感というものを感じる。それは、それで不思議な魅力をもったものではある。しかし、中国で味わったような人の暖かさを、国内の合宿でも味わえないものだろうか。中国合宿の一つの目的であった日中友好は充分にはたされた。こんな目的は〝たてまえ〟だ、と思っていたが、その〝たてまえ〟が我々に与えてくれたものは大きい。

我々の合宿には、いつだってたいした目的など有りはしないのだ、と思う。我々はただ困難を求めているだけだ。それは、困難が与えてくれるものに価値があるということを知っているからだし、これからの合宿だって、結局は困難を求めるものになるのではないかと思う。新しいことをやるにせよ、山に登るにせよ、だ。山が嫌いな訳ではないが、今のままではいけないという気がする。中国合宿の意味を生かしてゆかねば、と思う。

中国合宿 ―その光と影―

二年　広瀬明彦

大げさな言い方だが、私は中国合宿に人生をかいま見たように思う。幸福と絶望、歓喜と悲哀がつねに背中合わせにあった。当時の日記を一部引用することによって、はなはだ稚拙な文ではあるが、リアルに迫ってみたい。

立志編　今、僕らは雲の上。あと数時間後にはもう大陸の上に立っているなんて夢みたいだ。PM2時10分上海上空で時計を一時間遅らせる。国際人になったようでちょっぴりいい気分。空港に着いた。バスでホテルへ直行。窓ごしに見る風景は、まるで映画のように鮮やかだ。夜は上海の街かどで、見知らぬ中国人達と必死に会話を交す。忘れられない中国の初夜となった。（これ以後、私はできる限り中国人とことばを交すことに務めた。ぐっと気合いを入れて、神経を磨ぎすまし、ビーンと気を張りつめて、何もかも忘れしゃべりまくる。終ったあと、どっと疲れるのも事実だが、その充実感は捨てがたい。中国人との会話は合宿を通じて最大のメインテーマ

となった。）ベッドに入っても、これから先のことをあれこれ思い描くと、わくわくして眠れやしない。

望　郷　編　40時間という気のめいるような長旅を終え蘭州に到着。「さあ、いよいよ『合宿』が始まるぞ。」と意気込んだのもつかのま、着いた所は高級ホテル。思わずため息がもれる。蘭大生たちと対面はしたが、彼らは大学の試験のため、これから行く五泉山登頂には参加しないと言う。「なんだ、つまらない。テントも張れず、行動も日本人だけ。これじゃパ　クの観光ツアーだ。」（この辺から、中国不信の感情が徐々に生まれてくる。これに拍車をかけたのが中華料理である。中華料理は合宿を通じて最大の敵となる。合宿で何がつらかったと問われれば、「もちろん、メシの時間だ。」と答える。みるみるうちに食欲が低下した。入部以来、合宿のメシは一粒残さず食っていたのに。残念だ。当然ながら、日本への思いは日に日につのるばかり。あの文学部の食堂さえ、今ではもう手の届かない懐しい味となった。私にとって、対中感情を悪化させ、日中友好を妨げたのは、言葉のカベでも思想の違いでもなく、あの忌まわしい中国的味つけだったのだ。）

絶　望　編　深夜、玉門市招待所のベッドの上、僕は腹部に異様な痛みが走るのに気　き、うめき声を上げてのたうちまわった。今まで味わったことのない不吉な痛みがあり、吐き気と気持ち悪さでいっぱい。「なぜだ、きのうかじったキュウリがあたったのか？」そのとき、日本料理の数々が脳裏をよぎっていった。友人の顔から西武線のラッシュまであらゆる物が頭の中で交錯する。このとき程、日本を懐しく思ったことはない。つのる思いは絶頂をきわめた。「日本が恋しい。帰りたい。そうだ明日にでも帰ろうか！こんなに苦しいんだから、先輩も許してくれるだろう。」気持ち悪さで眠れもせず、浮かんでくるのは日本のことばかり。

起床はしたがやけに苦しい。ガッツで食堂へ向うが、料理の臭いをかぎ何度も吐きそうになる。とにかく胃が重くて重くて、自転車のちょっとした振動が胃に響く。

日間の合宿中で最高に苦しかった日である。

玉門鎮に着いて医者の診察をうける。急性胃腸カタルということで、点滴をうけるハメになった。点滴と言えば、日本では重病患者のイメージ。僕は必死に拒絶した。だが、医者は許さない。右の手首に一滴また一滴、ブドウ糖の侵入を感じながら、無性にやるせなかった。

――――――――屈辱的な一日である。僕は大方の予想通り車に乗せられた。窓ごしにサイクリストたちをうらめしく思いながら、絶望に打ちひしがれた。彼らの顔のいきいき輝やいていることといったらこの上ない。他人の不幸に同情するのはたやすいが、人の幸福を祝福してやるのは何とむずかしいことか！「いいんだ。明日のために、今日という日はじっと耐えるんだ。」そう自分に言い聞かせながら、ひたすら再起を誓っていた。

再起編 僕は烽火台の下で復活ののろしをあげた。体調はほぼ回復したと言ってよい。奇しくも、今日は中国入国以来、初めてといってよいほど合宿らしい一日だ。「やっと砂漠のど真ん中で天張れる。そして、待望のシュラポンができるんだ。」と思うと胸が高鳴る。うれしいことに今晩のメシは最高にうまい。日本的味つけだった。これまで中華料理には実に苦しめられたからなあ。一番楽しいはずの食事時が苦痛の種になるんだから。それにしても楽しい一日であった。昼間は灼熱の太陽のもと、はねかかるコールタールをものともせず、つっ走った。夜は満天の星の輝きをながめながらシュラポン。寒さも苦にならない。再起にふさわしい劇的な一日だ。

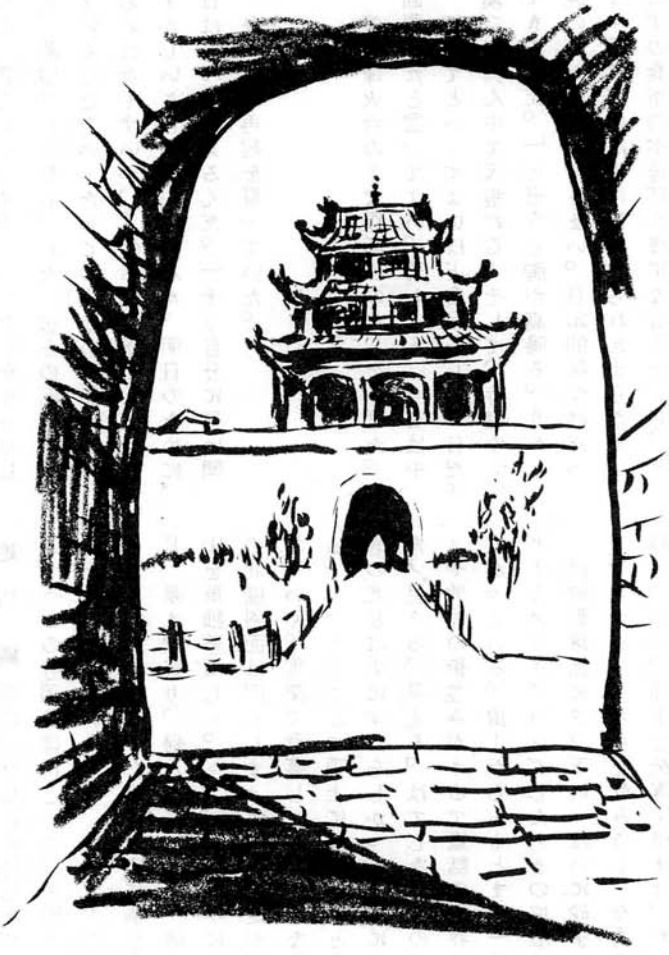
絶頂編 鳴沙山登頂に成功した!?記念すべき日である。（この登頂は僕にとって、中国合宿のピークをなしたとも言ってよい）結局、頂上までのダッシュでは7位に甘人じ入賞をのがしたが、実に満足感があった。皆で月泉まで降り、帰ることになる。帰りぎわ、再び鳴沙山を単独登頂した。トラバースぎみに登っているが、この北壁斜面は固くしまっていて、足がどんどん下へ流されていく。雪深で滑落しているような気分だ。黙々と登る。やっとのことで頂上に到着。ふと前方をながめたときの光星は実にすばらしかった。絵にもかけない美しさだ！見える、見える。はてしない砂の海の中に、オアシスや敦煌の街並みがまるで童話の世界のように幻想的に広がっている。頂上からふもとまで一気に駆け降りる。ザーとスライディングしたときの感触はたまらなかった。

高校野球風にクッ下いっぱいに砂をつめ、五泉汽水へオレンジジュース）を飲みほし、全力で自転車をとばす。帰りついて、簡単な洗濯を済ませ、わがベッドにごろんところがったとき、僕は「しあわせだなあ！」と素直に感じたのだった。

以下、日記は墜落編、放浪編・・・と続く。

きわめて舌っ足らずな文章になってしまったが、要す

るに中国合宿にはたのしいことや嫌なことがいっぱいあったということを言いたい人だ。



回想

新人　飯田隆行

中国……いつの時代にも何か日本人を引きつける魅力を持った国である。文化で、資源で、そして観光で。島国民族の宿命であろうか。その広大な大陸が抱える幾多の文物に、磁石に吸い寄せられるかの如き引きつけられていく。私もまたそんな日本人の一人である。

シルクロード……西方文化と中国との出会い。「上に飛鳥なく下に走獣なし。」とまで表現された苛酷な自然、その苛酷な自然と戦いながらも行われ続いた交流。ロマン、月並ではあるが、この言葉がシルクロードに一番ふさわしい感じがする。

シルクロード＝ロマン。いつの間にか出来上がったこの公式を胸に、このロマンを現実のものとすべく成田を発ったのが七月二一日。それから1ケ月が、まさしくアッという間に過ぎ再び日本に舞い戻った今、この一ケ月を回想すると……

現代のラクダとも言うべき、自転車にまたがって、さっそうと飛び出た私たちの横を猛スピードでトラックが走り抜けてゆく。マイクロバスから顔がヌッと飛び出して、「アーラ。日本人の方じゃございません。」と中年日本婦人方の素っ頓狂な声。「記念写真を。」と請われるままに手なんかあげて英雄気どりで収まっていた。ロマン、無論なかった訳ではない。烽火台で地平線に沈む夕陽を見た。翌朝、正反対の側から再び太陽が顔を出す時、この地球が、ゆっくりしかし確実に動いているんだなあと今更のように感じたあの時の感動は、一生忘れ得ないものだろう。しかし、私がシルクロードに求めていたロマンはなかった。もっとも、「空に飛鳥なく……。」といった一千年前の感覚を現代に持ち込もうとした私自身が大きな錯覚をしていたのも事実であるが……。

シルクロード＝ロマンの公式は無残に崩れ去った。しかし、旅というのはとかく期待した点以外の事が後々に頭に残るものである。今回の合宿も、その通りとなり、自然、人情といった諸々の点が私に、この合宿は有意義だったと言わしめているようだ。特に自然、人情について私の感じたままに述べてみたい。

自然……とにかくスケールがちがう。日本の風景を箱庭とたとえる人があるが、この景色を長年見ていれば、日本のそれを箱庭とみるのも無理もないと思われた。自然の圧倒的な勢いの前で人間が小さくみえる。ここにいると、人間は自然の生態系の一部に過ぎないということを

改めて感じてしまう。自然開発という名のもとに、山が切り開かれていく。自然生態系が破壊され、新たに人工生態系が生まれる。それ自体を否定する訳ではないが、やはり、我々の原点ー自然の一部としての人間ーを再確認する必要があると思った。原点を忘れた開発は単なる自然の征服に過ぎない。不毛の地ゴビにも、ダムが造られ、新たな農場が各地で築かれつつある。「西の方、陽関を出ずれば故人無からん」とまで歌われた陽関の背後にも緑豊かな大農場が広がっていた。シルクロード＝砂漠＝ロマンという固定観念に取り付かれた私にとっては、これらの開発は、非常に残念に思えた。今になって考えるとこの気持ちは、一種の思い上がりに過ぎなかったと深く反省している。開発が飽くまで開発であって、征服に陥いることのないことを祈りたい。

人間もまた自然と同様雄大であった。みんな陽気でよく笑う。見知らぬ人を引きこんでいく開放性。幾多の民族の興亡の中を、したたかに生き抜くうちに身についた習性であろうか。とにかくいつの間にか長年つき合っている友のように笑い語り合える仲となった。ざっくばらんな会話は、女性問題、恋愛問題にまで話題が飛び火し特に通訳のYさんの大胆な発言には日本側もタジタジであった。しかし、やはり彼らは全く異質の社会体制下で生活しているということを痛感せざるえない場もあった。「日本に行きたいか。」との問いに、「無論行きたい。でも金がない。それに国家が許さない。あなたたちがうらやましい。」との答え。金があれば、どこでも行ける若者と、金もなくまた国家という巨大な壁に閉ざされた若者。所詮、我々は彼らの羨望の的に過ぎなかったのかもしれない。一般観光客とは、違った形の交流を計画し、努力してきたのに、彼らにしてみれば何ら変わりのない存在であったのかもしれない。残念だった。同時に国と国との交流の難しさを感じた。

異質の環境の下で、異質の文化に触れ、異質の社会体制の下の異質の人達と語り合った一ケ月間。楽しかった。考えさせられた。自己啓発の場もあった。様々な意味でこの一ケ月は私にプラスだったと思う。何年か後、再びこの一ケ月を振り返ることがあるだろう。その時、この合宿の真の意義が何であったかを改めて考え直してみたいと思っている。

中国合宿を想う

新人　大家敏宏

がっかりした事があった。それは余りにも日本人が、多かったことである。未知の体験として、自分を英雄視していた自分、うぬぼれがあったのかも知れない。しかし、中国のシルクロードを走っているとき、日本人にあうたびにやりきれない寂しさをおぼえた。ただ自分がやったことに自信を失うようなことにはなりたくない。自分は、自転車で、シルクロードを走破したのである。そして、もう一度いってみたい。今度は一人で。

中国合宿で、一番、得る所があったのは、自分の頭の中で未知であった中国を自分なりに確立したイメージにすることができたことではないか、日本だけしか知らなかった自分にとって中国を見ることは、一つの成長であった。情報化社会の現代であるが、中国人民の生活まで伝えきれるものではない。その点、この合宿で中国の生活を一ケ月でも営めたことは、喜ばしく、少しでも中国人民に近づけたのではないかと思われる。この合宿、普通の観光旅行ではなかったことを強調したい。そして、そこにこの合宿の意義があり、成功したといえるのではないだろうか。

中国合宿感想文

新人　栗原勝義

ムッとする草いきれ。ゆったりした空間。似ている様で少しずつ日本と違う。これが外国というものか。上海空港のロビーに立ちわけもなく緊張した。初めて中国人の働く姿を見る。皆、素朴な服で髪型だが、男性に清潔さ、女性に清純さを、又誰にも芯の強さみたいなものを感じる。

その日の宿は達華賓館。クーラー付とは驚いた。テレビもあり英語講座をやっていた。食事は種類は豊富だが量が足りない。御飯が少ないのだ。味はベリーグッド。夜十一時だというのに窓の下にはまだ多くの自転車が走っている。これが次の朝起きて見るとやっぱり道いっぱいの自転車。いったい中国人はどれだけ働くのか。

見学をすませ、蘭州まで四〇時間の汽車の旅につく。車両は一等。なにからなにまで立派すぎてこわくなる。車内は暑い。気温は四〇度。だがいつからか熱さも湿けもなくなり蘭州へ着いた時は全く気にもならない好気候

になっていた。
蘭州は曇っていた。砂茶けた雰囲気。大きな街だ。そして整然としている。この地で念願の哈密瓜に対面。プリンスメロンを甘くして水けをたっぷり持たせた感じ。
蘭大の歓迎、酒泉のお祭り騒ぎを経て七月三〇日、いよいよ自転車の旅が始まる。
中国の自転車はサドルが高い。荷物をのせるとフラフラする。ロータリーを一周して街の人々の声援を受けつつ右へ折れるとポプラ並木の一本道。スカッとした解放感がわいてくる。汽車やバスではわからなかった気分だ。青いトレ着の先生が「ゆっくり、ゆっくり」と日本語で言う。風のせいかペダルが重い。ゆっくりなんていわずに加速をつけないとやりきれない。それでも相かわらずゆっくり行きましょうでは、つれないですよ。主役は俺たちじゃないのかな。と愚痴っぽい思いの僕だが、遠くに嘉　城を見たら、もうそんな思はどっかへいってしまった。土色の城はまさに歴史だった。スロープを登りきって城内へ。休む間もなく照りつける日ざしの中で食当開始。中国の人を手伝う。コックの常さんが少し日本語ができた。いい人らしい。そのうち、スイカをお医者さんの高さんが運んでくれた。そのうまかったこと。夜はシュラポン。闇の中では時を忘れる。遠い昔、同じこの土の上で数千の兵士たちが寝ていたのかと思い感傷的になる。
玉門市までの七〇粁は雨だった。だがドシャブリのシルクロードもいいもんだ。きのうとうって変わって自転車も快調。ただ通訳の余さんのなりふりかまわぬ走りにはまいる。寒い。セーターが役立つ。雨も小やみになり長い今日の行程もあと七キロ。ほっとしたのもつかの間そこからが地獄。遠々続く坂、坂。虫の息でホテルに着いた時は、すごく充実した気分だった。
翌々日の行程は楽しかった。なんと30分間下りっぱなしの坂。ところがこのころから自転車に故障が出はじめた。自転車も苦しんでいるらしい。この日の日本食、カレーうどんの味は抜群。3杯も食べた。
八月三日。双頭ダムへ。ジャリ道もなんのそのピンクレディーを大声で歌いながらの快速走行が続く。昼めしにインスタントラーメンが出る。中国製カレーラーメン。でこぼこ道をのりきってダムへ。食当を始めるころ、小雨がふり出した。悪天続きで閉口していたら、洪水警報。ほうほうのていでダムからひきあげ暗闇をバスで安西へ。
安西ではのんびりした日がつづいた。ここで神沢先生と土屋コーチを迎え、後半戦スタート。
しかし、しかし、八月六日。朝から腹の具合が悪く、

加えて、その日は最高の暑さ。幕営地の烽火台につくころには高熱でダウン。皆に迷惑をかけてしまった。病院で注射を受け元気回復。次の日は敦煌の人民公社でみんなと合流。その日は休養して、次の日、鳴沙山へ。ハーハーいいながらの山登り競争だったがこの分なら明日からの行動も心配ないだろう。

莫高窟は教養に乏しい僕には猫に小判だった。

さて、陽関。最後の難所。アゲンストの風を受けながらの四〇キロ。太陽がかんかん照りつける。後半は、登り下りの激しいジャリ道。全く道なき道を行く感じ。そして一転、川と緑。砂漠にオアシスとはまさにこのこと。ポプラの木立を行くと、そこが目的地。川の流れる静かな部落。すずしい茂みでキャンプをはる。

そこから陽関までは歩いていった。夕日の中、陽関の見張り台の上に立つと、やはりしみじみしたものを感じる。郷愁というのだろうか。ビールをのみ、歌を歌った。解放感。日が沈み、月の光の中を歩いて帰った。その暁は、星をみながら砂の上で寝た。もう野営も最後だ。

南湖公社で忘れられないのが池での水あび。子供の時にもなかった経験だ。

八月十五日。敦煌へ。この日も暑かった。逃げ水が何度も見えた。やっとのことでジャリ道を脱け下りのアスファルト。ここを昼めしも取らず三本で行くのだから腹が減る。ペコペコで食べた本場の手打ラーメンはうまかった。

そのあとはどんどん日本に近づいていく一週間。そしてどんどん中国の人と別れていく日々。「ゆっくり・ゆっくり」の先生。ダムで最後まで僕を待っててくれた「テクノ」おじさん。途中僕の不注意でころんだけど、笑顔でずっといてくれたメガネの先生。はじめ酒をどんどんすすめて頭にきたけどいい人だって思えるようになった医者の高さん。ひょうきん者のアキラ。兄貴みたいな常さん。カメラの高さん。人のいい隣りのおじさんみたいな李さん。やさしい笑顔の李運転手。そしてコクさん余さん劉さん。みんなに感謝したい。すばらしい一ケ月の旅はまさにこの人たちのおかげだった。どうもありがとうの言葉で、乱文を止めたい。

不知道 ―プチタオー

新人　三宅一郎

私たちが初めて、中国での食当をしたのは酒泉であった。成田を七月二十一日の午前十時十五分発のJAL機

でたってから、まず機内食、上海での達華賓館での接待、そして上海から蘭州への汽車の内での食事、蘭州につくと蘭州飯店に宿泊し、蘭州から酒泉まで列車で移り、私たちが食当を行なう機会がなかった。酒泉中学に到着すると、すごい量の食糧と対面することになった。山積されたダンボール箱には牛肉や中華風の漬物やコーヒーや見たことのない野菜が入っていた。大きな篭には麦藁がつまっていて、中にはビータンがたくさん入っていた。あまりたくさんあるのでびっくりしていると、私たちと一緒に自転車で行動することになっている酒泉中学の先生達であったが、中国人の人たちが何処からともなく、一人二人とやってきてやがて相等な数になってきた。彼らはかたまって何か話していたが、何と、目玉焼を作り始めたので驚いてしまった。当惑していると、とにかく何か作れということなのでフォエブスに火をつけていると、中国人がきて、彼らのところへ連れていって、プロパンガスのコンロを指さして何かしきりと言うのではあるが、困惑してしまう。意味が解らない訳ではなく「不要」と言ってるのは聞きとれるのだが、そう言われるとおりやる訳にはいかないのだ。こっちにだって立場というものがあるのだが、彼らは全く理解してくれないのだ。材料も中国人が管理している理由で、何を作ったらいいのかも解らなくて、うろうろするしかないのに、上級生たちは「何やってんだ。」と怒鳴っている。かくして、初めての食当は殆んど何もしないうちに終わり、食当は大目玉を食った。次もその次の食当も何もできなかった。せめて中国人の手伝いをしようとしても、邪魔がられて追い返されたり、成功しても、大したことはやらせてもらえないで、中国人流になってしまった。さらに悪いことには、中国人の料理は三時間も四時間もかかるのだった。時間の観念の乏しい中国人には時間どおりにやることは望めなかった。自由時間でも、おかまいなく彼らはピーマンの芯をとったりしていた。食当も食当外も、自由時間もなく手伝わなければならないといった始末であった。食事ごとに時間が遅れ、食当が責められる。食当も上級生の悪口を言うと上級生はさらに感情的になる。この悪循環で、険悪なムードで楽しくなんかなかったのだ。自転車行動が始まってからも、日中両サイドの相互理解は遅々として進まなかった。嘉峪関城内での食当少々強引ではあったが、効果はあった。嘉峪関に着いた時も四時間位食当をしたが、途中でバレーボールを始めたりしてだらだらとしたものだったが、中国人と日本人が挨拶を教えあったりして、うまくゆきそうな感じだった。その夜から雨が降り出し、出発の朝も雨が降っていた。

その朝は新人全員が食当をやり、一行の全員の味噌汁とカレーか何かを作ったのだが、中国人は一人も味噌汁や漬物などに手をつけようとしなかった。そして中国風のスープかなにかを飲んでいた。しかしこの時の食当は両側の考え方の違いをなんとかしなければならないという問題意識をはっきり実感させた点において大きな意味があった。やっと日中役割分担論が両サイドの討議の対象になった。幾分、両側が譲り合い、時間も正確に出来るようになってきた。しばらくすると日本人と中国人は溶けあって食当をやるようになった。同じことを同じようにやることに何の抵抗もなくなって、ちょっとした例えば、「水をくんできてくれ。」とか「油をくれ。」とかいったことは通じるようになってきた。中国人の使っている調味料を説明してもらって使ったりするようになってきた。　子やそば作り、スープの具のようなもののつくり方も覚えてしまったし、肉の塊を製肉することもできるようになった。コックやコック助手とも仲よくなった。コックは山本厚太郎、助手は小林旭にそれぞれ似ていたので『コータロー』『アキラ』と呼んで、食当時でなくても親しく近寄って行ったりした。行動も安西に着き、後半になると殆んどもめることもなくスムーズな食当が続いた。問題といえば途中で病人が続出して、食当の回転が不規則になったくらいで、プロパンガスが切れた時も、ここぞとばかりにフォエブスが役に立った。

殆んど食当の事になってしまったが、他にもたくさんの貴重な体験をすることができた。特に嘉　興、南湖公社、鳴沙山等ですばらしい景色を見ることができた。砂漠の中を走っていて、オアシスに出会うと大変心がやわらぐような感じがして、一種の、山に登った時と似ていて、ちょっと違った感激のようなものがあった。

私の見た中国人

新人　山　口　　浩

話はいきなり上海の町の夕暮れ時、我々三人は上海の市街をブラリと見物。通りは人がたくさん歩いていて混雑している。我々の一人が若者に何やら声をかける。彼も答える。我々は立ち止まり会話を交そうとする。回りに人が集まってくる。我々はすっかりとり囲まれる。そこらじゅうから話しかけては、自分たちで笑っている。からかわれているのか全く困った。不明白なのだ。ある一人が私に表面のガラスにひびのはいった時計を見せてしきりとせがむ。交換してほしいらしい。私の方もボロ

で換えてもよいと思ったが、何となく気にかかったのでやめた。

つづいて列車中で、どこのあたりかは忘れたのだけれど、私はいすに寝ころがった。とそこへまくらを差し出された。それまで黙って窓の外を眺めていた解放軍兵士である。彼らは軍服を着ているのですぐわかる。私はありがたく受けとった。兵士らしくない行動だ。安西の停滞中にも三人の兵士と筆記まじりの話をしたことがあった。何故かやさしい顔をしていた、ちっともいかめつくない。警官もそうである。蘭州市内を三人で歩いていた。道に迷ったわけではないがどう行こうかもめていた、そこへ警官がかけつけてどうしたのかたずねてくれた。何と親切なのだ。再び列車中、長い列車の旅。我々は一駅到着するごとに外に出て気分転換をはかっていた。ある駅の出来事、我々いつものように列車を降りた。我々の一人がちいさな子どもに話しかけようとする、とそのとき、列車の窓から大声でどなってきたおやじがいた。何やら我々に何か言っている。子どもは親のそばにもどっておびえている様子。それでも彼は遠くから話しかける、列車の男はいちだんと興奮する。我々に反感を持っているらしい。それ以上はなかったがあとでこんな人もいるのかと深刻になる。

つづいて蘭州。蘭州では我々にいろいろ世話してくれた蘭大生がいた。彼らはよく我々の質問に答えてくれた。その中で一つ気になること、私が蘭大生の一人に将来の仕事のことをたずねた。彼らの仕事の選択範囲はきまっていて、彼は自分の将来が不満なのか最後に「服従」と書いてよこした。考えさせられることである。

酒泉の人々、親善バスケットの時といい、歓迎会のとき、あるいは出発の時、すごい人の集まりだった。なんであんなに集まるのか、我々にはあまり興味はなかったらしい、とにかく驚いた。

敦煌で、まず莫高窟内に入るとき、入場料が要るはずなのに、おそまつの門のわきを払わずに入る。わざとやったのではなくどこで払うかわからないまま入ったわけだが、それにしても中国人ののんきさはなんだ。もう一つ、シャレた服装の集団がいた。顔つきは、中国人だが裕福な環境で育った感じで、全く珍しい集団だった。彼らは香港から来たそうで、中国本土とは、生活、経済、文化のちがいの大きさが想像できた。

最後に我々のめんどうを見てくれた劉さん、谷さん、李さんはじめ医者の高さん、コックの常さん、酒泉中学の先生方、また名前は忘れましたが、はっきり顔はおぼえています、他の人たち、ほんとうに私たちのめんどう

を見てくれました。たいへんいい経験をしました。ありがとうございました。

中国合宿後 ―その二―

新人　渡辺　仁

半年が経った。中国合宿の影響が大きかったのか小さかったのか未だに分からない。たぶん大きいのだろう。他に比較できる旅がない。一カ月も旅をしたのは初めてだ。外国へ行ったのも初めてだ。中国語がわからない。中国の自転車は走りにくい。中国は大きい。日本は狭かった。日本人のいやらしさ。産業が発展し、街が都会化されることによって起こる諸々の害悪。こう考えてみると中国に行って良かった。合宿に参加して良かった。しかし、この合宿が終わってからというものワンダーフォーゲルが分からなくなった。そんなことを考えずにただ歩いていればいいのだが自分のやっていることの意義が分からなくなってきた。今、僕はピンチだ。

僕はもうワンダーフォーゲルが何かなど考えたくもない。探検部でなく山岳部でなくハイキングクラブでもない。けれど僕のやりたいことは探検部にも山岳部にもハイキングクラブにもある。要するに何でもかまわない。心のおもむくまま、感性の欲望のままに歩けばいいのだ。僕は汽車の中で考えた。何しろ汽車の中はひまで考える時間が遊んでいた。日本では味わえないこの汽車の旅は実にいい。本当にいい。何を考えたかというと、果てなく続くゴビを何日も何十日も、いや何カ月もかけて歩くことだ。ベージュ色の地肌が車窓を流れる。どんどんどんどんいや、サラサラサラサラ流れて行く。何時間も似た様な地肌がぼんやりした目の前の方や、後の方で流れてゆく。とにかく見た者にしかわからないあの不気味な感激。いやになる程、目が痛むまで見てから、ふと突然思ったものだ。「これは歩いたらおもしろい」その時は本気で歩くことを考え、何年の後かにこっそりやってきて馴染のサックを背に歩いてやろうと思った。「たぶん一週間も歩けば飽きるだろう。一カ月歩いたら気がおかしくなるだろう。一年歩いたら人間が変わるかもしれない。」本気で考え、水や食糧の事まで心配していた。しかし、これを書いている現在考えると、全くばからしいという以外にない。今のところやる気はない。気が狂ったらやるかもしれない。しかし、どうせ人の歩きそうにない所を歩くならやっぱり処女地に限る。鉄道の通っている土地では自然に対するロマンは薄い。処女地ならロマ

ンの上をゆくからおそろしい。その恐ろしさがなんともたまらないのだ。鉄道の通った土地では人間の中におもしろさと恐ろしさを求めたい。その意味において、つまり違う国の人間を知るという意味で、今回の旅は成功だったと思う。（その意味での成功であり、総合的にはどうか分からないし、個人的総合的には準失敗である）つまり中国合宿は少なくとも六百キロ直流に意義があるのではなく、三十日交流に多大な意義があったのだ。今思い出しても六百キロの自然や道の様子などよりもそれ以外の記憶の方が鮮明だ。中国人の人間味の中に、日本人の中で急速に失われつつある物（欠けている物）を感じた事もあった。旅の中で僕はつい「日本人はばかだ！」と叫んだのだ。そしてまた中国人も日本人と同じようになりそうな危機も感じた。何が悪いのかは分からない。（たぶんアメリカの大統領が悪い、もちろん僕の頭も悪い）しかし、そのような交流の意義において、常にアウトサイダー的だった自分は情けない。内向的性格ゆえどうしようもないことでもある。しかしそんな僕にも天は好機を与えてくれた。僕は旅人である僕らに対する中国人青年の熱を身に感じた。大きなショックは二度あった。最初は蘭州大学との交流会で俳句を作る一学生と話をした時。次は嘉峪関の先の小さな集落で自転車を止めた時に集まってきた人民の中の一青年がニコニコしながら何か話しかけ、僕の手帳をとるなり何か熱っぽい中国文を書いてくれた時のこと。どちらも異常な熱を感じ、自分の体が震えていた。あまり多くはなかった僕の交流の中でこの二人は想い出に深い。

ところで話は本題に戻る。ワンダラーとトラベラーはどう違うのか、両者の間に何があるのかが問題だ。僕は僕の頭で考える限り、今合宿はトラベラー若しくはツーリストのプロジェクトであり、ワンダラーのとは言い難いと思う。今書いている事は実はどうでもよいことなのだ。がしかし、もしまた次にこのクラブで海外合宿をたくらむ場合に考えてもらいたい部分なのだ。ワンダーフォーゲル部の活動と中国合宿の間のギャップ。僕は分からない。それでもとにかく外国に出る事はいい事だ。特に学生のうちにトラベラーとして出る事はいい。確かに視野は広がるようだ。方法、手段はどうであれ、個人の物を見る態度がしっかりしていれば多大な意義を持つ。外国に行くのはいい。しかしワンダーフォーゲルっていったいどういう事をするクラブなのかな、と考える時、何か簡単に外国へ行くことはできなくなる気がするのだ。僕はバックツアーはいやだ。みんなが行くから行くという人間の集まる場所も本当はいやだ。でも分からない。

とにかく僕はピンチだ。

最後にちょっとだけ。中国合宿後その一における時点では終始偉大なる自然に対する感激と歓喜の叫びのみであった。もっとも合宿中には日本に帰りたいという最も率直な感想もあった。しかし合宿後はとにかく自然の雄大さが僕を圧倒していた。が、ここに来て神なる自然は姿を隠し、人間と、その精神と欲望とが頭角を現わしてきた。その三の時点において中国合宿がどのような形で現われてくるかは想像もつかない。しかし、この時点において中国合宿は僕に悲情に厳しい問題を投げかけた。僕は暫し立ち竦む。

関係者・協力者リスト

関係者リスト（日本）

氏　名	住所・備考	TEL
渡部道子	〒103　中央区日本橋兜町12−7　兜町第3ビル 新日本国際株式会社社長　12−7	669−4021
長谷部友樹	同　上	〃
白西紳一郎	〒107　港区赤坂4−3−30　横川ビル 日中協会幹事兼事務局長	583−6818
河野謙三	〒100　千代田区永田町参議院議員会館内 元参議院議長，田中協会顧門，稲門体育会会長	508−8522
今井武志	河野謙三氏秘書	〃
長沢和俊	〒125　葛飾区東金町5−48−20 早大文学部教授	607−8753
杉山克己	〒145　大田区日園調布2−48−12−301 毎日新聞論説顧問	721−3551
趙永華	〒107　港区元麻布3−4−33 中国大使館内 中華人民共和国駐日本国大使館 文化部一等書記館	403−3385
関根正治	〒107　港区赤坂1−9−3 日本自転車会館3号館 自転車普及協会，自転車文化センター副所長	582−3311
大蔦文人	自転車普及協会	〃
江橋健夫	〒272　千葉県市川市八幡1−1−1 交通対策課，計画係	0473 34−1111
磯野武	〒163　新宿区市ケ谷砂土原1−2　保険会館 日本ユースホステル協会　3F	269−5831
今越四郎	〒101　千代田区鍛冶町1−8−8 株式会社イマコシ専務取締役	256−1888
大賀由普	〒160　新宿区高田馬場4−4−11 カモシカスポーツ	371−4333
石原隆一	〒100　千代田区霞が関3−2−4 ビクタービデオセンターVIC東京	580−2663

氏　名	住所・備考	TEL
石川昭子	〒101　千代田区神田淡路町1−13　山崎ビル INO企画	253−0672
柳川時夫	〒100　千代田区一ツ橋1−1−1 毎日新聞　学芸部	212−0321
高橋　弘	同　事業部	〃
今田好彦	同　北京特派員	〃
東　康生	同　出版写真部	〃
瀬下恵介	サンデー毎日編集次長	〃
北川敏夫	〒100　千代田区一ツ橋1−1−1　毎日報送 毎日放送，報道部長　東京支社	213−1611
中村清次	〒150　渋谷区神南2−2 NHKシルクロード班，チークディレクター	465−1111

協力者・利用機関

- 新日本国際株式会社
- 日中協会
- 中国国際旅行社蘭州分社
- 自転車普及協会
- 自転車文化センター
- 市川市役所
- カモシカ・スポーツ
- 日本ユース・ホステル協会
- ビクタービデオセンター
- 中国大使館
- 毎日新聞社（後援）
- 毎日放送（〃）
- 南北社
- 日本運搬社
- 太田和夫
- 片岡　功
- 庄　直昭
- 大栄工務店
- 法政大学WV部

（順不同，敬省略）

関係者リスト（中国）

F＝女性

氏　名	勤務先・備考
劉　大　庸	甘粛省旅遊局業務処課長
谷　　杰	中国国際旅行社蘭州分社通訳
慎　麗　華	〃　　〃　Ⓕ
鄭　光　明	〃　上海分社日本科（上海旅遊公司）
陳　彩　霞	〃　　〃　Ⓕ
李　　忱	甘粛省旅遊局業務処
王　玉　名	蘭州大学　経済学部　2年
胡　慶　华	〃
杜　世　佛	〃　歴史学部　2年
劉　同　起	〃　〃
林　楽　昌	〃　哲学学部　2年
聶　大　江	〃　副学長
紀　浩　夫	〃　校長事務室主任
張　映　槐	〃　外事科長
唐　　佛	〃　団委書記
梁　学　珉	〃　学生科長
王　　雷	〃　学生会副秘書長
昊　瑞　琇	蘭川大学外国語学部講師　Ⓕ
馬　錫　保	雁准人民公社社長
泰　祎　玉	中国国際旅行社酒泉支社副経理
張　思　平	〃　科長
余　良　遷	〃　通訳
柳　潤　波	酒泉地区専員
劉　稀　銘	酒泉中学校長
龔　留　志	〃　教師（化学）
李　　鋒	〃　〃（体育）
張　　興	〃　〃（〃）

氏　　名	勤務先・備考
李　守　奎	酒泉中学教師（物理）
張　徳　巧	酒泉地区体育運動委員会
高　志　才	酒泉地区医院　医師
田　君　才	〃　　看護人
常　占　元	中国国際旅行社酒泉支社料理人
李　興　国	〃　　〃
周　志　漢	〃　　運転手
李　玉　杰	〃　　〃
高　冠　威	甘粛画報社カメラマン
泰　民　鋼	嘉峪関外事事務室専員
高　風　山	〃　文物研究所所長
阮　開　先	玉門石油管理局事務室副主任
蘭　[illegible]　楷	〃　製油工場工場長
史　　敬	〃　油井C509隊隊長
潘　志　仁	甘粛省外事事務室主任
芦　逢　奎	酒泉地区　〃
李　天　昌	敦煌県知事
荣　思　奇	〃　博物館
張　志　海	楊家橋人民公社社員
劉　国　信	〃
楊　宏　忠	〃
楊　　栄	〃
陳　玉　清	〃
吴　　彊	蘭州大学学生
殺　新　文	楊家橋人民公社書記
李　会　生	〃　　副主任
谷　庆　春	甘粛省旅遊局経理
楊　達　山	中国国際旅行社蘭州分社
崔　　寧	〃　　上海分社日本科
程　素　华	〃　　〃

新聞・雑誌等掲載一覧

月日	メディア	備考	月日	メディア	備考
S56 4.25	毎日新聞	朝刊(22)	9.14	サンケイ新聞	朝刊(16)
5.18	早大生協ニュース	314号	9.17	早稲田ウィクリー	399号
6.10	毎日新聞	千葉版	9.24	早稲田スポーツ	156号
6.25	早稲田ウィクリー	396号		サンデー毎日	10月4日号
7. 7	早稲田スポーツ	155号		サイクルスポーツ	'81 11月号
7. 9	早稲田学生新聞	「サークル訪問」		蛍雪時代	11月号
7.17	朝日新聞	朝刊「この人に聞く」		Out door	VOL. 6, No 4 通刊14号
	サンデー毎日	8月2日号	10.19	毎日新聞	夕刊(10)写真展の告示
	サイクルスポーツ	'81 9月号	10.29	毎日小学生新聞	
8.23	甘粛日報	蘭大との交流会		ほうゆう	'81 10月号
8.12	〃	酒泉を自転車で出発		早稲田学級	'81 11月号
8.25	毎日新聞	朝刊(22) 中国通信	S57 1.23	早稲田スポーツ	第158号
〃	朝日新聞	〃	2. 3	甍	早稲田大学商学部報
〃	読売新聞	〃	S56 9. 7	毎日放送	18:00のニュース「MBS NOW」
9. 4	毎日新聞	夕刊「きょうの3面」	10.22	朝日放送	三枝の国盗りゲーム

編集後記

先ず、何よりも中国合宿に際しまして、絶大なる御協力をいただきました各関係諸機関の方々、神沢部長、顧問先生、諸先輩の皆様方に心より御礼申し上げます。多くの方々の御好意によりまして、合宿を終えられましたことはたいへん有難いことと思っております。本当にありがとうございました。

印刷所からの帰り道、山溪でも買おうかなと、ふと開いた一頁に、二十八代OB石井氏が事務局長になっている山岳会が、南房総に新しくハイキングコースを刈り開いたという記事が載っていました。「新しい道を拓く」事。翻って一月の山小屋焼失を考えてみるに、また早大ワンゲルも一歩一歩、麓から新しい道を開いていくことこそ最も肝要であると考えます。一つの計画が終った今、新たな目標に進んでゆく現役の情熱に期待しております。（'82年春）

佐藤　淳　　佐藤佳一
関口勝正

中国合宿報告書

発行日　昭和五十七年三月
発行者　早稲田大学体育局ワンダーフォーゲル部
編集者　佐藤　淳
発行所　東京都新宿区戸山町四一
早稲田大学体育局内
早稲田大学ワンダーフォーゲル部
電話　二〇三ー四四七九
印刷所　千加真印刷株式会社
中央区日本橋茅場町三ー三ー二
電話　六六八ー七五〇八（代）